

令和3年度（2021年度）

社会調査実習報告書

「大学生の生活と意識に関する調査」

東京成徳大学 応用心理学部

臨床心理学科 社会調査実習受講者

## 目次

1.	SNS の利用の仕方と自己肯定感の繋がり	1
2.	SNS 依存に関する調査	7
3.	SNS 依存・ネット友だち	10
4.	コロナによる携帯利用の変化	14
5.	オンデマンド型の授業と双方向型の授業の違いについて	18
6.	オンライン授業（リアルタイム・オンデマンド）のメリット・デメリット	23
7.	新型コロナウイルスによる人間関係と学習への影響	30
8.	コロナ禍における人間関係の変化	36
9.	コロナによる大学生の生活への影響	40
10.	大学生の新型コロナウイルスによる生活とコミュニケーションの変化	43
11.	コロナ前後における生活の変化に伴う気分の変化に関する調査	48
12.	大学生の将来への不安に関する調査	56
13.	色が及ぼす心理的影響	59
14.	おしゃれや服装へのこだわりとコンプレックスの関係	62
15.	コロナ禍における身だしなみの変化	71
16.	推しと SNS	77
17.	対面時と非対面時、また、顔や名前を知っているかで印象が変化するか	82
18.	男女の友情は成立するか	86
19.	自己肯定感と親子関係の繋がり	91
20.	性格・パーソナリティと行動の関連	95
21.	他者との関わりとパーソナリティ	100
22.	オンライン授業における大学生の感じているメリット・デメリット	103
23.	オンライン授業の利便性と自宅の通信環境の結びつきについて	108
24.	一人暮らしのアルバイトと抑うつ症状の関連性	111

# SNS の利用の仕方と自己肯定感の繋がり

19C115 今村愛梨、19C119 歌代舞優  
19C155 桑島みのり、19C206 藤野毬愛

## 目的

SNS の利用が多くの人にとって実情生活の重要な一部となっている。しかし、それがネット依存や不安を煽ることに繋がっていると、警鐘を鳴らす専門家もいる。先行研究として、2017 年 11 月にキャリアタスが行った「大学生のインターネット及びスマートフォンアプリ利用実態調査」によると、インターネットの利用目的では SNS やメール送受信などの通信目的が約 9 割であった。

大学生の精神的健康が SNS 依存傾向に与える影響についての論文（二宮，2017）によると、自尊感情の低さが Twitter 依存傾向に与える影響は虚栄的自己提示によって媒介されることが示された。

今では連絡手段としても SNS は一日中使用されており、その側面が大きく出ている。しかし、SNS を情報を得る場としてしか利用していない人もいる。また、写真や文章を用いて自分を表現し肯定的な反応を得ることに意義を感じる人もいる。この両者での違いは、SNS への依存に関係があるか調べることを目的とする。

SNS の定義として、ここでは Twitter、Instagram のみのアプリケーションサービスとする。また、自己肯定感の定義としては、肯定的な反応を得ることで生まれる自尊感情とする。

## 方法

### 調査方法

Microsoft Forms を用いて、調査票を配布、回答を得た。

### 調査対象者

社会調査実習履修者 70 名のうち 68 名（男 26 名、女 42 名）に調査票を配布した。

調査時期 12 月 2 日～12 月 23 日

## 結果

有効回答数 59 名（男 24 名、女 32 名、その他 3 名）

本調査の結果は SNS を利用している人の回答に限定するため、回答数は 51 名となった。

まず、SNS を今やめられるかという質問に対し、やめられると答えた回答者は 13 人であった。この人数は回答者全体のわずか 25%であり、半数以上の回答者は SNS をやめることはできないという結果になった。

次に、SNSをやめられる人とやめられない人の投稿するものの違いに着目すると、やめられると回答した人の46%が投稿はせず閲覧のみしているという結果であった。他は自分または友人が23%、自分の好きな人物が15%、外出先とその他が8%だった。SNSをやめられない人のうち閲覧のみと答えたのは18%で、やめられないと答えた人が投稿しているもののうち最も多かったのが、自分または友人で42%であった。他は自分の好きな人物と外出先が16%、その他8%であった。(図1)

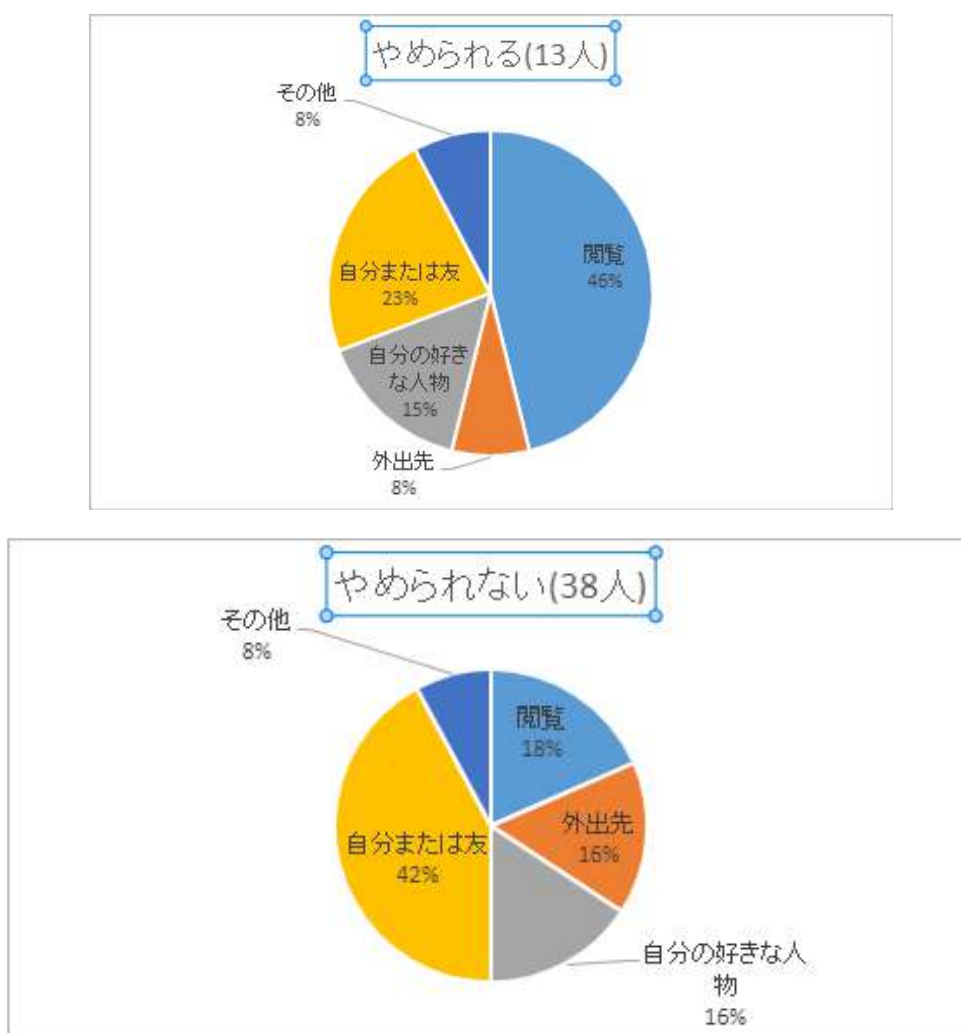


図1 SNSをやめられる人とやめられない人の投稿の内容の割合

SNSを利用して嬉しいと思う瞬間はあるかという質問では、よくあると答えた人が8人、たまにあると答えた人が20人、あまりないと答えた人が11人、全くないと答えた人が2人、わからないと答えた人は10人であった。SNSを利用して嬉しいと思う瞬間の具体例として、人と交流をもてた時、肯定的な反応をもらった時、同じ趣味の人が見つかった時などが挙げられた。また、SNSを利用して気分が落ち込むことがあるかという質問では、よくあると答えた人が3人、たまにあると答えた人が12人、あまりないと答えた人が19人、全くないと答えた人が6人、どちらともいえないと答えた人は11人であった。SNSを利用して気分

が落ち込む瞬間の具体例としては、攻撃的な投稿やマイナスな投稿を目にした時、知り合いが楽しそうにしているのを見た時という回答があった。

次に、自分のことが好きかという質問では、好きと答えた人が 20 人、嫌いだと答えた人が 12 人、どちらともいえないと答えた人が 19 人であった。

SNS を利用していて嬉しいと思う瞬間がよくあると回答した 8 人のうち、自分のことが好きと回答した人は 7 人であった。嬉しい瞬間はたまにあると回答した 20 人うち、自分のことが好きと回答したのは 6 人で、7 人は自分のことが嫌い、どちらともいえないと回答した人は 7 人であった。SNS で嬉しい瞬間がよくあると感じている人は自分を肯定的に捉えている傾向が見られたが、嬉しい瞬間はあまりないと回答した人が自分を嫌いというような結果は表れなかった。(図 2)

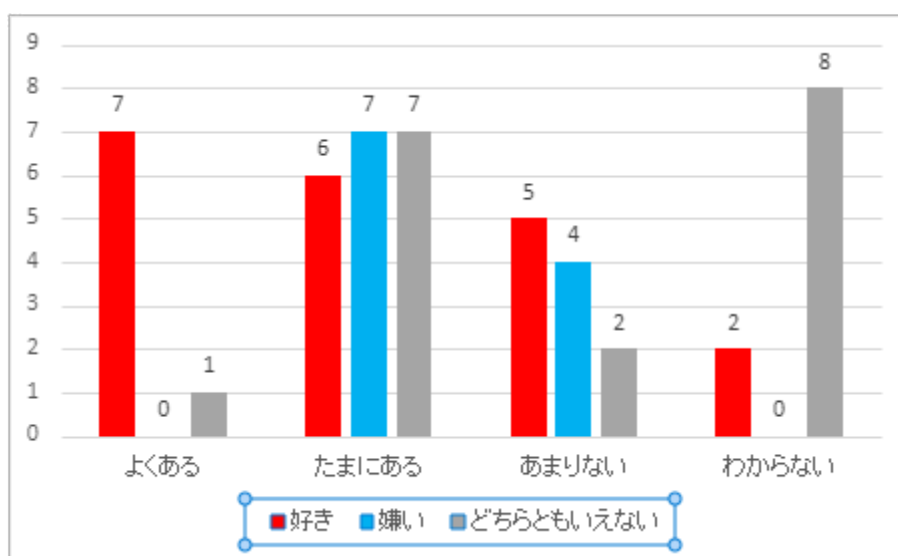


図 2 SNS 利用時嬉しいと思う瞬間の有無と自分を好きかどうかの相互関係

自分のことを好きかどうかの結果と、SNS への投稿内容の結果の相関(図 3)を見ると、自分のことを好きと答えた人、嫌いだと答えた人、どちらでもないと答えた人全て自分または友人の投稿が最も多い回答であった。投稿はせず閲覧のみと答えた人の割合で最も多かったのは自分のことを好きと回答したグループだった。また、外出先のことのみを投稿した人のうち、自分のことが嫌いだと答えた回答者はいなかった。

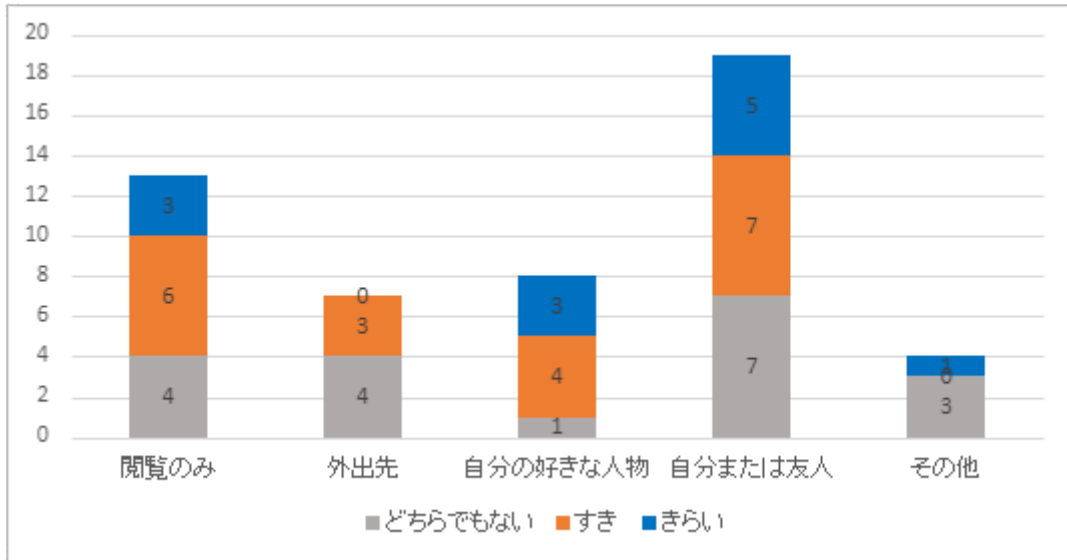


図3 自分のことを好きかどうかと SNS の投稿内容の相互関係

自分に長所はあると思うかという質問では、あると答えた人が 39 人、ないと答えた人が 11 人で、あると答えた人のうち SNS に投稿するものは自分または友人という回答が 39%、ないと答えた人では 36%と、両者とも自分または友人の投稿が約 4 割を占めた。(図 4)

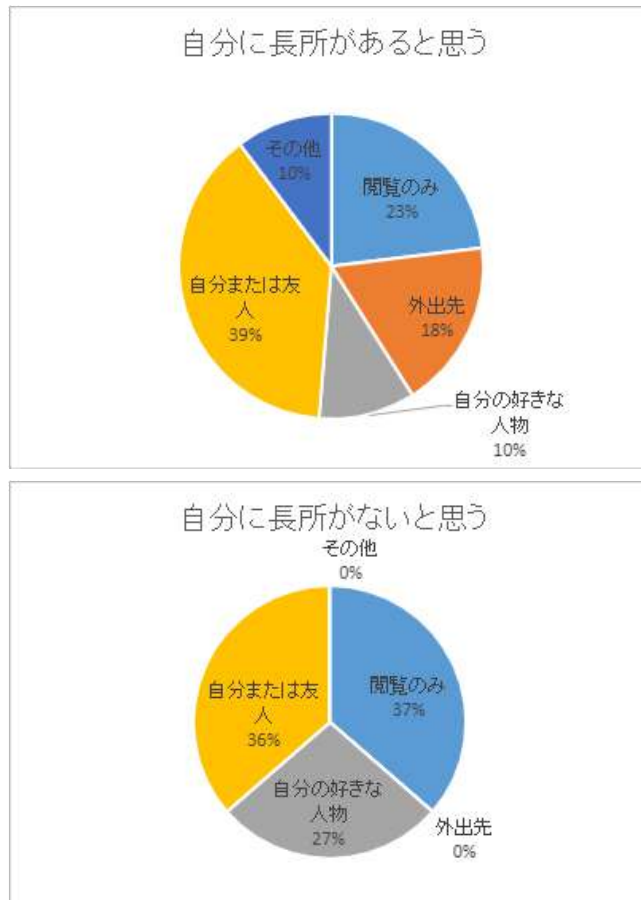


図4 自分の長所の有無と SNS の投稿内容の割合

## 考察

今回の調査では SNS の利用の仕方の違いは、自己肯定感の有無に関係があるか調べることを目的とした。その結果、SNS に外出先のことだけを投稿し人物を写さない人は、自分に何かしらの長所があり、自分のことを嫌いとは思わない、自己肯定感が欠如しているわけではない傾向にあるということがわかった。しかし、自分または友人のことを主に投稿している群は自己肯定感との相互関係が得られなかった。

この結果から、SNS の利用の仕方と自己肯定感は、明確に相互関係にあるとは限らないことがわかった。

しかし、SNS を利用していて嬉しいと思う瞬間がよくあると答えた群のうち、自分のことが嫌いだと回答した人はいなかったことから、SNS に日常的に喜びを見出すことができる人は自己肯定感が高い傾向にあるのではないかと考えた。

SNS に外出先のことのみを投稿している群に自分のことを嫌いと思わない人が多くいたのは、人を重視しておらず、そして周りに左右されずに、SNS と程よい距離感を保つことができているからという背景があるのではないだろうか。このことを踏まえると、周囲の目を気にして SNS を利用していると、心が疲弊しマイナスな感情が浮かび、結果自己肯定感が下がるという可能性が十分にあると言える。SNS を利用していてツイートが伸びない時に気分が落ち込むと回答した人は、自分のことが嫌いだと答えている例もある。

自分に長所があると答えた 39 人のうち自分のことが嫌いだと答えたのは 4 人で、16 人は自分のことが好き、19 人はどちらでもないと答えた。加えて図 4 から、自分に長所があると思う人の約 4 割が自分または友人のことを投稿している。一方で自分に長所はないと答えた 11 人のうち自分のことが嫌いだと答えたのは 8 人で、好きと答えたのは 2 人、どちらともいえないのが 1 人だった。自分に長所はないと回答した人も、約 4 割は自分または友人のことを投稿していることから、長所の有無と自己肯定感の繋がりには、SNS への投稿内容はあまり影響していないことが読み取れる。しかし、先ほど述べた外出先のことのみを投稿する群は自己肯定感が低くないという点においては、自分に長所がないと回答した人で外出先のことのみ投稿する群が 0 人だったことからより説得力を増したであろう。

また、SNS を利用していて嬉しいと思う瞬間があるかはよくわからないと回答した群は、80%の人が自分のことを好きとも嫌いとも言えないと回答している。これは、この群の人は SNS から良い面でも悪い面でもあまり影響を受けていないことを示していると考えられる。だが、嬉しいと思う瞬間があるかわからないと答えた群の 60%の人は SNS に自分または友人のことを投稿しているという結果から、ここでも投稿内容との関連は認められなかった。

本調査では、SNS を利用している時に嬉しいと思う瞬間や気分が落ち込む瞬間の具体例の回答を任意としてしまったため、SNS に気持ちが左右される要因がリアクションの有無など自分主体のものなのか、マイナスな意見を目にしたなど他人主体のものなのかの違いを見つけるための十分な回答数を得ることができなかった。気持ちが左右される要因が自分にあるか他人にあるかの違いで、自己肯定感への影響の仕方も異なるのではないだろうか。この点が本調査の課題であると考えられる。

今回は SNS 世代である 20 代前半の大学生を調査対象としたため、SNS の利用の仕方によって心の面で SNS から良くも悪くも影響を受けている回答者が多いのではないかと考えていたが、実際は SNS に依存し過ぎず、適度な距離感を保っているユーザーも一定数いるということがわかった。そして、適度な距離感を保っているユーザーほど SNS によって自己肯定感が左右されることは少ないという結果が得られた。



## SNS 依存に関する調査

19C175 鈴木 小夏

19C165 柴田 希星

### 1. 問題と目的

昨今、着実に便利になっている世の中で、生活に切り離せないものになりつつあるのが、スマートフォンである。スマートフォンには、メール、通話、撮影といった携帯電話の機能と、情報検索、ソーシャル・ネット・ワーキング（以下、SNS とする）といったネットワークを駆使した機能が備わっている。そんな中、主に若年層が SNS に依存する人が増加している。厚生労働省研究班の 2017 年度の推計によると、中高生の 93 万人（7 人に 1 人）がオンラインゲームや SNS に没頭するなどの「ネット依存」が疑われているといわれている。そこで、東京成徳大学に在籍している社会調査実習履修者の SNS 依存者の割合はどのくらいなのか、疑問に感じ、本調査を実施した。

### 2. 本調査の質問

「SNS を利用、または見れないと不安になる」「SNS を利用、または見ると落ち込む」「暇さえあれば SNS の画面を見ている」「SNS 以外への興味が薄くなった」「SNS を利用、または見始めてから睡眠時間が低下した」「SNS を利用、または見始めてから姿勢が悪くなった」「SNS を利用、または見始めてから目が悪くなった」「もともと予定してたより長時間 SNS を利用、または見てしまう」「SNS の利用が原因で家族や友人との関係が悪化している」「SNS を利用、または見ている時間や熱中している度合いについて、ごまかしたりウソをついたことがある」「ほかにやらなくてはいけないことがあっても、まず先に SNS を利用、または見ることがある」。

#### SNS 依存の線引き

個人で「そう思う」「ややそう思う」が全体の回答うち、5 個以上の場合を SNS 依存とした。

### 3. 方法

#### 調査時期

12月23日～1月15日。

#### 調査対象

東京成徳大学に在籍している学生のうち、社会調査実習履修者 70 名のうち 68 名（男性 26 名、女性 42 名）。

#### 調査方法

Microsoft Forms を用いて、調査票を配布、回答を得た。

## 回答方法

年齢を回答するのは記述式、性別の回答は「男性」「女性」「答えたくない」の3件法選択式、SNSを利用または見ているかの回答は「はい」「いいえ」の2件法選択、本調査の質問の回答は「そう思う」「ややそう思う」「あまりそう思わない」「そう思わない」の4件法選択式であった。

## 4. 結果

有効回答は41名（男性20名、女性20名、その他1名）であった。「SNSを利用、または見れないと不安になる」という質問に、そう思うが9人、ややそう思うが17人、あまりそう思わないが10人、そう思わないが5人であった。「SNSを利用、または見ると落ち込む」という質問に、そう思うが4人、ややそう思うが8人、あまりそう思わないが20人、そう思わないが9人であった。「暇さえあればSNSの画面を見ている」という質問に、そう思うが15人、ややそう思うが14人、あまりそう思わないが8人、そう思わないが4人であった。「SNS以外への興味が薄くなった」という質問に、そう思うが0人、ややそう思うが3人、あまりそう思わないが18人、そう思わないが20人であった。「SNSを利用、または見始めてから睡眠時間が低下した」という質問に、そう思うが7人、ややそう思うが16人、あまりそう思わないが6人、そう思わないが12人であった。「SNSを利用、または見始めてから姿勢が悪くなった」という質問に、そう思うが13人、ややそう思うが7人、あまりそう思わないが9人、そう思わないが12人であった。「SNSを利用、または見始めてから目が悪くなった」という質問に、そう思うが8人、ややそう思うが10人、あまりそう思わないが9人、そう思わないが14人であった。「もともと予定してたより長時間SNSを利用、または見てしまう」という質問に、そう思うが16人、ややそう思うが13人、あまりそう思わないが7人、そう思わないが5人であった。「SNSの利用が原因で家族や友人との関係が悪化している」という質問に、そう思うが1人、ややそう思うが4人、あまりそう思わないが8人、そう思わないが28人であった。「SNSを利用、または見ている時間や熱中している度合いについて、ごまかしたりウソをついたことがある」という質問に、そう思うが0人、ややそう思うが10人、あまりそう思わないが10人、そう思わないが21人であった。「ほかにやらなくてはいけないことがあっても、まず先にSNSを利用、見ることもある」という質問に、そう思うが14人、ややそう思うが12人、あまりそう思わないが5人、そう思わないが10人であった。個人で「ややそう思う」「そう思う」が全体の回答から5個以上の方は、41人中24人で、約6割となった。それぞれの内訳は、0個が3人、1個が5人、2個が2人、3個が4人、4個が3人、5個が4人、6個が8人、7個が5人、8個が4人、9個が3人、10個が1人、11個が0人であった。（図1参照）

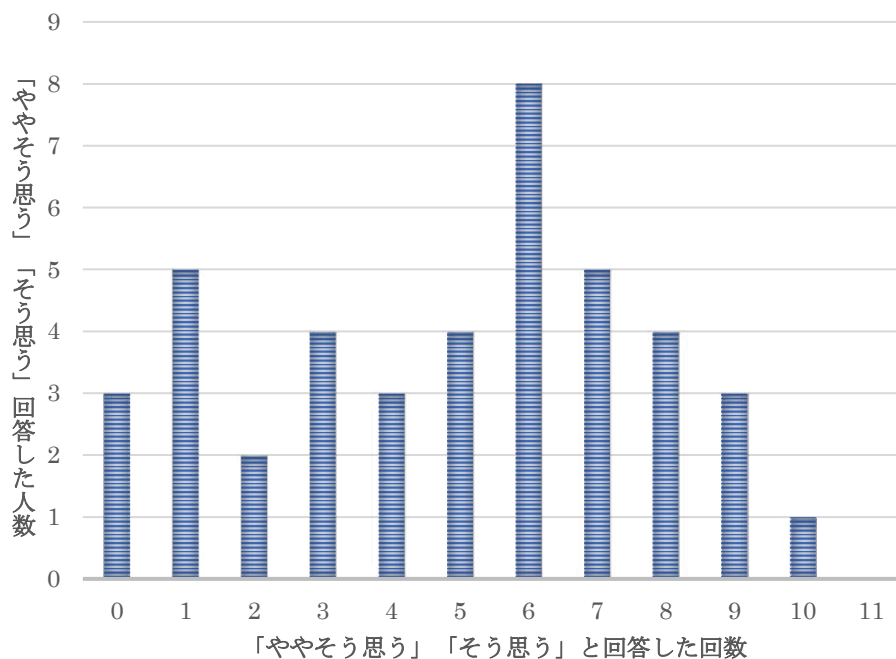


図1 個人で「ややそう思う」「そう思う」と回答した回数と人数

## 5. 考察

本調査では、目的として東京成徳大学に在籍している社会調査実習履修者の SNS 依存者の割合はどのくらいなのかを明らかにしたいというものだった。結果は41人の約6割というものだったが、この結果は、本研究参加者が少ないため、社会全体とリンクさせるには難しく、東京成徳大学に在籍している社会調査実習履修者だけの結果だと言える。その中で約6割という高い数値が出た背景には、大学生というある程度自由が利く年代・立場が関係しているのではないかと考察できる。

## SNS 依存・ネット友だち

19C105 新井 琳子

19C173 杉山 美貴

19C201 樋野 綾香

### 1. 問題と目的

現代の日本では、デジタル化が進みインターネットや SNS などが急速に普及している。それに伴い、利用頻度や利用者数も増え、没頭し依存してしまう人が増えている。橋元良明 (2018) によると、若者の 9 割がスマートフォンを所有し SNS やゲーム、買い物などを楽しんでいる。そのため、スマートフォンを使えばある程度のことのできてしまう時代になりつつあるのだ。逆を言えば、インターネットに没頭してしまい、スマートフォンを手放すことのできない若者も多いであろう。その中でも、気軽に利用できる SNS に依存してしまう若者が多くいると考えられる。依存により生活面、心理面、身体面などに様々な悪影響を及ぼすこともある。睡眠不足、睡眠の質の低下、イライラ、他者への警戒心の低下など他にも複数の影響が考えられるのだ。

そこで本研究では、SNS 利用者がどれほど依存しているか明らかにすることを目的とする。

### 2. 方法

#### 調査方法

Microsoft Forms を用いて、調査票を配布、回答を得た。

#### 調査対象者

社会調査実習履修者 70 名のうち 68 名 (男子 26 名、女子 42 名) に調査票を配布した。

#### 調査時期

12 月 2 日～12 月 23 日

### 3. 結果

有効回答数は、52 名であった。

「SNS を利用していますか」の質問に「はい」と答えた人は 49 名で、「いいえ」と答えた人は 3 名であった。利用している人は 9 割を超える回答が得られ、SNS の利用目的では、「暇つぶし」17 名、「情報収集」24 名、「連絡手段」8 名であった。

「よく利用している SNS」では、LINE14 名、Instagram13 名、Twitter22 名であった。

「一番利用している SNS のアカウント数」では、「1 個」21 名、「2 個」7 名、「3 個」9 名、「4 個」6 名、「5 個以上」6 名であった。

「SNS の 1 日の平均利用時間」では、「1 時間未満」8 名、「1 時間以上～2 時間未満」12

名、「2時間以上～3時間未満」10名、「3時間以上」19名であり、約4割の人が3時間以上という回答が得られた（図1）。

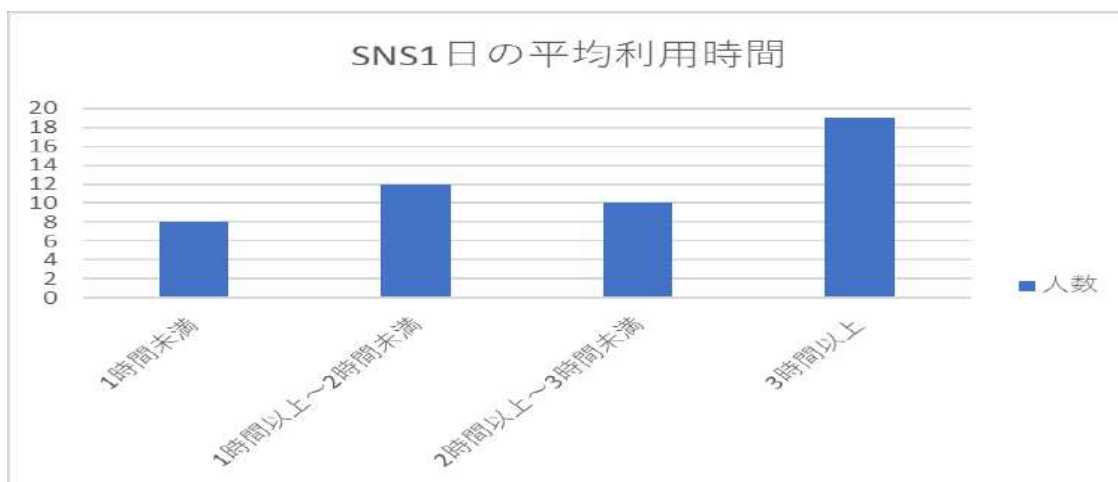


図1

「あなたはSNSを辞められますか」では、「はい」10名、「いいえ」39名であった（図2）。その理由を聞いたところ、「はい」と答えた人では、「不便になる」「連絡手段がなくなる」「生活の一部になっている」などの回答が多く得られた。「いいえ」と答えた人では、「普段からそこまで使っていない」「なくても生きていける」などの回答が多く得られた。

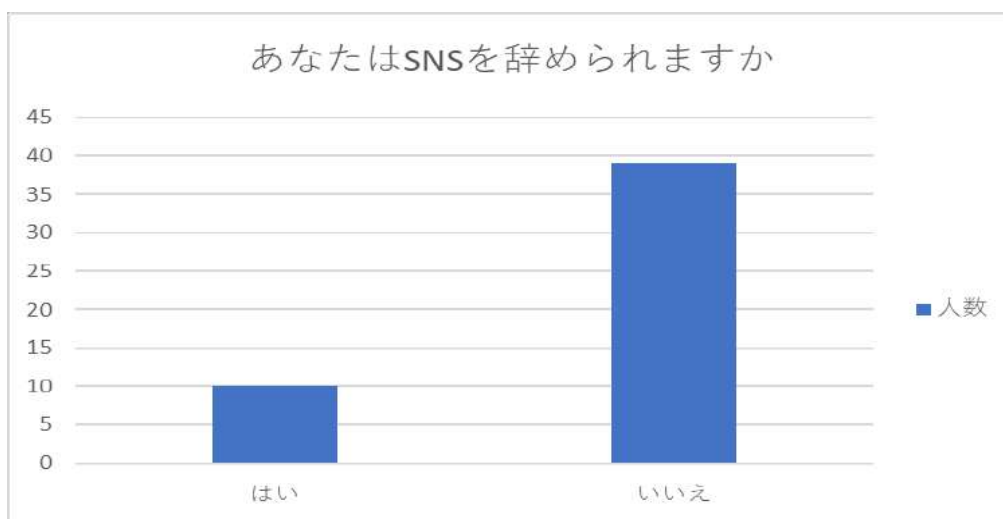


図2

次にネット友だちについては、ネットで知り合ったともだちがいると答えた人は、26名、いないと答えた人は、27名であった。

「ネット友だちと仲良くなったきっかけ」では、「オンラインゲーム」6名、「SNS」15名、イベント会場4名、「その他」1名であった。

「ネット友だちとの連絡頻度」では、「毎日」2名、「週に何度か」8名、「月に何度か」8名、「ほぼ取らない」8名であった。

「ネット友だちに実際あったことはありますか」では、「はい」19名、「いいえ」7名であった。「はい」と答えた人は、「イベントやライブに一緒に行くため」「遊ぶ、話をしたいため」が過半数で合った（図3）。

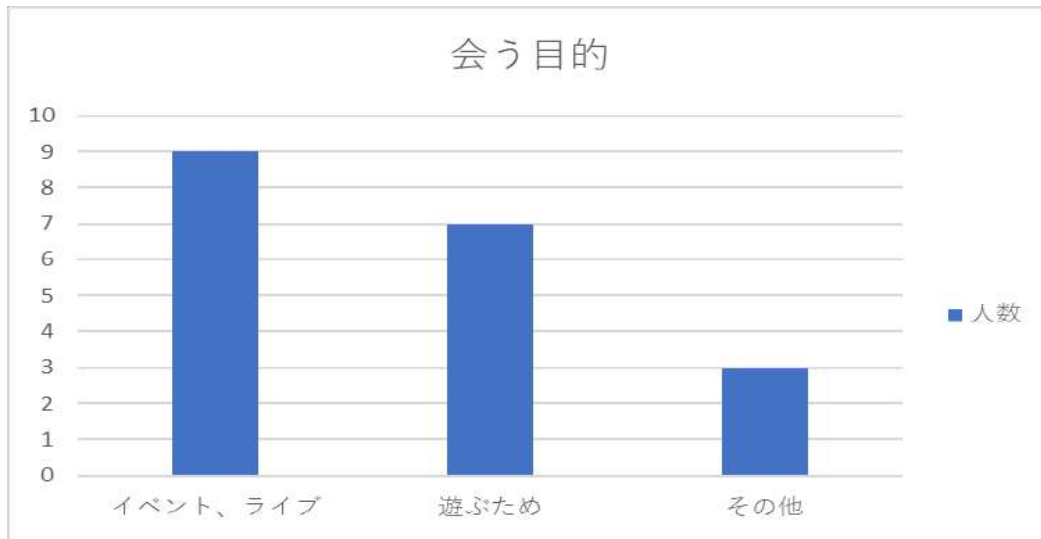


図3

次にネット友だちとの関係については、「ネット友だちが異性の場合恋愛に発展はありますか」では、「はい」18名、「いいえ」8名であった。「ネット友だちとこれからも仲良くしたいですか」では、「はい」26名、「いいえ」0名であり、ネット友だちがいると回答した人全員が仲良くしたいという結果が得られた（図4）。

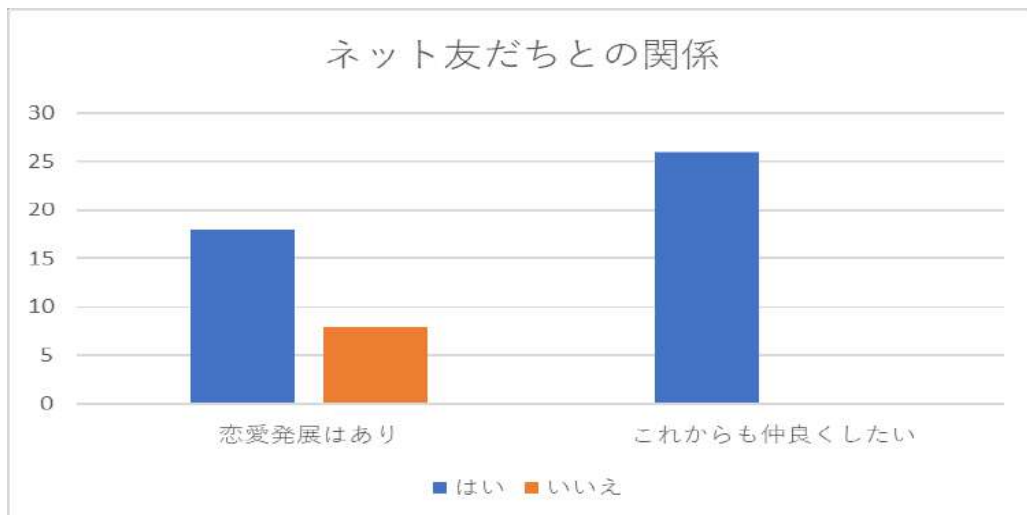


図4

#### 4. 考察

本調査では、SNS利用者がどれほどSNSに依存しているかを明らかにするため、Microsoft Formsを用いて調査を実施した。

SNS利用者は回答者の9割以上を占めているという結果が得られた。これは、ほとんど

の学生が SNS に依存している可能性があると考えられる。さらに、1 日平均利用時間では、3 時間以上と回答した人が 4 割を超えた結果となった。つまり、この 4 割の回答者はさらに依存している可能性が高いと考えられる。その他の回答の中にも、SNS が生活の一部になっている、手放せないという回答が多くあった。このような回答をした人は、暇さえあれば SNS を開き、無意識のうちに手が動いてしまうといった現象も考えられる。それに伴い、利用時間も増え、SNS に触れる機会や時間が増え、手放せないものとなっていると考えられる。そして、SNS を辞めることができないと回答した人は、全体の 8 割であった。このことから、依存傾向にあり、SNS が突然無くなったり、使えない状況に陥るとイライラや感情をコントロールすることが難しくなると考えられる。逆を言えば、SNS があることにより心の安定も手に入れているとも言えるかもしれないのだ。心を安定させる材料になっ  
ていても、睡眠や身体の不調などの身体的影響は現れると推測できる。

また、ネット友だちがいる人でこれからも仲良くしたいと回答した人は、10 割であり、全員であった。ネットや SNS が普及している現代の社会では、ネット上で知り合うことが普通になってきており、共通の趣味を持つ者同士寄り添える場となっていることが考えられる。さらに、対面では人と上手くコミュニケーションを取ることが出来なくても、ネット上であればありのままの自分をさらけ出すことができ、ネットや SNS をコミュニケーションの場として利用する人が多くなったことが背景にあると推測できる。

今回の質問項目では SNS に依存していると断定することは難しい。よって今後の課題として、SNS 依存についての尺度などを用いることも検討すべきことである。さらに、今回の調査では、性別の回答項目を設けていなかった。今後の調査では、性別回答欄を作ること  
で男女の差を比較することも可能になると考えられる。

## 5. 引用文献

橋元良明 (2018) SNS 依存の現状と課題—SNS 依存を中心として

# コロナによる携帯利用の変化

19C203 福田こころ

19C213 水野 仁鼓

## 問題と目的

昨今、コロナウイルス（以下、コロナと略称）が流行し社会問題となり、社会の流れが大きく変化する要因となり、今までとは明らかに違う生活を強いられている。それにより、携帯利用の時間の増加がみられており、緊急事態宣言の発令を受け、自宅で過ごす時間が長くなったことにより、インターネット利用時間は1月から5月にかけてすべての年齢層で1時間近く増えている（森・林 2020）ことが明らかになっている。

このように、生活の中で携帯を利用する時間に変化をもたらす原因になったコロナによって、大学生には具体的にどの程度の携帯利用時間の増加がみられ、身体的変化（視力低下や太った・痩せたなどの身体にみられる変化）があったのか、携帯の使い方に変化が出ているか、また、大学生はどの程度日常的にコロナに関心があるのか、は明らかになっていない。そこで本研究では、コロナの影響によって大学生の携帯利用がどのように変化したかを調べることを目的に調査をする。

## 方法

### 調査方法

Microsoft Forms を用いて、調査票を配布、回答を得た。

### 調査対象者

社会調査実習履修者 70 名のうち 68 名（男 26 名、女 42 名）に調査票を配布した。

### 調査時期

2021 年 12 月

### 調査内容

質問は、1、「コロナ以前、以降で携帯利用頻度が変わった」の項目は、「変わった」「どちらかといえば変わった」「どちらかといえば変わらない」「変わらない」「わからない」の 5 件法。2、「コロナ以前よりも携帯利用頻度が高くなった」10、「コロナに関する情報を集めた」11、「コロナに関する情報を発信した」12、「cocoa のアプリを知っている」13、「cocoa のアプリをダウンロードした」の項目は、「はい」「いいえ」の 2 件法。3、「携帯利用頻度が高くなったことにより、身体的変化があった」の項目は、「あった」「なかった」「わからない」の 3 件法。4、「コロナ前の携帯利用時間」5、「コロナ後の携帯利用時間」の項目は、「1 時間未満」「1 時間以上 3 時間未満」「3 時間以上 6 時間未満」「6 時間以上 9 時間未満」「9 時間以上」の 5 件法。6、「コロナの影響で使用するアプリが変わった」の項目は、「変わった」「変わらない」の 2 件法。7、



「コロナがきっかけで新しく始めたアプリがある」の項目は、「ある」「ない」の2件法で、7の回答が「はい」の場合は8、「アプリの名称」で自由回答の質問を準備した。9、「コロナの影響によるSNSへの書き込み内容や頻度が変わった」の項目は、「変わった」「変わらない」「わからない」の3件法。である。

## 結果

有効回答数 54名（男21名、女33名）

「コロナ以前よりも携帯利用頻度が高くなった」と問う質問で、43人が「はい」、11人が「いいえ」と回答し、80%の人が携帯利用時間の増加があったという結果になった。携帯利用頻度が高くなった43人には更に、「携帯利用頻度が高くなったことにより、身体的変化があった」かを問うと、「あった」と回答した人が13人、「なかった」と回答した人が19人、「わからない」と回答した人が11人という結果であった。

コロナ前の1日の携帯利用時間とコロナ後の1日の携帯利用時間を比較したものを図1に示す。コロナ前は、「1時間以上3時間未満」が15人、「3時間以上6時間未満」が24人、「6時間以上9時間未満」が10人、「9時間以上」が5人であり、コロナ後は、「1時間以上3時間未満」が3人、「3時間以上6時間未満」が26人、「6時間以上9時間未満」が10人、「9時間以上」が15人であった。コロナ後は、94%の人が1日に3時間以上携帯を利用しているという結果であった。

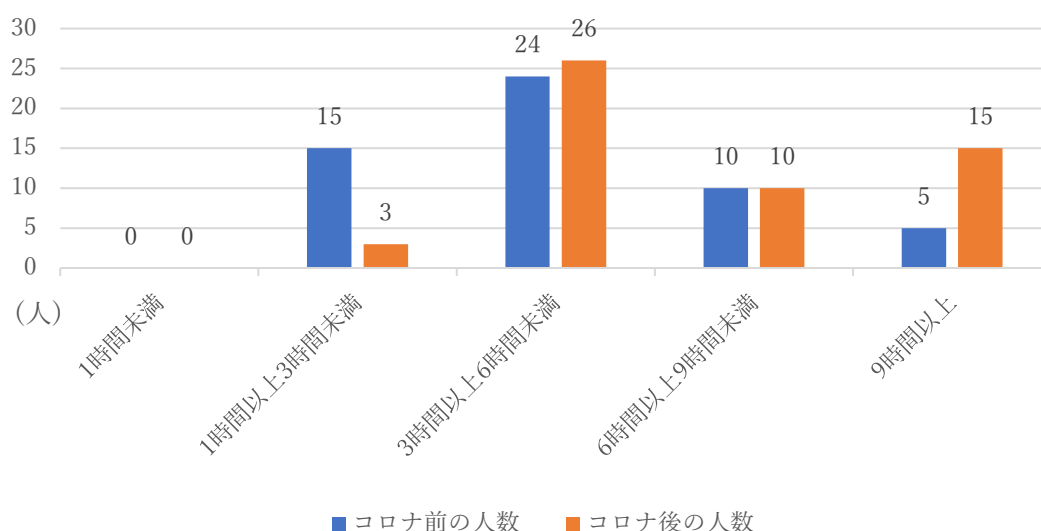


図1. 1日の携帯利用時間

携帯の使い方に変化が出たかを調査するために、「コロナがきっかけで新しく始めたアプリがある」と問う質問では、16人が「ある」、38人が「ない」と回答した。新しく始

めたアプリがある16人には、更に「アプリの名称」を問うと、11人が娯楽を楽しむためのゲーム系・動画配信サービス系のアプリを新しくダウンロードしたという結果になった。その他に、zoom や teams、google meet、配達アプリ、indeed といった回答が上がった。

日常的にコロナに関心があるかを調査するために、コロナに関する情報についての質問と、cocoa（新型コロナウイルス接触確認アプリ）についての質問をした。まず、「コロナに関する情報を集めた」と問う質問では、32人が「はい」、22人が「いいえ」と回答した。「コロナに関する情報を発信した」と問う質問では、4人が「はい」、50人が「いいえ」と回答した。コロナに関する情報を集めた・発信したかのデータを図2・図3に示す。次に、「cocoaのアプリを知っている」と問う質問では、39人が「はい」、15人が「いいえ」と回答した。更に、cocoaを知っていると答えた39人には「cocoaのアプリをダウンロードした」かを問うと、17人が「はい」、22人が「いいえ」と回答した。54人中、17人と31%の人が実際にcocoaをダウンロードし、活用したという結果であった。

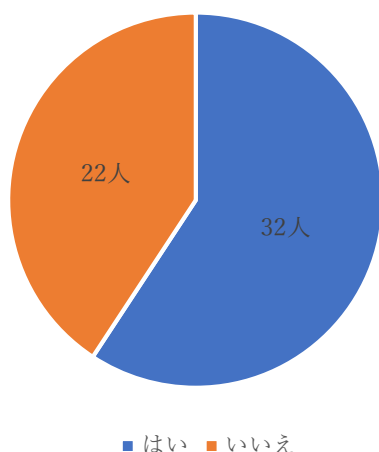


図2. コロナに関する情報を集めた

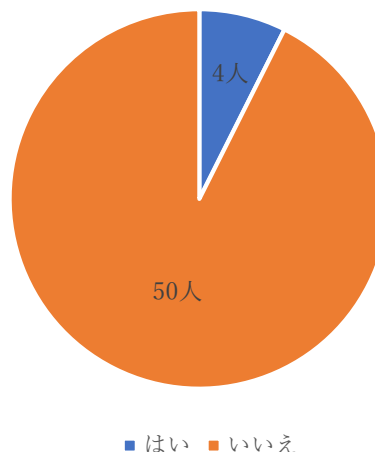


図3. コロナに関する情報を発信した

## 考察

本研究ではコロナの影響によって大学生の携帯利用にどのような変化が出ているのかを明らかにするためにアンケート調査を行った。その結果、コロナ前に比べるとコロナ後は、80%の人が携帯利用頻度が高くなったことが明らかになった。これは、コロナの影響で外に出る機会が減り、その分が携帯利用の時間となったと推測できる。また、オンラインでの授業もあることにより、授業の時間も加算されたと考えられる。そして、30%の人が身体的変化があったと自覚があり、以前より長時間の液晶画面を見ることでの視力低下や、動かないことで肥満になった、逆に食事量・回数が減り痩せたなどの身体的変化があった人がいると

考えられる。本研究では、身体的変化の具体的内容は得られず、また、身体的変化以外にも精神的変化や他の要因もあったのではないかと予測できる。

具体的な携帯利用時間については、図 1 を見て分かるように、コロナ前と後、どちらも 3 時間以上 6 時間未満が多いという結果であったが、コロナ後では、1 時間以上 3 時間未満の人が減ったことに伴い、9 時間以上利用している人がコロナ前と比べると 3 倍の人数になり、多くの人々が長時間携帯を利用する傾向になったことが分かった。この要因として、空き時間が多くなったことでゲームに没頭できるようになったり、長時間ドラマや映画を観ることが可能な状況になったことから、大幅に携帯利用時間が増えたと推測できる。携帯利用の変化については、30%の人がコロナをきっかけに新しいアプリをダウンロードしたと結果がでて、その要因からも携帯利用時間の増加に繋がっていることが考えられる。

大学生はどの程度日常的にコロナに興味があるのかについては、59%の人がコロナに関する情報を集めたという結果であったが、この質問項目に関しては、全員に近い人数が情報を集めているかと予想していたが、テレビなどで多くの時間コロナの報道がされていることから、わざわざ情報を集めない人もいたと推測する。また、コロナに関する情報を発信した人は 54 人中 4 人と僅かな人数しかおらず、図 2 と図 3 を比較すると分かるように、コロナに関して興味があり、情報を集めても、自らが発信することは極僅かであり、cocoa のアプリを知っていても、ダウンロードした人は半分にも満たないことから、多くの大学生はコロナに対して興味はあるものの、自主的に行動することが少ない傾向があると考えられる。

本研究では、コロナの影響によって大学生は携帯利用時間が増え、携帯の使い方の変化・身体的変化が出た人もいるという結果が示された。今後、回答項目をより細かくし調査することで、より詳細な結果が得られるであろう。

## 引用文献

森健・林裕之 (2020). 新型コロナウイルス感染拡大で生活におけるデジタル活用が急進展～「デジタル包摂」が急務～. 野村総合研究所. <https://www.nri.com/jp/keyword/proposal/20200527>, (参照 2022.01.25) .

# オンデマンド型の授業と双方向型の授業の違いについて

19C106 飯田絃太、19C202 深澤春稀

19C159 児玉大樹、19C153 清田悠佑

## 目的

近年、新型コロナウイルスの影響で様々な学校で Zoom や Microsoft 社の Teams を用いたオンライン授業を行っている。文部科学省（2020）の調べによると令和2年度の後期の授業において59.6%の生徒が「オンラインがほとんど・すべてだった」と回答していたことから、いかに広まっているかがわかるだろう。しかし、対面授業から遠隔授業に移り変わったことにより、これまでとは違う方法で学習していく必要がある。文部科学省が行った調査ではオンライン授業の悪かった点として、友人と受けられない、レポート等の課題が多い、質問など双方向のやり取りが少ない、対面授業より理解しにくいという点があげられた一方でよかった点として自分が選んだ場所で授業を受けられる点や自分のペースで学習できる点が挙げられていた。このように対面授業と比較したオンライン授業のメリット、デメリットは調査で明らかになってきてはいるが、一口にオンライン授業といってもオンデマンド型の授業と双方向型の授業が存在し、その二つの違いについてはあまり検討されていない。そこで本研究ではオンデマンド型の授業と双方向型の授業の学生の意識の違いについて調査し、またオンデマンド型の授業の受講環境についても調べ、二つの授業のメリット、デメリットについて検討することを目的とする。また本研究では双方向型の授業を「リアルタイムでビデオ通話を用いながら行う授業のこと」と定義し、オンデマンド型の授業を「授業動画を収録し、アップロードしたものを生徒各自で見ってもらう形態の授業」と定義する。

## 方法

### 調査方法

Microsoft Forms を用いて、調査票を配布、回答を得た。

### 調査対象者

社会調査実習を履修している生徒70名のうち68名（男26名、女42名）を調査対象とした。そのうち有効回答数は57名（男20名、女35名、その他2名）だった。

### 調査期間

調査は2021年12月2日から2021年12月23日の間に行われた。

## 結果

### 1. 双方向型の授業とオンデマンド型の授業どちらが集中できているか。

「双方向型の授業よりオンデマンド型の授業の方が集中できる」という質問に対して、「とてもそう思う」と答えた人が8人（14%）「そう思う」と答えた人が14人（25%）

「あまりそう思わない」11人（19%）「そう思わない」と答えた人が15人（26%）「あまり差異はない」と答えた人は9人（16%）であった。（図1）

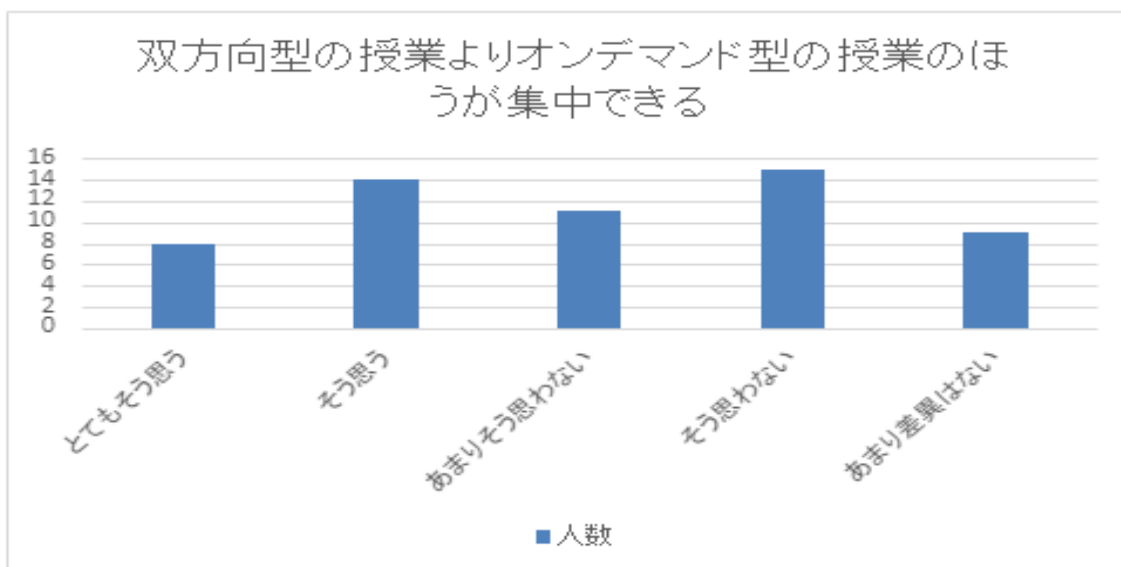


図1 双方向型の授業よりオンデマンド型の授業の方が集中できる

## 2. オンデマンド型の授業と双方向型の授業のどちらが面倒に感じるか

「オンデマンド型の授業との授業より双方向型の授業のほうが面倒くさい」という質問に対して、「とてもそう思う」と答えた人は13人（23%）、「そう思う」と答えた人23人（40%）、「あまりそう思わない」と答えた人は8人（14%）、「そう思わない」と答えた人は7人（12%）、「あまり差異はない」と答えた人は6人（11%）だった。（図2）

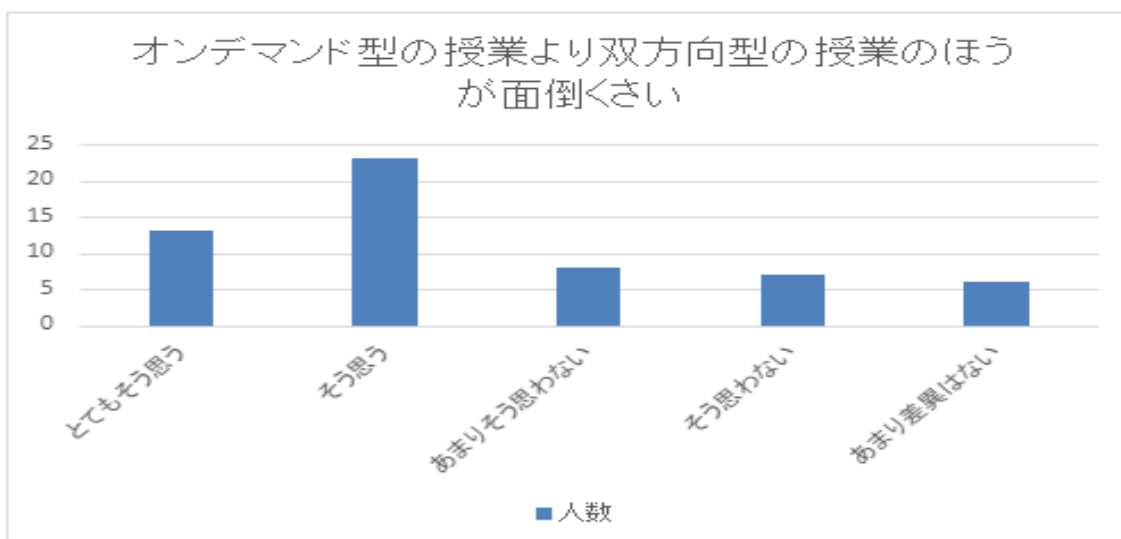


図2 オンデマンド型の授業より双方向型の授業の方が面倒

### 3.授業の理解度

「双方向型の授業と比べてオンデマンド授業の方が授業を理解できると感じる」という質問に対して「とてもそう思う」と答えた人は 9 人 (16%)、「そう思う」と答えた人は 12 人 (21%)、「あまりそう思わない」と答えた人は 18 人 (32%)、「そう思わない」と答えた人は 10 人 (18%)、「あまり差異はない」と答えた人は 8 人 (14%) だった。

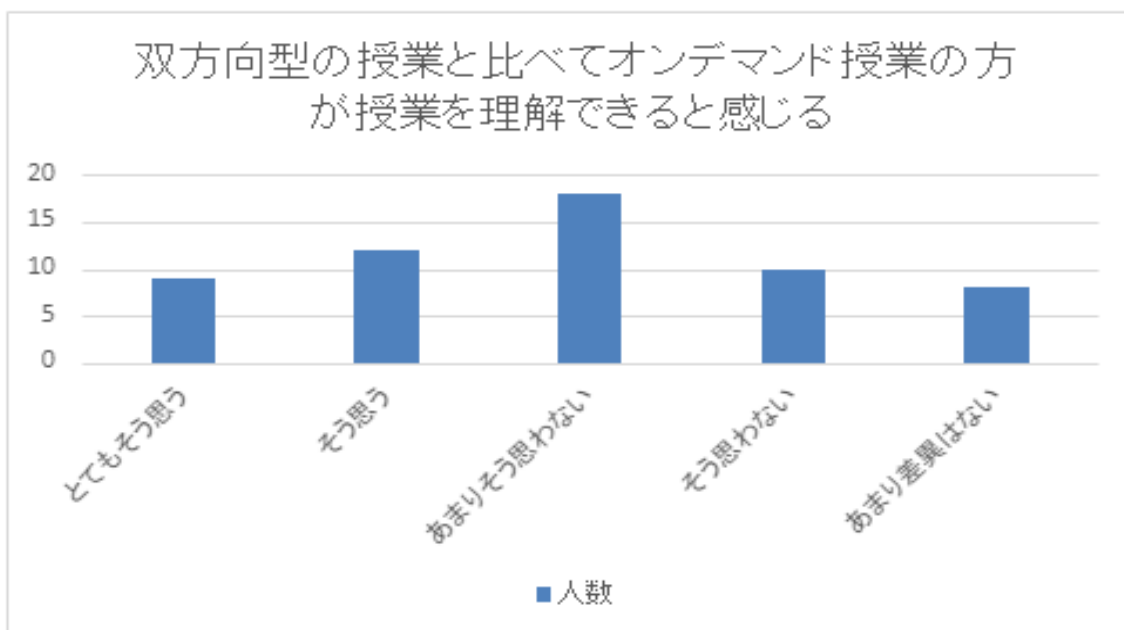


図 3 双方向型の授業のと比べてオンデマンド授業の方が授業を理解できると感じる

### 4.オンデマンド授業の受講環境

「オンデマンド授業の授業資料を何の媒体で見ているか」という質問に対し「紙」と答えた人は 15 人 (26%)、「パソコン」と答えた人は 27 人 (47%)、「スマホ」と答えた人は 13 人 (23%)「その後」と答えた人は 2 人 (4%) だった。また、「その他」と答えた人には何の媒体で見ているかを記入してもらった。その結果「iPad」「タブレット」という回答が得られた。

「オンデマンド授業を配信されて何日目で見るとか」という質問に対し「当日」と答えた人は 7 人 (12%)、「2 日目」と答えた人は 9 人 (16%)「3 日目」と答えた人は 15 人 (26%)

「4 日目以上」と答えた人は 26 人 (46%) であった。

## 考察

本研究では、大学生を対象にオンデマンド型の授業と双方向型の授業のメリットデメリ

ットを検討するために二つの授業の学生の意識の違いとオンデマンド授業の受講環境について調査を行った。その結果まず一つ目に、「双方向型の授業よりオンデマンド型の授業の方が集中できる」の質問項目において「あまりそう思わない」「そう思わない」と答えた人が合計で 26 人なのに対し「とてもそう思う」「そう思う」と答えた人は 22 人で、わずかに「あまりそう思わない」「そう思わない」と答えた人の方が多かった。そのことから双方向型の授業の方が授業に集中しやすいと考えられる。

二つ目に「オンデマンド型の授業より双方向型の業の方が面倒くさい」という質問項目において「とてもそう思う」「そう思う」と答えた人数は合計で 36 人「そう思わない」「あまりそう思わない」と答えた人は 15 人と「そう思わない」「あまりそう思わない」と答えた人に比べて多かった。そのため生徒にとって双方向型の授業の方が負担が大きいと考えられる。

三つ目に「双方向型の授業と比べてオンデマンド型の授業の方が授業を理解できると感じる」という質問項目において「そう思う」「とてもそう思う」と答えた人は合計で 21 人、「あまりそう思わない」「そう思わない」と答えた人は 28 人と「あまりそう思わない」「そう思わない」と答えた人の方が多かった。このことから双方向型の授業の方が生徒は理解しやすいと考えられる。

そして受講環境についてだが、授業資料を見る媒体について「パソコン」と答えた人が 27 人といちばん多く、その次に多かったのが 15 人が回答した「紙」であった。このことから授業資料を印刷せずに、PDF 等で見ている人の方が多いということがわかる。これについて、「印刷が手間である」「資料を置く場所に困らない」というような理由が考えられる。次にオンデマンド授業を配信されて何日目を受けているかについてだが、4 日目以上と答えた人がいちばん多く、26 人であった。逆に当日と答えた人が最も少なく、7 人であった。このことから、日を開けてオンデマンド授業を受ける人が多いことがわかる。これについては自分の都合の良いタイミングでそれぞれ受けているためであると考えられる。

これらの点を踏まえて双方向型の授業とオンデマンド型の授業のメリットデメリットを挙げていくと、まず、双方向型の授業のメリットはオンデマンド型に比べて、生徒が集中しやすく、授業を理解しやすい点が挙げられる。一方デメリットとして、双方向型の授業はオンデマンド型の授業より面倒と感じている生徒が多く、生徒の負担になりやすいという点である。次にオンデマンド型の授業のメリットについてだがまず、双方向型の授業よりも面倒と感じている生徒が少なく、生徒への負担が少ない点、そして 4 日目以降にオンデマンド授業を受けている生徒が多数なことから当日ではなく自分の都合のいい日タイミングで授業を受けられる点もメリットであると言える。しかし、双方向型の授業のところと言及した通り、双方向型と比べて、集中しづらかったり、授業が理解しづらい点はデメリットであると言える。

最後に今後の課題として授業資料をどのような媒体で見ているかの質問で「パソコン」と答えた人のパソコンで資料を閲覧している理由についてである。本研究では印刷の手間や、

資料を置く場所に困らないことが理由であると考察したが、本研究ではそれを裏付けるデータをとることができなかった。そのため今後の研究でなぜその媒体で授業資料を見るのかを調べ、さらに媒体ごとのメリットデメリットを調べていく必要があると考える。

## 参考文献

文部科学省(2020)新型コロナウイルス感染症の影響による学生等の学生生活に関する影響に関する調査(結果), [https://www.mext.go.jp/content/20210525-mxt\\_kouhou01-000004520\\_1.pdf](https://www.mext.go.jp/content/20210525-mxt_kouhou01-000004520_1.pdf), 最終閲覧日(2022年1月16日)



## オンライン授業（リアルタイム・オンデマンド）のメリット・デメリット

19C103 吾妻拓海

19C145 川村隆之介

19C174 圖師弘太郎

### 目的

現在、新型コロナウイルス（COVID-19）感染拡大防止のために、大学では対面授業に加えオンライン授業を併用するようになっている。オンライン授業は、受講環境や学習ペースを整えられる一方で、孤立感や課題の増加、理解度の低下が問題視されている。田中（2021）によると、オンライン授業のメリットとして、授業の見直しが可能であること・十分な学習時間の確保・時間の有効活用がある一方で、デメリットとしては課題の多さ・自己管理の難しさ・内容理解の不足があることが明らかとなっている。また、戴・浦田・村木（2021）では、オンライン授業において集中力が持続しないことや、学生自身が学習成果の定着を不安に思っている割合が高いことが述べられている。そして、オンライン授業への変化に伴う授業中のスマートフォンの使用頻度やメモを取る程度の変化については未だ調査されていない。オンライン授業によるメリット・デメリットを明確にすることで、対面授業とのバランスや受講生と教員双方の負担の軽減につながると考える。

本調査では、まず、対面授業からオンライン授業へと変化したことによる受講生の勉強意欲の変化から、オンライン授業のメリット・デメリットを明らかにする。次に、オンライン授業の2つの形式（リアルタイム双方向型とオンデマンド配信型）による影響を比較し、受講生への影響を明らかにしたうえで、オンライン授業の双方の形式のメリット・デメリットを明確にする。以上の2点をこの調査の目的とする。また、リアルタイム双方向型は「教員が教室や研究室からビデオや音声を使い、リアルタイムに授業を配信し、同時刻に学生が受講する授業形態」、オンデマンド配信型は「事前に教員が資料や録画した映像をインターネット上にアップし、学生はのちに受講する授業形態」と定義する。

### 方法

#### 調査対象者

社会調査実習を履修している70名のうち68名に、Microsoft Formsを用いて調査票を配布し、回答を求めた。

#### 調査時期

2021年12月2日～12月29日

## 調査内容

第一に、オンライン授業への変化に伴い、受講生の勉強意欲への影響の有無について尋ねるため「対面授業と比較してオンライン授業になってから、休む頻度が変化した」「対面授業と比較してオンライン授業の方が、自主学習をする時間が変化した」と尋ねた。回答は、1「増えた」、2「変わらない」、3「減った」の3件法で求めた。

第二に、対面授業と比較し、オンライン授業の2つの形式（リアルタイム双方向型とオンデマンド配信型）により、受講生への異なる影響の有無について尋ねるため「対面授業と比較して、集中して受けられる」「対面授業と比較して、授業内容を理解しやすくなった」「対面授業と比較して、メモを取る回数が増えた」「対面授業と比較して、授業中にスマホを触らなくなった」「対面授業と比較して、授業中に眠気を強く感じる」「対面授業と比較して、受講環境が好ましい」の計6項目を尋ねた。回答は、リアルタイム双方向型とオンデマンド配信型で別々に求め、1「当てはまる」、2「やや当てはまる」、3「変わらない」、4「やや当てはまらない」、5「当てはまらない」の5件法で求めた。

## 結果

本調査では、調査票を配布した68名のうち、46名から回答が得られた。回収率は68%であった。

第一に、オンライン授業への変化に伴う受講生の勉強意欲への影響の有無について尋ねるため、休む頻度の変化と自主学習に関して、3件法を用い回答を求めた。休む頻度の変化に関しては「対面授業と比較してオンライン授業になってから、休む頻度が変化した」と尋ねたところ、「変わらない」が60.9%（28人）と最も多かった（図1）。

また、自主学習に関しては「対面授業と比較してオンライン授業の方が、自主学習をする時間が変化した」と尋ねた結果、「変わらない」が63.0%（29人）と最も多かった（図2）。

どちらの質問に対しても、回答した半数以上が「変わらない」と回答していることから、オンライン授業が休む頻度の変化と自主学習へもたらした影響は少ないことが明らかとなった。

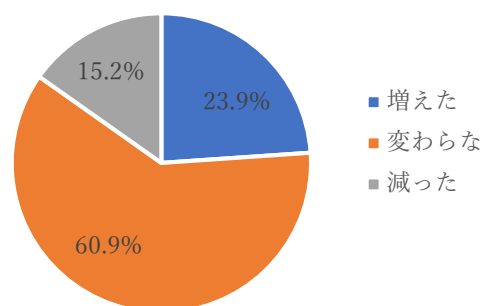


図1 対面授業と比較してオンライン授業になってから、休む頻度が変化した

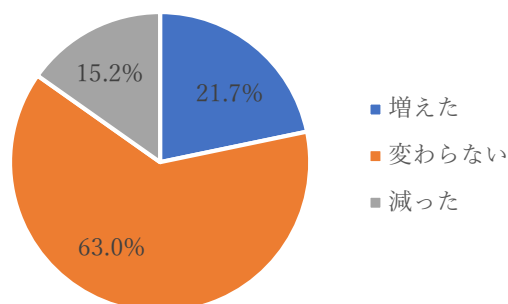


図2 対面授業と比較してオンライン授業になってから、休む頻度が変化した

第二に、対面授業と比較し、オンライン授業の2つの形式（リアルタイム双方向型とオンデマンド配信型）による受講生への異なる影響を尋ねるため、授業への集中・授業内容の理解・授業中にメモを取る回数・授業中のスマホ使用・授業中の眠気・受講環境の好ましさに関して、5件法を用い、オンライン授業の各形式で別々に回答を求めた。

授業への集中については「対面授業と比較して、集中して受けられる」と尋ねた。その結果を図3に示す。リアルタイム双方向型では「変わらない」が28.3%（13人）と最も多く、次いで「やや当てはまらない」が26.1%（12人）であった。一方、オンデマンド配信型では「やや当てはまらない」が37.0%（17人）と最も多く、次いで「当てはまらない」が21.7%（10人）であった。リアルタイム双方向型とオンデマンド配信型の双方の結果を比較すると、オンデマンド配信型の方がやや集中し難いことが明らかとなった。

授業内容の理解については、「対面授業と比較して、授業内容を理解しやすくなった」と尋ねた（図4）。

リアルタイム双方向型では「変わらない」が39.1%（18人）と最も多く、次いで「やや当てはまらない」が17.4%（8人）であった。一方、オンデマンド配信型では「やや当てはまる」と「変わらない」が同様に23.9%（11人）であった。

結果を概観すると、リアルタイム双方向型では「変わらない」が著しく多く、オンデマンド配信型では各回答がおおよそ均一となった。その一方で「当てはまる」「やや当てはまる」では、オンデマンド配信型がやや高く推移しており、理解が進みやすい傾向が示された。

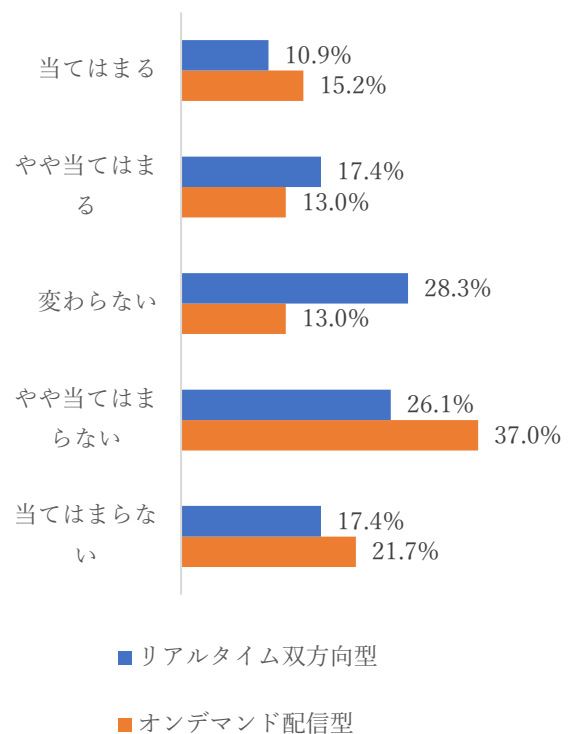


図3 対面授業と比較して、集中して受けられる

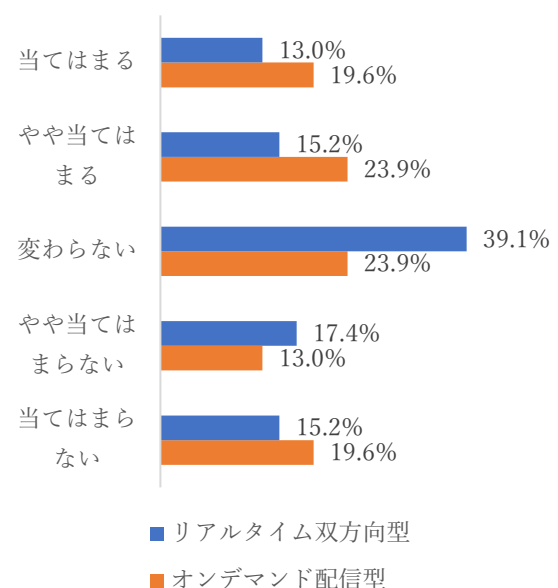


図4 対面授業と比較して、授業内容を理解しやすくなった

授業中にメモを取る回数については「対面授業と比較して、メモを取る回数が増えた」と尋ねた（図5）。

どちらの形式に関しても「変わらない」が最も多く、リアルタイム双方向型では43.5%（20人）で、オンデマンド配信型では41.3%（19人）であった。

このことから、オンライン授業がメモを取る回数に及ぼした影響は少ないことが明らかとなった。

一方、「当てはまらない」の割合は、リアルタイム双方向型が13.0%（6人）であったのに対し、オンデマンド配信型では23.9%（11人）であった。このことから対面授業やリアルタイム双方向型に比べ、オンデマンド配信型ではメモを取る回数が減少している傾向が示された。

授業中のスマホ使用に関しては「対面授業と比較して、授業中にスマホを触らなくなった」と尋ねた（図6）。

リアルタイム双方向型では「変わらない」が43.5%（20人）と最も多く、次いで「当てはまらない」が26.1%（12人）であった。

オンデマンド配信型でも「変わらない」が最も多く43.5%（20人）で、次いで「当てはまらない」が34.8%（16人）であった。どちらの形式においても「変わらない」に次いで「当てはまらない」が多いことから、授業中のスマホの使用頻度は変化しない、または対面授業の場合よりも増加傾向にあることが示された。

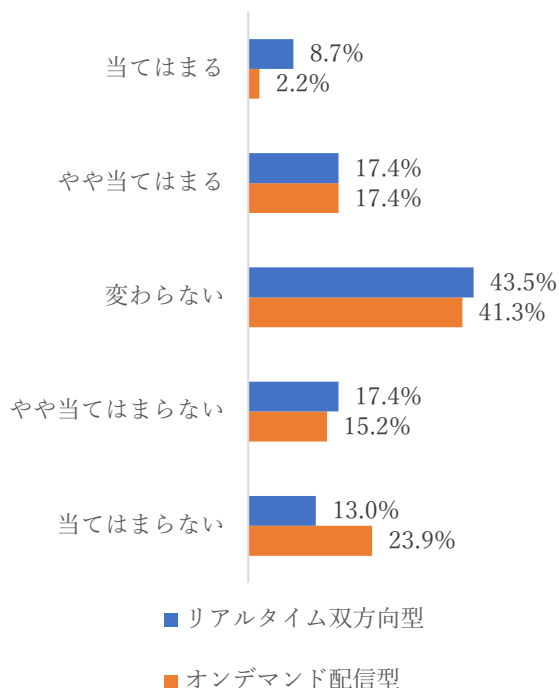


図5 対面授業と比較して、メモを取る回数が増えた

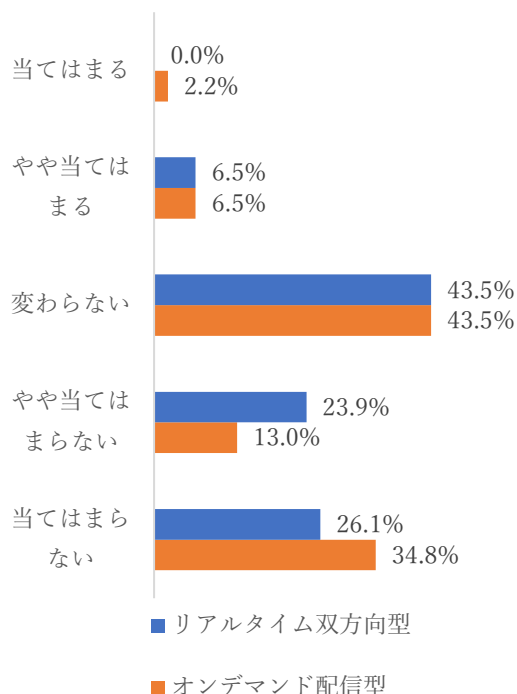


図6 対面授業と比較して、授業中にスマホを触らなくなった

授業中の眠気に関しては「対面授業と比較して、授業中に眠気を強く感じる」と尋ねた（図7）。

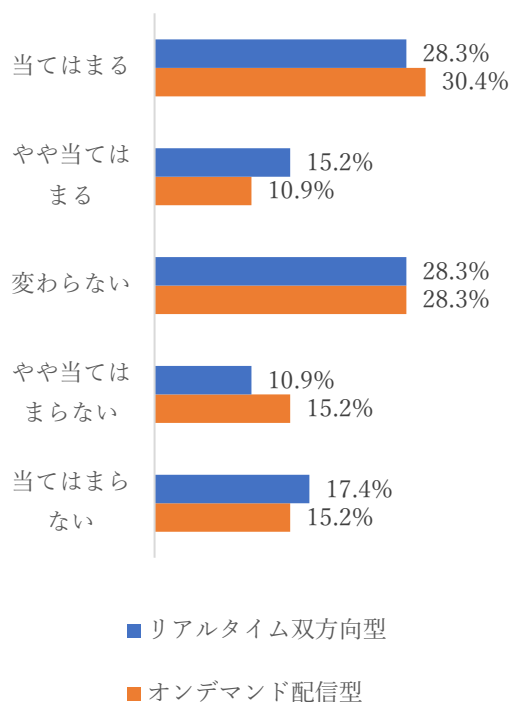


図7 対面授業と比較して、授業中に眠気を強く感じる

はまる」が23.9%（11人）で、次いで「変わらない」が21.7%（10人）であった。オンデマンド配信型では「やや当てはまる」が37.0%（17人）で、次いで「当てはまる」が19.6%（9人）であった。このことから、対面授業やリアルタイム双方向型に比べ、オンデマンド配信型の方が受講環境を好ましいとする傾向が示された。

### 考察

本調査では、2つの目的があった。1つは、対面授業からオンライン授業へと変化したことによる受講生の勉強意欲の変化から、オンライン授業全体のメリット・デメリットを明らかにすることであった。もう1つは、オンライン授業の2つの形式（リ

リアルタイム双方向型では「当てはまる」「変わらない」が同様に28.3%（13人）であった。

オンデマンド配信型では「当てはまる」が30.4%（14人）で、次いで「変わらない」が28.3%（13人）であった。このことから、いずれの形式においても眠気は変化せず、むしろ対面授業の場合よりも強く感じる傾向が多い傾向が示された。

受講環境の好ましさに関しては「対面授業と比較して、受講環境が好ましい」と尋ねた（図8）。

リアルタイム双方向型では「やや当て

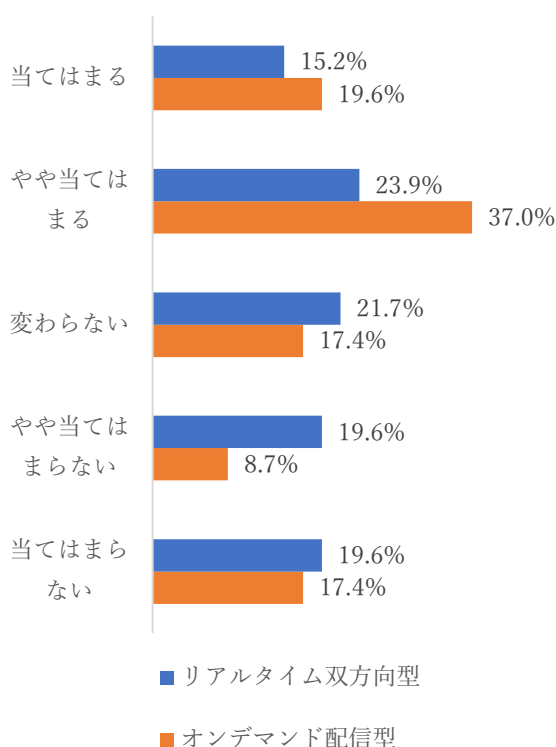


図8 対面授業と比較して、受講環境が好ましい

リアルタイム双方向型とオンデマンド配信型)による影響を明確化し比較することで、オンライン授業の双方の形式のメリット・デメリットを明確にすることであった。

その結果、まず、オンライン授業に伴う受講生の勉強意欲への大きな変化は見られなかったものの、2つの形式での比較を通じ、どちらの形式でも「授業中のスマホ使用」と「授業中の眠気」において否定的な結果が示された。次に、オンライン授業の2つの形式を比較したところ、リアルタイム双方向型にのみ該当する特徴は示されなかった。その一方、オンデマンド配信型では「受講環境の好ましさ」と「授業理解のしやすさ」において肯定的な結果が示され、反対に「授業への集中」や「授業内容のメモ回数」においては否定的な結果が示された。

このことから、オンライン授業全体（リアルタイム双方向型とオンデマンド配信型の双方）に共通するデメリット、そしてオンデマンド配信型におけるメリットとデメリットが明らかとなった。まず、オンライン授業全体のデメリットとしては「授業中におけるスマホ使用量の継続・増加」と「授業中の眠気の維持・増加」が示された。次に、オンデマンド配信型にはメリットとしては「授業理解のしやすさ」「受講環境の好ましさ」が示され、デメリットとしては「集中力の低下」と「授業内容のメモ回数の減少」が示された。

「授業中のスマホ使用量の維持・増加」は、オンライン授業全体で示されていた。これは、コロナ禍による影響が一要因であると考えられる。外出が制限され、対面授業時に友人らと顔を合わせられなくなったことで、気軽に交流できなくなった。その影響が、スマホ使用に拍車をかけたのではないだろうか。また、コロナ禍でコロナ前よりスマートフォンの利用時間が増加した（KDDI, 2021）ことから、オンライン授業においても同様に、スマホ使用が増加したのだと考えられる。

オンライン授業全体のデメリットとして挙げられた「授業中の眠気の維持・増加」や、オンデマンド配信型のデメリットとして挙げられた「集中力の低下」には、自宅が受講環境となっていることが関連しているのではないだろうか。オンライン授業は自宅で受講する機会が多く、受講時の服装や体勢を見る他者が少ないためリラックスしやすいと推察される。この受講時の快適さが、眠気の維持・増加や、集中力低下を引き起こす一要因であると考えられる。

オンデマンド配信型のメリットには「受講環境の好ましさ」と「授業理解のしやすさ」が示された。これらには、オンデマンド配信型の特徴が関係しているのではないだろうか。まず、オンデマンド配信型では、受講生が好きな時間に講義を受けることが可能である。その結果が「受講環境の好ましさ」に示されたと考えられる。次に、オンデマンド配信型では、教員がインターネット上に資料や授業動画をアップし、それを受講生が閲覧・学習する。そのため、何度も繰り返して見直すことが可能であり、授業内容を理解するまで聞けることから、オンデマンド配信型の「授業理解のしやすさ」が肯定的に示されたのだと考えられる。また一方で、オンデマンド配信型のデメリットとしては「授業内容のメモ回数の減少」が挙げられている。他形式ではその講義内で一度しか話されない授業内容を聞き漏らさないように受講するため、メモが必要である場合が多い。しかし、オンデマンド配信型では再度視聴できるために授業内容をメモする必要性が低下し、その回数

が減少したものと考えられる。

最後に、今後の展望についてである。本調査では、オンライン授業における学習面への影響や受講時の変化に重きを置いた。そのため、精神面への影響や身体面への影響、受講時以外の変化にまで調査が及ばなかった。集中力の低下や眠気の維持・増加は、コロナ禍などによる生活習慣の乱れや睡眠不足の影響も棄てきれない。今後は、受講生の生活習慣や体調を加味した調査が求められる。また、本調査では3件法と5件法による調査のみが行われた。そのため、受講生が具体的にどのような改善を必要としているのかが不明瞭なままであった。今後は、オンライン授業への不満について半構造化面接や自由記述式の質問項目を用いて、より具体的に尋ねる調査が望まれる。

## 引用文献

田中 希穂 (2021) 大学におけるオンライン授業の実践と課題 同志社大学教職課程年報, 10, 48—62.

戴 宇熙・浦田 悠・村木 正行 (2021) 「キャンパスライフレス」が新入生に与える心理的影響 日本教育工学会研究報告集, 1, 34-40.

KDDI (2021) ～コロナ禍で変化するスマートフォンの利用方法と、スマホ依存などへの影響を調査～ Retrieved from

<https://news.kddi.com/kddi/corporate/newsrelease/2021/10/12/5468.html>

(2022年1月26日)

## 新型コロナウイルスによる人間関係と学習への影響

19C134 片山 美紀, 19C188 中島 実優

### 問題と目的

新型コロナウイルスの流行をきっかけに、コミュニケーションの取り方が変化した。それにより、人間関係にも影響を及ぼしている。感染予防のため、学生や社会人は通学・通勤ができなくなるなど、今までの生活とは全く異なった、新しい生活様式を求められた。そのため日常的に会っていた友人や職場の同僚、さらには同居していない家族と対面で話す機会が極端に減った。また、対面での学習や仕事が難しくなったことから、オンライン授業やリモートワークへの移行が急速に進められ、多くの人が長時間自宅で過ごすことになった。

人と気軽に会うことができなくなり、コミュニケーションが不足した。反対に、オンライン授業やリモートワークによって同居家族と過ごす時間が大幅に増えた。佐々木(2020)によると、最もストレスを感じていることに人間関係が挙げられ、次いで家族・家庭に関するストレスが挙げられている。だが外出自粛要請が出され、自宅外でのストレス解消が難しくなった。永田(2021)が指摘しているように、観光等体験そのものの消費に慣れ親しんだ現在の家族は、長時間ただ家にいるという状況に初めて直面し、その代替となるエンターテインメントを家庭内で準備せざるを得なくなったのである。また新型コロナウイルスに対する認識の違いは行動を変化させた。新しい生活様式に伴う人との距離感の変化は、新たなストレスを発生させ、人間関係にも影響を及ぼしたと考えられる。

オンライン授業やリモートワークを行う環境は人によって異なり、特に学生は学習効果に違いが生まれる可能性が問題視されている。インターネット接続に不具合が生じ、音声聞き取れない、画面が動かなくなった場合の補填対応は各々の教員に任されている。質疑応答の時間を設けている場合でも、発言のしづらさから質問できず、理解できていない状態で授業が進んでしまう。阿部・香西・遠藤・蔭・森田(2021)によると、対面授業で効果的にアクティブラーニングを行うことができても、それがオンライン授業にすぐに適用できるとは限らず、むしろマイナスの影響をおよぼす可能性がある。学生と教員はどちらも不慣れた状況で授業を進めてきた。また効果的な授業を目的としてグループワークを取り入れることがある。だが田場・石垣(2021)によると、オンライン上グループワークへの貢献を認知している学生は、自分の部屋でオンライン授業に参加し、グループワークでスキルを発揮しているものの、グループ内で安心して発言できるとは感じていない傾向にあることが示された。授業形態の変化は受講のしやすさや発言への抵抗感にも影響している。さらに対面でのテスト実施等学習の定着を図る機会が減ったことで、生徒の理解度を確認できず、学習効果が分からないことも問題点として挙げられる。

このように新型コロナウイルスはわたしたちの生活を変え、影響を与えている。しかしながら、①最もストレスを感じることに人間関係が挙げられているが、新型コロナウイルスの



流行によって行動や関係性の変化があったのか。②グループワークについて対面授業と比較し、参加のしやすさや楽しさに違いはあるのか。受講環境にはどの程度違いがみられるのか。③オンライン授業と対面授業を比較した学生の学習意欲に変化があったかについては検討されていない。

そこで本研究では新型コロナウイルス流行による、人間関係と学習への影響を具体的に明らかにすることを目的とする。

## 方法

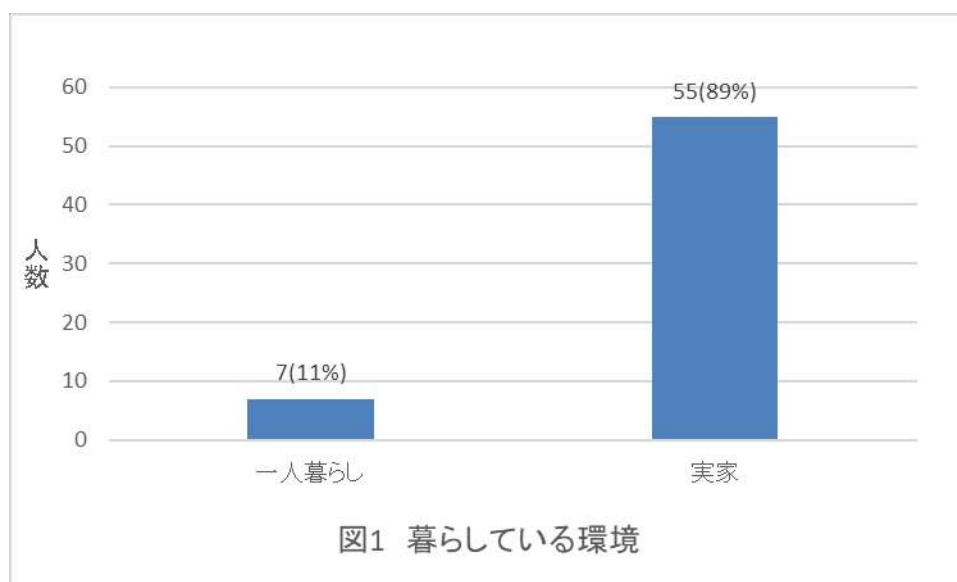
**調査方法** Microsoft Forms を用いて、調査票を配布、回答を得た。質問紙はフェイスシート（性別、年齢、暮らしている環境、家族構成）と、親との関係性について1項目、家族関係について7項目、友人関係について8項目、対面授業と比較したオンライン授業の学習状況について10項目で構成された。親との関係性についてのみ「とても当てはまる」「少し当てはまる」「あまり当てはまらない」「全く当てはまらない」「答えたくない」の5件法で、その他の項目は「とても当てはまる」「少し当てはまる」「あまり当てはまらない」「全く当てはまらない」の4件法で回答を求めた。

**調査対象者** 社会調査実習履修者70名のうち68名（男26名、女42名）に調査票を配布した。

**調査時期** 2020年12月2日～12月22日

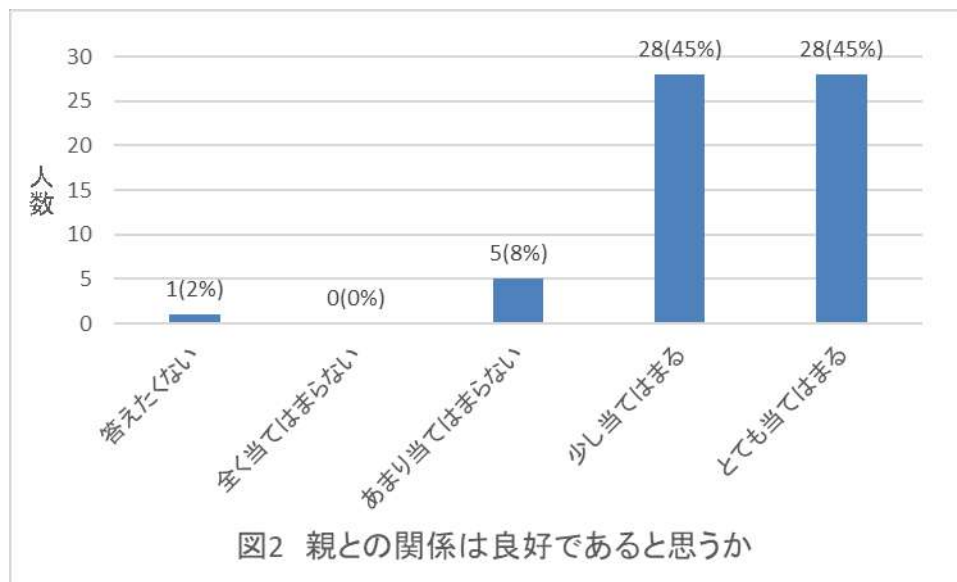
## 結果

有効回答数 62名（男性23名、女性37名、その他2名）



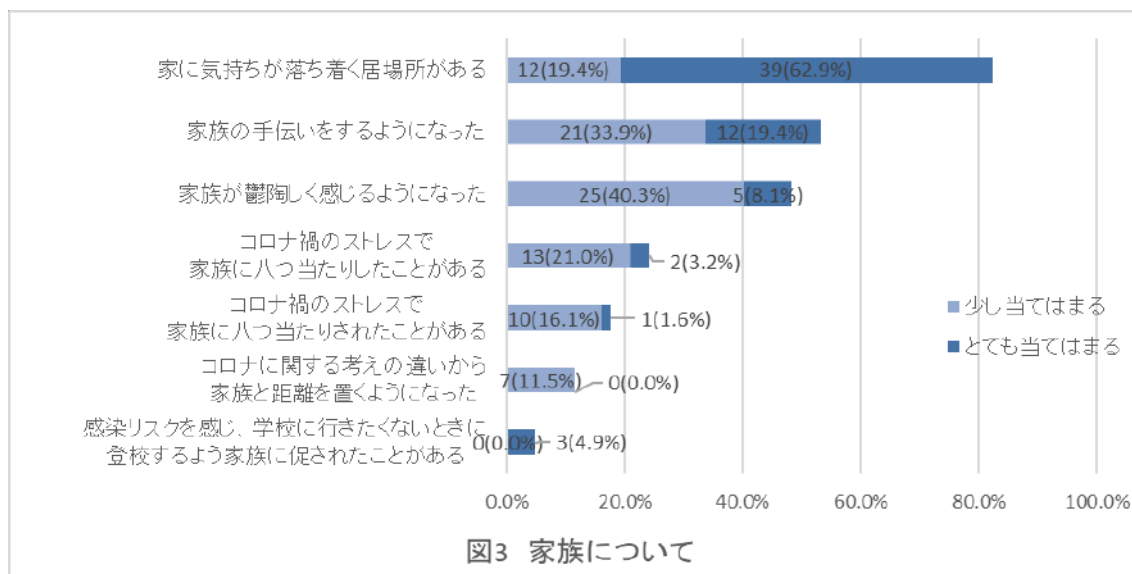
## 1. 暮らしている環境と親との関係について

暮らしている環境について尋ねた（図 1）。実家と回答した人が 89%，一人暮らしと回答した人が 11%であった。また、親との関係は良好であると思うかについて尋ねた（図 2）。すると「とても当てはまる」「少し当てはまる」という肯定的な回答が 90%得られた。



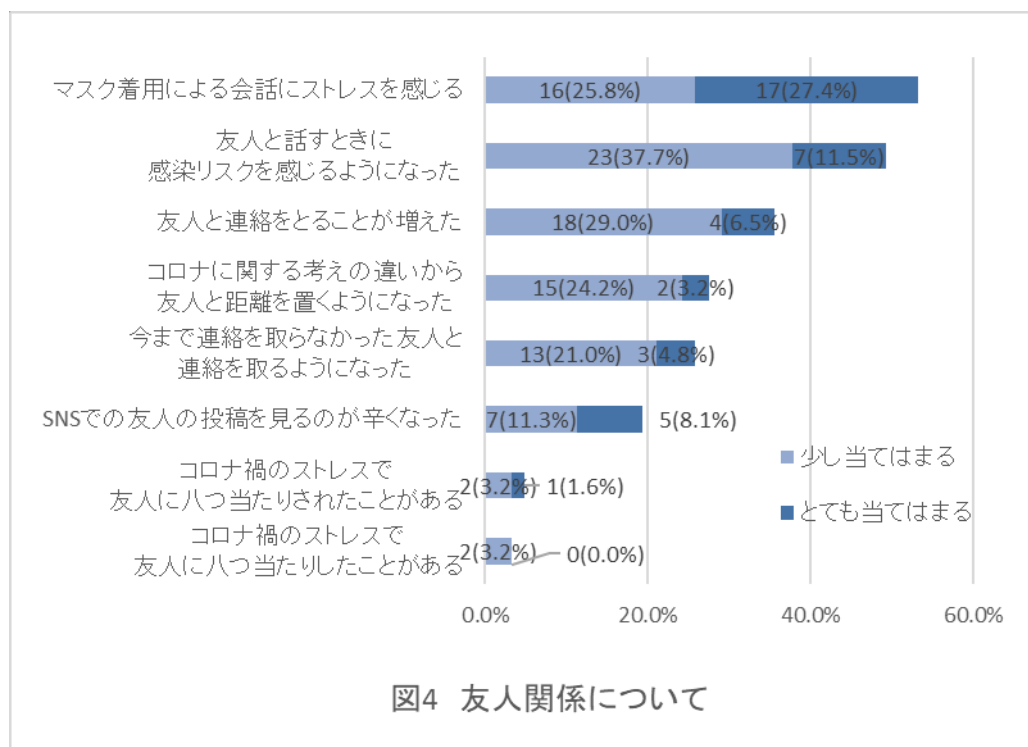
## 2. 家族について

家族について尋ねた項目に「とても当てはまる」「少し当てはまる」と回答した割合の合計が多いものを順に図 3 に示す。ポジティブな側面である「家に気持ちが落ち着く居場所がある（82.3%）」が最も多く、次いで「家族の手伝いをするようになった（53.3%）」であった。また「家族が鬱陶しく感じるようになった（48.1%）」・「コロナ禍のストレスで家族に八つ当たりしたことがある（24.2%）」という結果からネガティブな側面も体験していることが示された。



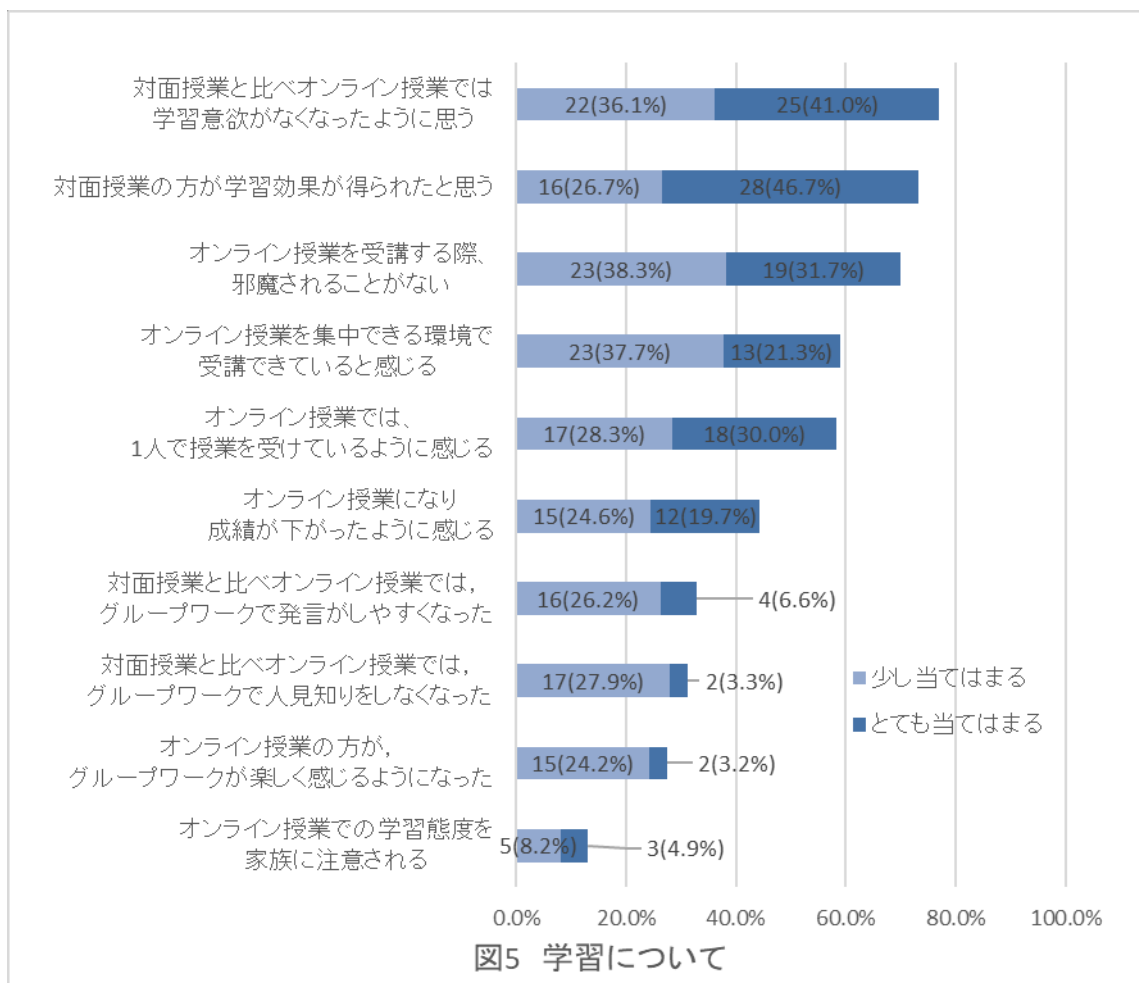
### 3. 友人関係について

友人関係について尋ねた項目に「とても当てはまる」「少し当てはまる」と回答した割合の合計が多いものを順に図4に示す。「マスク着用による会話にストレスを感じる(53.2%)」が最も多く、次いで「友人と話すときに感染リスクを感じるようになった(49.2%)」・「連絡を取ることが増えた(35.5%)」・「コロナに関する考えの違いから友人と距離を置くようになった(27.4%)」・「今まで連絡を取らなかった友人と連絡を取るようになった(25.8%)」が多かった。



### 4. 学習について

学習について尋ねた項目に「とても当てはまる」「少し当てはまる」と回答した割合の合計が多いものを順に図5に示す。「対面授業と比べオンライン授業では学習意欲がなくなったように思う(77.1%)」が最も多く、次いで「対面授業の方が学習効果が得られたと思う(73.4%)」であった。さらに受講環境について尋ねた項目では「オンライン授業を受講する際、邪魔されることがない(70.0%)」・「オンライン授業を集中できる環境で受講できていると感じる(59.0%)」・「オンライン授業では1人で授業を受けているように感じる(58.3%)」という回答が得られた。そして「オンライン授業になり成績が下がったように感じる(44.3%)」から、約4割の学生が成績の低下を体感していることが示された。またグループワークについて尋ねた項目では「対面授業と比べオンライン授業ではグループワークで発言がしやすくなった(32.8%)」・「対面授業と比べオンライン授業ではグループワークで人見知りをしなくなった(31.2%)」・「対面授業と比べオンライン授業ではグループワークが楽しく感じるようになった(27.4%)」という回答が得られた。



## 考察

本研究では新型コロナウイルス流行による、人間関係と学習への影響を具体的に明らかにすることを目的として、調査を実施した。その結果、家族や友人との関わりや、学習への意欲・グループワークのしやすさが変化することが明らかになった。

親との関係は良好であると回答した人が多く、家族の手伝いをするようになったというポジティブな行動の変化が見られた。しかしながら、家族を鬱陶しく感じ、コロナ禍のストレスを八つ当たりするなど関係悪化に繋がるような行動の変化も見られた。このことは、家族と過ごす時間が大幅に増えたにも関わらず、外出自粛によってストレスを解消できる機会が減ったことで生じたと考えられる。

友人と関わる際に、マスク着用によるストレスや感染リスクを感じるなど以前にはなかったストレスが生じていた。また友人と連絡をとることが増えたと回答した人が35%であった。一方で、コロナに関する考えの違いから友人と距離を置くようになったという人も27.4%であったことは、新型コロナウイルスは友人との関係性を見直すきっかけにもなったと言える。

対面授業と比べオンライン授業では学習意欲がなくなったと感じる人が約 8 割おり、対面授業の方が学習効果が得られたと回答した人が約 7 割であった。またオンライン授業で成績が下がったと感じると回答した人が約 4 割であった。このことから、オンライン授業によって学習が継続されていたが、学生に与える影響は同様ではなかったことが分かる。学習効果の高い授業の受講機会が失われたことから、一度対面授業で復習を行うなど何らかの方法で補填する必要がある。

オンライン授業の受講環境について、邪魔される人が約 3 割、集中できる環境ではない人が約 4 割いることが分かった。これは学習意欲や効果に大きく影響することが考えられる。対面授業では環境が統一され、インターネット接続の不具合などを気にする必要がないことがメリットであったと言える。

オンライン授業でのグループワークに関しては、発言がしやすくなった、人見知りをしなくなった、楽しく感じるようになったと回答した人がそれぞれ約 3 割であった。したがって、グループワークにおいてはオンライン授業の方にメリットが多く見られた。オンライン授業特有であるカメラのオン・オフ機能について本調査では触れなかった。だがカメラオフの設定を用いたグループワークでは、双方の顔が見えない状態で実施していたことによる一種の匿名性があったと考えられるため、これが影響しているのではないだろうか。相手の表情が見えないことで、必要以上に発言に対して緊張感が生まれることなく、ワークを進めることができたと考えられる。

本研究では自由記述の項目を用意していなかった。そのため、グループワークについてカメラのオン・オフの違いによる影響はあるのかなど、詳細かつ具体的な要因を明らかにすることができなかった。また項目の相関についても検討できていなかった。今後は、自由記述を用いるなど質的調査を実施することや、相関分析を行うことで、詳細かつ具体的な要因を明らかにすることが求められる。

## 参考文献

- 阿部真由美・香西佳美・遠藤健・蔣妍・森田裕介(2021). 大学教員のオンライン授業に関する知識の実態 および授業の満足度と意欲に与える影響 日本教育工学会論文誌
- 永田夏来(2021). 新型コロナウイルスパンデミックと家族一家庭内コミュニケーションにおける困難と可能性をめぐって— マス・コミュニケーション研究 98 巻 p41-50
- 佐々木典彰(2020). コロナ禍における短大生のストレス状況—コーピングとバーンアウトに着目して— 東北短期大学紀要論文 p19-24
- 田場真理・石垣恭子(2021). オンライン上グループワークにおける学習成果に繋がる学生の態度と認知の関係 コンピュータ&エデュケーション 50 巻 p72-77

# コロナ禍における人間関係の変化

19C117 上田 雪乃、19C130 小野塚悠太朗

19C164 坂本 龍二、 19C216 矢崎 瑛

## 問題と目的

コロナ禍で起きた変化の中で人間関係の変化は、「経済に関する変化」に次いで大きい社会問題として扱われている。具体的な問題としては授業や仕事等直接会うことを避けるようになったことによるオンライン化が進み直接人と合わないことが増えたことが挙げられる。先行研究によれば、1. ストレス要因の中で最も大きいのは人間関係であること（浦川、萩, 2008）、2. 令和2年の警察庁が発表している自殺者数の推移では全体的に上昇していること。コロナ禍によって対面でのコミュニケーションが難しくなり、そのことによる環境の変化が心に及ぼす影響があるのではないかと考えられる。この調査ではコロナ前後の人間関係の変化についてと、その変化が心に及ぼす影響について調査することを目的とする。なお本調査において「コロナ前」とは2020年3月13日に行われた初の緊急事態宣言以前のこと。「コロナ後」は自粛期間中のこととする。

## 方法

### 調査方法

Microsoft Forms を用いて、調査票を配布、回答を得た。

### 調査対象者

関東 T 大学に在籍している社会調査実習履修者 70 名のうち 68 名（男 26 名、女 42 名）に調査票を配布した。

有効回答数 52 名（男 19 名、女 33 名）

### 調査時期

12月9日～1月20日

### 調査内容

質問はすべて三件法で行った。内容としては大きく分けて

- ・コロナ前との人間関係の広さの変化について、コミュニケーションをとる方法について
- ・外出の頻度について（近距離、遠距離）
- ・人に会う機会の多さ、関わる年齢について
- ・コミュニケーション用いるおもなツールについて質問項目を設けた。

一部の設問を除いては三件法で回答してもらった後に、その回答について「良い変化だと思う」、「特になんとも思わない」、「悪い変化だと思う」の三件法で自己評価をする項目を設けた。

## 結果

コロナ前と比べて全体での人間関係(関わる人の数)が、「増えた」と答えた学生が10人(19%)、「変化はない」が25人(48%)、「減った」が17人(33%)となった。このことから人間関係に変化がなかった人が最も多いことが明らかになった。上記の質問より分岐した質問で、「増えた」と答えた学生は9割が「良い変化だと思う」と回答し、変化がないと回答した学生は72%が「特になんとも思わない」と回答し、「減った」と答えた学生は18%が「良い変化だと思う」と回答し、「悪い変化」と回答した学生が59%という結果となった。(図1)

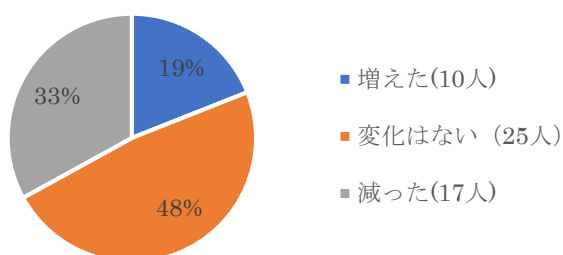


図1 人間関係(関わる人の数)

コミュニケーションの場の変化についての質問では、「対面からインターネットに変わった」が20人(38%)、「変化はない」30人(58%)、「インターネットから対面に変わった」2人(4%)という結果となった。インターネットに変わった人の中では「特になんとも思わない」という自己評価をした学生は55%と最も多くなり、「良い変化だと思う」、「悪い変化だと思う」と答えた学生は回答者数1の差に留まりあまり違いは見られなかった。変化がなかった学生は「特になんとも思わない」が90%となった。減ったと答えた学生は100%「良い変化だと思う」と答えた。

コミュニケーションに用いる主なツールとしては、「対面での会話」21人(40%)、「SNS」30人(58%)、「電話」1人(2%)という結果となり、SNSを用いたコミュニケーションを主として使う学生が最も多いという結果となった。(図2)

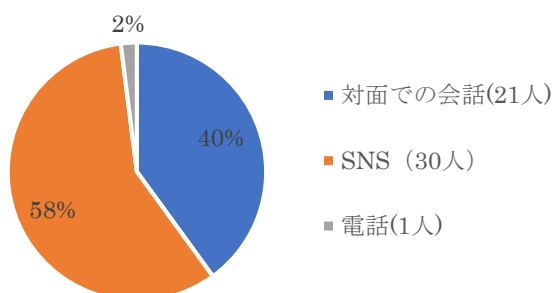


図2 主なコミュニケーションツール

近場での外出の機会の増減に関する質問では、「増えた」19人(37%)、「変化なし」22人(42%)、「減った」11人(21%)という結果となった。「増えた」と答えた学生の中では「良い変化」と答

た学生が 63%と多く、「悪い変化」だと答えた学生はいなかった。「変化はない」と答えた学生は全員が「特になんとも思わない」と答えた。「減った」と答えた人は「特になんとも思わない」と答えた学生が最も多かったが、良い変化と答えた学生も 2 人いた。遠方への外出については「増えた」4 人 (8%)、「変化はない」27 人 (52%)、「減った」21 人 (40%) となった。結果から遠方への外出をする人の割合は近場に外出する人の割合に比べ減ったといえる。遠方への外出が「増えた」と答えた学生の自己評価では、「良い変化」と捉えている人と「特になんとも思わない」と答えている人が同数となり、「変化がなかった」学生は 89%が「なんとも思わない」と答えた。「減った」と答えた学生は「悪い変化」だと答えた人が 43%と最も多かったが「良い変化」だと答えた人も 19%と一定数いる結果となった。

人と連絡を取る頻度が「増えた」人は 17 人 (33%)、「変化はない」27 人 (52%)、「減った」8 人 (15%) という結果となった。「増えた」と答えた学生の中では「良い変化」と答えた人が 82%と多数を占めた。「変化がなかった」人は「なんとも思わない」89%、「減った」と答えた人は「悪い変化」だと答えた人が 75%と多かった。(図 3)

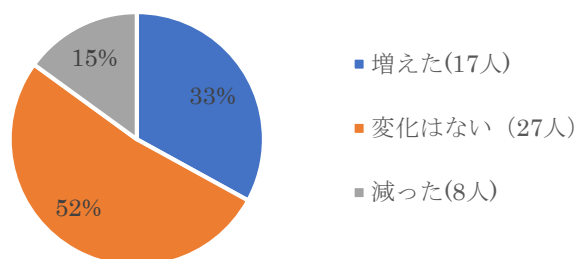


図3 人と連絡を取る頻度

必要のない用事で人と会う機会が「増えた」と答えた人は 3 人 (6%) と少なく、「変化なし」25 人 (48%)、「減った」24 人 (46%) という結果となった。「増えた」と答えた学生は全員「良い変化」だと評価していた。「変化がなかった」学生は全員が「特になんとも思わない」に、「減った」と答えた人は 17%、「特になんとも思わない」と答えた人は 46%、「悪い変化」だと評価した人は 38%という結果となった。

### 考察

今回冒頭の目的の部分でコロナ禍により人と実際に会ってコミュニケーションをとることが少なくなったと記述した。本調査においてはコロナ禍によって対面での人間関係が狭まったと答えた人は、約三分の一と一定数存在することが改めて分かった。また「人間関係に変化がなかった」と答えた人の自己評価として悪い変化だと評価している人が一人もいないことが分かった。コロナウィルスが蔓延する前の世の中であれば、「変化がない」と答えた人の中に人間関係を広められなかったことに対して悪い自己評価を下す人も一定数いるのではないかと考えられる。このことから、コロナ禍のため人間関係が狭まることが普通であると捉えている人が多いのではないかと考えられる。また「狭まった」と答えた人の自己評価として約 6 割の人が「悪い変化」だと



していた。冒頭の目的部分で人間関係が最大のストレス要因であるという記述をしたが今回の調査では、学生が人とのつながりを求めていると考えられ、コロナ禍という特殊な環境下の調査ではあるが、人間関係が大きなストレス要因になっている傾向はあまり感じられなかった。

コミュニケーションの場がどう変化したかという問いに対しては、対面からインターネットに変化したと回答した学生が約4割で、対面からインターネットに変化した学生の数を大きく上回った。コミュニケーションの場がインターネットに変わったと答えた学生は自己評価として「特になんとも思わない」と答えた人が過半数を占めたものの「良い変化」「悪い変化」それぞれに捉えた人がほぼ同数いた。このことからインターネットでのコミュニケーションに抵抗を持っている人、対面でのコミュニケーションに抵抗を持っている人、それぞれの価値観を持っている人が存在していることが明らかになった。

外出機会に関する設問では、遠方への外出の機会が減ったと答える学生が多かったが、近場への外出機会は増えた学生が約4割と多く、増えた学生の多くが「良い変化」と評価していた。このことから遠方への外出がなかなかしづらくストレスがたまる中で近場への外出を良いリフレッシュの機会として活用していた人が多いのではないかと考えられる。一方で近場への外出も遠方への外出も「減った」と答えた人の中には「良い変化」ととらえる人もいた。このことからコロナ禍において外出することがどちらかといえば悪とされる風潮があったため、出かけないことをポジティブに捉えている人がいるのではないかと想定できる。

人と連絡を取る機会についての質問では、連絡を取る機会が「増えた」と答える学生が多く、その他の自己評価からも、今回の調査対象者の多くが、会えない分の寂しさや不安をSNSでつながりを持つことで解消していたのではないかと考えられる。また個人の見解としては今回の調査対象者が臨床心理学科の学生ということで、「人とつながりたい」、「話をしたい」といった考えを持つ人が多かったが故の結果であったのではないかと考えた。

本研究ではサンプル数が少なかったこと、生活の流れが変わった時期から間が空いてからの調査であったことなどが課題として挙げられる。回答者にとって自分の生活を振り返りやすいよう、明確な対象時期をわかりやすい場所に提示することが大切であると考えた。またより答えやすい質問項目を作成できれば回答率も上がり、より仮説に近い結果が得られるのではないかと考えられる。

## 引用文献

浦川加代子,萩典子 (2008) 勤労者のストレス対処行動と職業性ストレスとの関連  
[file:///C:/Users/acek1/Downloads/AA113538240100015%20\(2\).pdf](file:///C:/Users/acek1/Downloads/AA113538240100015%20(2).pdf) (2022年1月28日)

厚生労働省自殺対策推進室, 警察庁生活安全局生活安全企画課 (2021) 令和2年中における自殺の状況 [https://www.npa.go.jp/safetylife/seianki/jisatsu/R03/R02\\_jisatuno\\_joukyou.pdf](https://www.npa.go.jp/safetylife/seianki/jisatsu/R03/R02_jisatuno_joukyou.pdf) (2022年1月28日)

# コロナによる大学生の生活への影響

19C112 泉 美里、19C139 鎌田 愛未

## 目的

近年、新型コロナウイルスが蔓延している。コロナの影響によりマスクの着用の義務づけや接触回避など、人々の生活様式が一変した。その中でも大学生はオンライン授業が主な講義方法になり、同じ講義を受ける人の顔がわからないまま大学生生活を送っている人もいるというニュースが流れた。そこで、本研究では、コロナの影響で大学生の生活にどのような変化があるのか様々な項目から調べ明らかにしていくことを目的とする。

## 方法

### 調査方法

Microsoft Forms を用いて、調査票を配布、回答を得た。

### 調査対象者

社会調査実習履修者 70 名のうち 68 名（男 26 名、女 42 名）に調査票を配布した。

### 調査時期

12 月 16 日～1 月 11 日

## 結果

有効回答数は 57 名である。

「Q1:オンライン授業になってから休学を考えたことがある」については「ある」6 名（11%）、「いいえ」51 名（89%）であった。

「Q2:コロナ渦になってから授業の欠席回数が増えた」については「増えた」11 名（19%）、「変わらない」36 名（63%）、「減った」10 名（18%）であった

「Q3: オンライン授業になってから授業の出席回数が増えた」については「増えた」10 名（18%）、「変わらない」37 名（65%）、「減った」10 名（18%）であった

「Q4:対面授業よりオンライン授業のほうが受けやすいと感じたことがある」については「ある」44 名（77%）、「ない」13 名（23%）であった

「Q5:オンライン授業になってから課題の多さを感じたことがある」については「ある」52 名（91%）、「ない」5 名（9%）であった

「Q6:オンライン授業になってから課題の未提出が増えた」については「増えた」18 名（32%）、「変わらない」32 名（56%）、「減った」7 名（12%）であった

「Q7:現在アルバイトをしている」については「はい」47 名（82%）、「いいえ」10 名（18%）であった

「Q8:コロナ渦になってから収入は増えた」については「増えた」13 名（23%）、「変わらない」32 名（56%）、「減った」12 名（21%）であった

「Q9:増えた金額と理由」について、増えた金額は「2万」と「3万」が3名ずつ。「5万」が2名であった。理由は「アルバイトの時間が増えたから」と答えた人が8名。「アルバイトを始めた」と答えた人が1名であった。

「Q10:減った金額と減って困ったこと」について、減った金額は「3~5万」と答えた人が4名。「9割以上減った」と答えた人が2名。「半分くらい減った」と答えた人が2名であった。困ったことで最も多かったのが「自由に使えるお金が減った」で5名であった

「Q11:コロナ渦になってから金銭面に不安を感じる」について「感じる」9名(16%)、「やや感じる」25名(44%)、「あまり感じない」12名(21%)、「感じない」11名(19%)であった

「Q12:コロナ渦で外出が怖くなったと感じる」については「感じる」6名(11%)、「やや感じる」28名(49%)、「あまり感じない」11名(19%)、「感じない」12名(21%)であった

「Q13:コロナ渦になってから生活リズムが不安定になった」については「不安定になった」33名(58%)、「変わらない」21名(37%)、「規則的になった」3名(5%)であった

「Q14:コロナ渦になってから睡眠時間が増えた」については「増えた」31名(54%)、「変わらない」22名(39%)、「減った」4名(7%)であった

「Q15:コロナ渦になってから身だしなみに気を遣わなくなった」については「気を遣わなくなった」23名(40%)、「変わらない」32名(56%)、「気を遣うようになった」2名(4%)であった

「Q16:食事のとり方として、最も増えたもの」について、回答人数が最も多かったのは「自炊」で29名。次に多かったのは「中食(惣菜等を買ってくる、デリバリーを利用する)」で21名。最後に「外食」で7名であった。

「Q17:コロナ渦になってからネットショッピングをする回数が増えた」については「増えた」29名(51%)、「変わらない」27名(47%)、「減った」1名(2%)であった

「Q18:ネットショッピングで何を買ったか」については「服」と回答した人が17名と一番多かった

「Q19:現在一人暮らしをしている」については「はい」7名(13%)、「いいえ」49名(88%)であった

「Q20:コロナ渦で一人暮らしをやめようと考えたことがある」については「ある」2名(7%)、「ない」26名(93%)である

「Q21:コロナ渦になってから友人と連絡する回数が増えた」については「増えた」19名(35%)、「変わらない」27名(49%)、「減った」9名(16%)であった

「Q22:コロナ渦になってから孤独感を感じる」については「感じる」8名(15%)、「やや感じる」17名(31%)、「あまり感じない」20名(36%)、「感じない」10名(18%)であった

## 考察

本研究では、新型コロナウイルスの影響によって大学生の生活がどのように変化したのかを明らかにするために調査を行った。

オンライン授業での出席率は増えた人と減った人がどちらも18%前後と差はない。そして「対面授業よりオンライン授業のほうが受けやすいと感じる」という質問に「受けやすい」と答えた

人が7割ほどいるため、オンライン授業が大学生の学業にあっているとと言える。しかし、「課題」の項目では、課題の多さを感じる人が9割おり、課題の未提出が増えた人が3割ほどいる。また、「コロナ渦になってから睡眠時間が増えた」という人が54%もおり、「バイトが減った」という人は12名もいるため、「課題の量の多さ」が理由で未提出が増えたのか「オンラインの課題が増えた」ことが理由なのか、今回の調査では推測できない。今後調査するときは「どうして未提出が増えたのか」という項目をいれるべきだと考える。

友人関係では、連絡をとる回数が増えた人が30%以上いるものの、孤独感を感じる人は50%近くいる。また、コロナの影響で外出に恐怖を感じる人や金銭面に不安を感じる人が60%ほどいる。これらのことから連絡はとるものの、外出の恐怖や金銭面の不安が理由で友人と会うことが少なくなり、50%もの人がコロナの影響で孤独感を感じるのではないかと推測される。

本研究では、様々な面から質問したものの内容が浅く、調査内容が不十分であった。したがって今後は、理由も回答項目に入れ、各項目の内容も深掘りできるような回答項目を作ることが必要である。

## 大学生のコロナウイルスによる生活とコミュニケーションの変化

19C170 武士日向 19C180 庄司理恋

19C215 村山奈乃子 19C219 山口桜

### 問題と目的

新型コロナウイルス感染症は、2019年12月初旬に、中学の武漢市で最初の患者が報告された。以降瞬く間に世界各国へと感染が拡大し、2022年1月までに3.26億人以上の感染が確認されている。コロナウイルスの感染拡大により各国ではロックダウンが実施され、経済危機に直面した。人との接触や移動の制限により、生産活動や物流が止まり、物資の不足が生じるなど混乱状態が続いた。国内では2020年1月に初めて感染者が確認され、感染の広がりとともに、マスクやアルコール消毒が全国各地で品薄となった。また、政府による緊急事態宣言が発令され、夏に行われる予定だった東京五輪・パラリンピックが史上初めて延期になるなど日本でもコロナウイルスの感染の影響は多大なる被害をもたらした。

緊急事態宣言の発令により不要不急の外出自粛が要請された。それに伴い家で過ごす時間が大きく増えたことで、多くの人々が生活習慣の変化を実感した。睡眠時間の変化や食事の量、アルコールの摂取頻度の増加など様々な変化が挙げられ、それにより多くの健康被害が生じた。また、コロナ禍により大学生はオンライン授業への移行を余儀なくされた。オンライン授業への移行やサークル活動・部活動などの活動休止によりコミュニケーションの場が奪われ友人関係の不安や孤独感に襲われる人が多くいる。大学生活だけでなく、アルバイト先の休業や時短営業により収入が減り経済的に困窮する学生も増え、コロナウイルスの影響による生活の変化は著しいものとなっている。

コロナウイルスが蔓延するなか人々の生活は大きな打撃を受け生活様式の変更を余儀なくされている。そこで大学生はコロナウイルスによってどのように生活が変化したのか、コミュニケーションの減少によって何が変わったのか。そしてこれらのことが変化したことによってどのような影響が及んだのかを知るためにアンケート調査を実施した。

### 方法

#### 調査方法

Microsoft Forms を用いて調査票を配布し回答を得た。

#### 調査対象

社会調査自習を履修している受講者70名のうち68名(男26名、女42名)に調査票を配布した。回収率は83%であった。

#### 調査時期

12月3日～12月23日に行った。

## 結果

有効回答数 57 名（男 21 名、女 34 名、その他 2 名）

### 1. 生活の変化

食事の量・体重の変化・体力の変化について「非常に増えた」「増えた」「変わらない」「減った」「非常に減った」に回答した人数の割合を算出した（図 1）。食事の量では「変わらない」と回答した人が一番多く 38.6%だった。「増えた」が 26.3%、「減った」が 28.1%で増えた人より減った人の割合の方が多かった。体重の変化では「増えた」が 26.3%、「減った」が 36.8%でこちらも増えた人より減った人の割合の方が多かった。体力の変化では「減った」が 38.6%、「非常に減った」が 26.3%で半数以上が体力の低下を感じていた。反対に「増えた」「非常に増えた」と回答した人は合わせて 8.8%しかいなかった。

睡眠の変化では起床時間が遅くなったと回答した人は 35 人、早くなったと回答した人はわずか 2 人しかいなかった。就寝時間では遅くなったと回答したのは 36 人で早くなったと回答した人は 3 人とどちらも大きく偏った結果となった。

コロナ禍での新しい趣味では 16 人が「増えた」と回答し「減った」と回答した人は一人もいなかった。

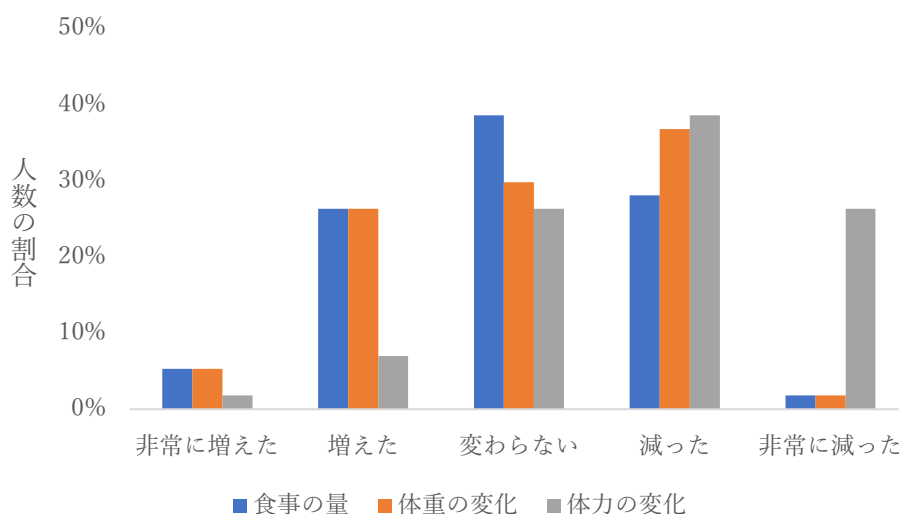


図 1 生活の変化

### 2. 収入・支出の変化

収入の変化では「増えた」と回答した人は 13 人、「減った」と回答した人は 19 人で収入が減った人の方が多いことが分かった（図 2）。増えたと回答した人の主な仕事（アルバイトも含む）は薬局、スーパー、デリバリー、特別老人ホームやコールセンターなどが挙げられた。その中でも一番多く挙げたのは飲食店の仕事であった。「減った」と回答した人は飲食店が 12 人と一番多い結果となった。その他にドラッグストアやパチンコ、塾

講師などが挙げられた。支出の変化では「増えた」と回答した人は28人、「減った」と回答した人は16人と支出が増えた人の方が多かった(図3)。増えたと回答した人の使い道で一番多かったのは趣味で二番目は美容費であった。減った人は遊び代が一番多い回答となった。

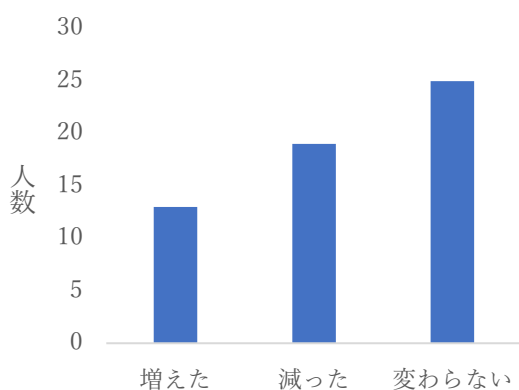


図2 収入の変化

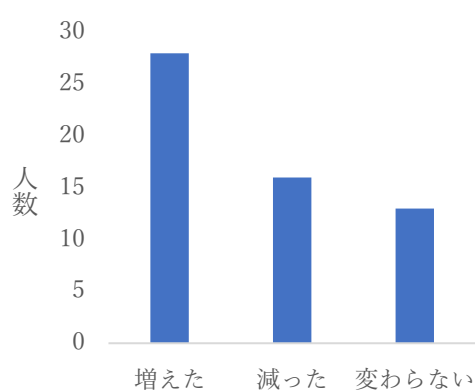


図3 支出の変化

### 3. 友達とのコミュニケーションの変化

LINEのトーク頻度・電話の頻度・対面での会話の頻度について「非常に増えた」「増えた」「変わらない」「減った」「非常に減った」に回答してもらった。(図4)

LINEのトーク頻度では「変わらない」と答えた人が52.6%で半数を占めた。また、「増えた」が22.8%、「減った」が12.3%で増えた人の方が多かった。電話の頻度は「増えた」が30.9%、「減った」が12.3%でこちらも増えた人の割合が多かった。「変わらない」と回答した人は45.5%であった。対面での会話の頻度では「減った」の41.8%が一番多い回答となった。二番目は「変わらない」で30.9%、三番目は「非常に減った」で18.2%の結果になった。

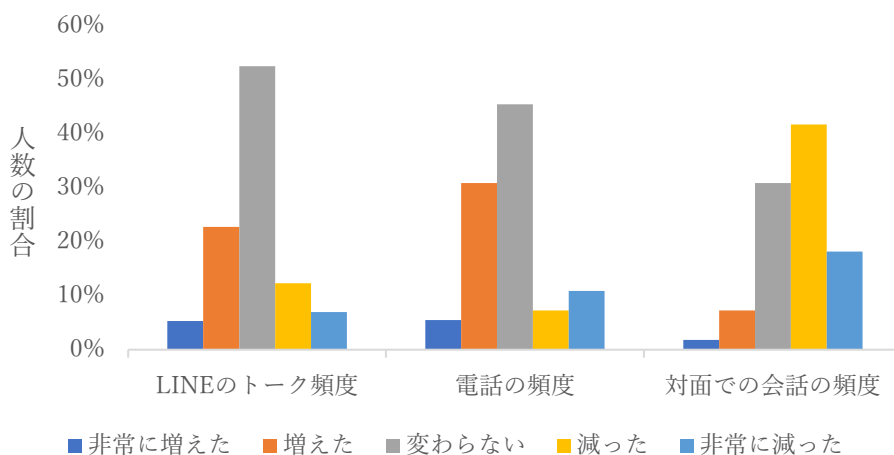


図4 コミュニケーションの変化(友人)

## 考察

本調査では大学生がコロナウイルスの影響によって生活様式や人とのコミュニケーションにどのような変化があるのかを明らかにするためにアンケート調査を行った。その結果身体の変化や、収入・支出の変化、友人とのコミュニケーションの変化が明らかになった。

### 1. 生活の変化

食事の量・体重の変化・体力の変化では「変わらない」と回答した人も一定数いたが、すべて増えた人よりも減った人の方が多いことや、睡眠の変化についても就寝時間が遅くなり起床時間も遅くなるということから生活習慣が変化したことが分かる。食事の量が減ったことで栄養不足になり体力が低下することや体力の低下により感染リスクや重症化リスクが高まること、起床時間が変化することで起こる食生活の乱れ、就寝時間が遅いことにより質の高い睡眠がとれず免疫力が一気に落ちることなどコロナウイルスの影響によって引き起こされた生活の変化には大きな健康被害がもたらされることが推測される。

### 2. 収入・支出の変化

収入の変化では減った人の方が多いことが分かった。全国大学生生活協同組合連合会(2020)の調査では約5割の大学生がアルバイト収入の減少に悩み、7割弱がコロナウイルスの影響で将来に不安を感じている実態が明らかになった。それに伴い家賃や生活費が払えず実家に戻らざるおえない状況や、大学費や奨学金の返済ができず休学や退学を余儀なくされる学生も多くいるのではないだろうか。

### 3. 友達とのコミュニケーションの変化

緊急事態宣言や三密に伴い友達と対面で会う機会は大きく減ったことが分かった。しかし「LINEのトーク頻度」や「電話の頻度」は増えた回答の方が多く、対面で会話ができない分SNSや電話を使ってコミュニケーションをとっていたのではないだろうか。人間は、人との関わりが少なくなると気づかぬ間にストレスや不安が大きくなり、睡眠や免疫力が低下してしまう。SNSや電話での繋がりはあったものの対面での会話が減ってしまったことにより、ストレスや不安が生じることも少なからずあったのではないだろうか。

これらのことからコロナウイルスの影響による生活の変化は、健康被害や収入の減少による困窮、ストレスなど様々な面で弊害が生じている。またコロナウイルスによる健康問題や経済・生活的困窮、コミュニケーションの減少により生じるストレスや孤独感、失業により生きる意味が失われたことにより2020年ではコロナ禍の影響などから自殺者は2009年以来11年ぶりに増加に転じた。

しかし本調査では収入が増加した人や、支出が減った人、新しい趣味に出会えた人などコロナウイルスの影響によって生活が変わったことでいい方向に動いた人があることも分かった。コロナウイルスによって生活は一変したが、対面での会話が減ったことや一人で過ごす時間が増えたこと、好きな時間に就寝し起床出来ることなどコロナ後の生活の方が自分



には合っているという人もいるのではないだろうか。生活やコミュニケーションの変化によって引き起こされたいい面に注目し調査をすればまた新たな知見が得られると考えられる。

#### 引用文献

河北新報 (2021). 長引くコロナ禍、時系列で振り返るアベノマスクに GoTo、オミクロン株登場 <https://kahoku.news/articles/20210901khn000034.html> (2022年1月26日)

健康二次被害防止 (2020). コロナ禍で急増！新型コロナウイルスが引き起こす「健康二次被害」とは？ [https://kenko-nijihigai.com/?page\\_id=166](https://kenko-nijihigai.com/?page_id=166) (2022年1月26日)

鶴見区 (2021). 健康コラム「コロナ禍における自殺の現状」  
<https://www.city.osaka.lg.jp/tsurumi/page/0000536570.html> (2022年1月26日)

東洋経済 (2020). コロナで「退学者が出る大学と出ない大学」の差  
[https://toyokeizai.net/articles/amp/349967?display=b&amp\\_event=read-body](https://toyokeizai.net/articles/amp/349967?display=b&amp_event=read-body) (2022年1月26日)

NHK NEWS WEB(2021). サークル文化は終わった？どうなる大学の友人関係  
<https://www3.nhk.or.jp/news/html/20210921/amp/k10013271021000.html> (2022年1月26日)

WIKIPEDIA (2022). Template:COVID-19 Pandemic date  
[https://en.m.wikipedia.org/wiki/Template:COVID-19\\_pandemic\\_data](https://en.m.wikipedia.org/wiki/Template:COVID-19_pandemic_data) (2022年1月26日)

# コロナ前後における生活の変化に伴う気分の変化に関する調査

19C158 小井手 雄太

19C191 西村 佑馬

19C224 渡辺 音季

## 問題と目的

2019年12月に中国で新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の発生が報告されると、瞬く間に世界各地で感染者が確認され、2020年1月に日本でも初めての感染者が確認された。政府は新型コロナウイルス感染防止措置として、2020年4月上旬から第一回目の緊急事態宣言を発令した。2022年1月現在、4回にわたり緊急事態宣言が発令されており、そのたびに人々は外出、イベントへの参加、店舗の営業、職場への出勤、学校への通学などが制限され、社会・経済活動に深刻な影響を及ぼしている。

また、新型コロナウイルスによるメンタルヘルスへの影響も懸念されている。厚生労働省の15歳以上を対象とした調査（2020）によると、感染が確認されてから何らかの不安（「神経過敏に感じた」「そわそわ、落ち着かなく感じた」「気分が落ち込んで、何が起ころうとも気が晴れないように感じた」）を感じた人が半数程度、確認されている。さらに、「生活スタイルが変化したことで、生活に何か良いと思える影響があったか」という項目において、良い影響は特にないと回答した人は50.7%と半数を超えていた。

中でも、感染拡大が緩和されてきた時期においてもなお遠隔授業を求められた大学生への影響は甚大である。藤平・久保・星野（2021）によると、コロナ禍で困ったことについて生活リズムの乱れ、運動不足、体調不良、友人とのコミュニケーション、精神的疲労、孤独などが挙げられた。さらに、増村（2021）は、活動できる状態にある学生にとって、正課外活動の自粛は学生の活性、安定、快適、覚醒すべてにマイナスの影響を与えている。

このことから、生活スタイルの変化により気分へ影響を及ぼしていることが示唆される。これまでの調査ではコロナ禍の経済状況の認知や遠隔授業の負担感と精神的健康への影響についての研究（飯田・水野・入江・西村・川崎・斉藤，2021）や日常生活の変化と体調について調べた研究（藤平・久保・星野，2021）がある。しかし、大学生の授業時間外の過ごし方と気分の変化についての研究は現時点では検討されていない。授業時間外の時間をどのように過ごすか気分の低下を防ぐことができるかが明らかになることで、取り組み次第で気分の低下を予防することができる。さらに、体調の変化は気づきやすいがあえて気分への影響を検討することで、体調に支障をきたす前に改善への行動に移すことができるとともに、うつ病などの精神疾患への予防につながると示唆できる。

このように、大学生がコロナ禍でどのような生活を送ることによって気分の低下を防ぐことができるのかを明らかにすることは、うつ病などの精神疾患や身体的健康を害することへの予防に役立つと考えられる。そこで本研究では、コロナ前後の生活を比較し、気分へ及ぼす影響について検討するために調査を行う。なお、本研究ではコロナ禍とパンデミックを同様の意味としてとらえることとする。

## 方法

### 調査対象者

関東 T 大学に在籍しており、社会調査実習を履修している 70 名のうち 68 名（男 26 名、女 42 名）に調査票を配布した。そのうち 52 名から回答を得た。

#### 調査時期

2021 年 12 月 9 日から 12 月 23 日に実施した。

#### 調査手続き

社会調査実習の授業内に Microsoft Forms での回答を依頼した。

#### 調査内容

質問は、以下の項目で構成されていた。新型コロナによる影響を調査するため、現在※<sub>1</sub>の時間の使い方についての項目と新型コロナパンデミック以前※<sub>2</sub>の項目に大きく二分した。各セクションで共通しているのは(1)から(3)の 3 項目であった。(1)一日に費やす時間、「家の中で行う趣味（運動やショッピング等）」「家の中で行う趣味（読書やゲーム、料理等）」などの 6 項目について「1 時間未満」「1 時間以上 3 時間未満」「3 時間以上 5 時間未満」「5 時間以上」の 4 件法、(2)週何日アルバイトをするかについて「していない」「1 日以上 3 日未満」「3 日以上 5 日未満」「5 日以上」の 4 件法、(3)睡眠時間はどれくらいかについて「3 時間未満」「3 時間以上 5 時間未満」「5 時間以上 7 時間未満」「7 時間以上」の 4 件法で回答を得た。現在の時間の使い方についての項目のみで用いた調査項目は以下の(4)から(7)であった。(4)パンデミック前と比べた現在の気分※<sub>3</sub>、「自分が幸福だと感じること」「自分が元気だと感じること」などの 5 項目について「増えた」「変わらない」「減った」の 3 件法、(5)起床・就寝時間の変化、「起きる時間が」「寝る時間が」の 2 項目について「早くなった」「変わらない」「遅くなった」の 3 件法、(6)新しく始めた趣味や習慣はあるかについて「はい」「いいえ」の 2 件法、(7)(6)であると回答した人に対して、新しく始めた趣味や習慣の具体事象について自由記述（複数回答可）での回答を求めた。

※<sub>1</sub>昨年 4 月からの新型コロナウイルスパンデミック禍。

※<sub>2</sub>新型コロナウイルス感染症が確認される以前の頃。

※<sub>3</sub>気分は日常生活の様子を平均して回答を求めた。

## 結果

有効回答数は 52 名（76.4%）であった。

現在・パンデミック以前の各セクションで得られたデータをもとに、特に変化がみられたものをパンデミック前後で対応する項目同士まとめた。(1)時間の使い方を図 1、(2)気分の変化を図 2、(3)睡眠時間を図 3、(4)寝る時間・起きる時間の変化を図 4、(5)新しく始めた趣味や習慣を図 5 とした。(1)から(4)において選択肢による回答からパンデミック前後を比較すると以下の結果が得られた。(5)では、自由記述によって得られたデータを 4 つのカテゴリーに大きく分類したところ以下のような結果になった。

### (1) 時間の使い方

パンデミック前後の時間の使い方の変化が著しかったのは、家の外で行う趣味（運動やショッピング等）、家の中で行う趣味（読書やゲーム、料理等）、友人との対面交流（サークルや飲み会、遊びに行く等）の 3 項目であった。

まず、家の外で行う趣味についてパンデミック前は 1 時間未満が 48.1%であったのに対し、パンデミック後は 55.8%と 7.7%増加していた。また、3 時間以上 5 時間未満はパンデミック前が 13.5%であったのに対し、パンデミック後は 5.8%と 7.7%減少していた。

次に、家の中で行う趣味についてパンデミック前は 1 時間以上 3 時間未満が 34.6%であったのに対し、パンデミック後は 26.9%と 7.7%減少していた。また、5 時間以上はパンデミック前が 15.4%であったのに対してパン

デミック後は25%と9.6%増加していた。

最後に、友人との対面交流について3時間未満までの割合はパンデミック前が55.8%、パンデミック後は55.7%と変化は見られなかったが、3時間以上と比較すると3時間以上5時間未満がパンデミック前は21.2%であったのに対し、パンデミック後は28.8%と7.6%増加していた。それに対して5時間以上はパンデミック前が23.1%であったが、パンデミック後は15.4%と7.7%減少していた。

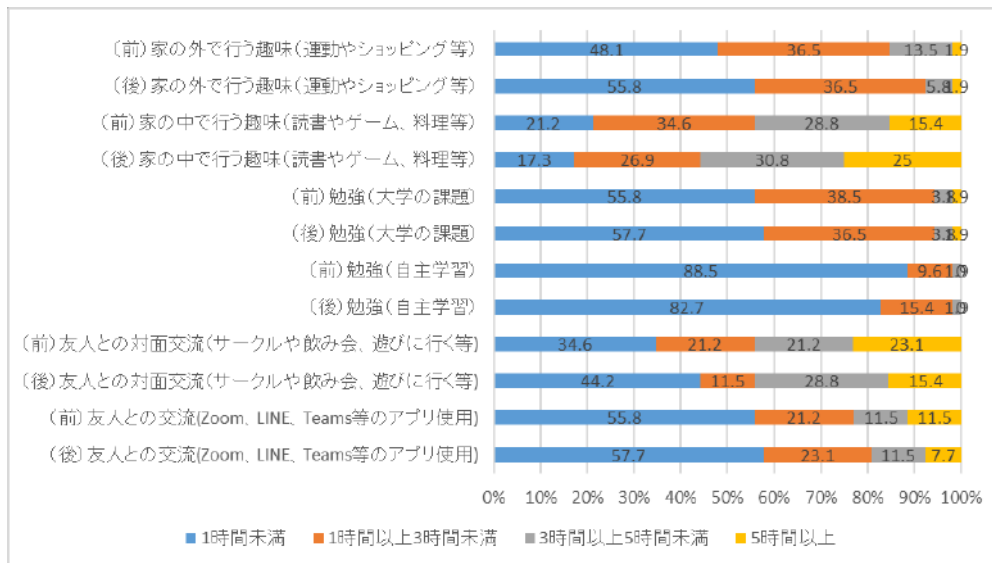


図1 パンデミック前後における授業時間以外の時間の使い方の変化 (%)

## (2) 気分の変化

「自分が幸福だと感じること」「自分が元気だと感じること」「慢性的な眠気を感じること」「疲れがたまっていると感じること」の全てにおいてパンデミック前後での変化は「変わらない」が最も多いという結果であった。一方、「憂鬱だと感じること」においては半数の50%が「増えた」と回答し、「変わらない」38.5%、「減った」11.5%と比べてもその差は歴然であった。さらに、「自分が元気だと感じること」「慢性的な眠気を感じること」「疲れがたまっていると感じること」において「変わらない」を除外してみると、「増えた」と回答する人が「減った」と回答する割合よりも大きいという結果が得られた。具体的に示すと、「自分が元気だと感じること」は「増えた」が32.7%、「減った」が28.8%、「慢性的な眠気を感じること」は「増えた」が40.4%、「減った」が11.5%、「疲れがたまっていると感じること」は「増えた」42.3%、「減った」が15.4%であった。

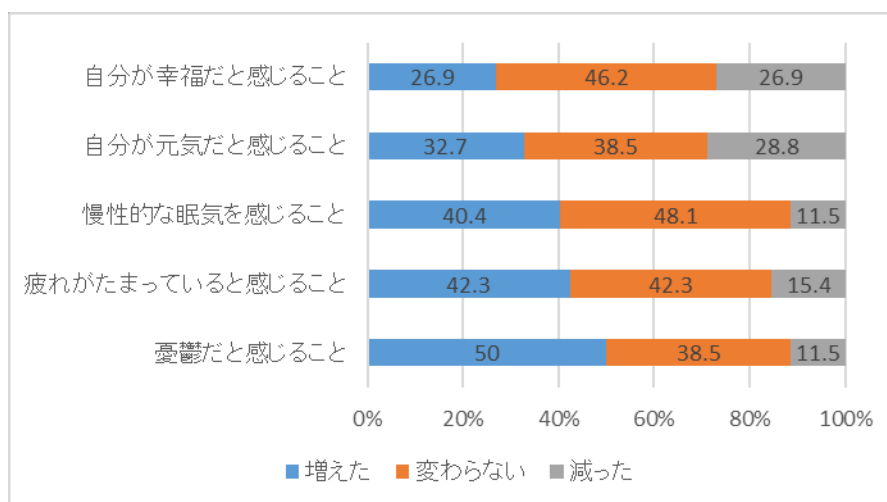


図2 パンデミック前と比較した現在の気分の変化 (%)

(3) 睡眠時間

パンデミック前後の睡眠時間の変化について、7時間以上の人割合にあまり変化は見られなかったが、5時間以上7時間未満の割合が51.9%から59.6%と7.7%増加していた。それに伴い、3時間以上5時間未満の割合が21.2%から15.4%と5.8%減少していた。

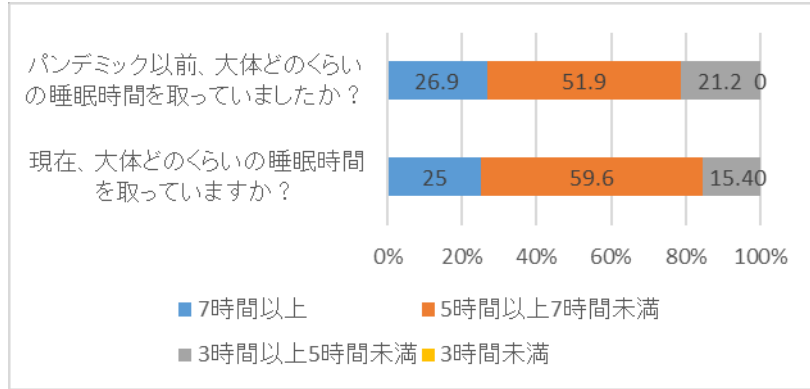


図3 パンデミック前と後の睡眠時間の割合 (%)

(4) 寝る時間・起きる時間の変化

パンデミック前と比べて現在の寝る時間、起きる時間の変化を尋ねたところ、「寝る時間」・「起きる時間」ともに「遅くなった」と回答する人の割合が約6割を占めていた。「寝る時間」で「遅くなった」と回答した人の割合が59.6%、「変わらない」は28.8%、「早くなった」は11.5%となっており、「遅くなった」の割合が最も多いという結果であった。また、「起きる時間」においても「遅くなった」の割合は57.7%、「変わらない」は30.8%、「早くなった」は11.5%と「遅くなった」の割合が最も多いという結果であった。

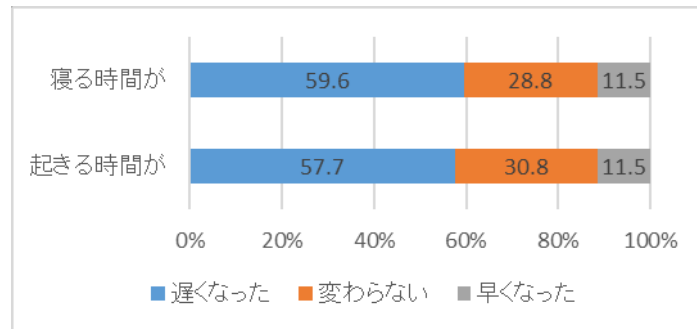


図4 パンデミック前と比較した現在の就寝・起床時間の変化 (%)

(5) 新しく始めた趣味や習慣

パンデミック後に新しく始めた趣味や習慣を「手を動かす系」「体を動かす系」「鑑賞系」「その他」の4つに分類した。最も多かったのが絵を描く、料理、ゲームといった「手を動かす系」の趣味や習慣で47.4%であった。次に多かったのが筋トレや運動といった「体を動かす系」の趣味や習慣で26.3%、その次に多かったのが読書やアニメ鑑賞といった「鑑賞系」の趣味や習慣で21.1%であった。

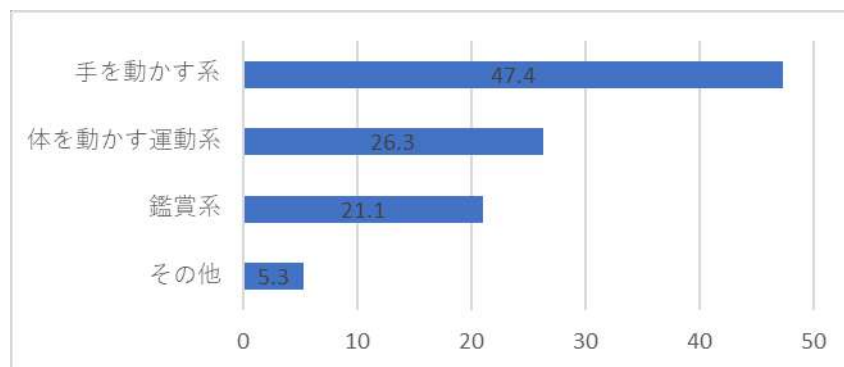


図5 新しく始めた趣味や習慣の分類とその割合 (%)

## 考察

本研究ではパンデミック前後で大学の授業以外の時間の使い方を比較し、気分及び影響について検討するためにアンケート調査を行った。その結果、パンデミック前後で変化の大きかった項目が気分への影響を及ぼしていると考え調査結果を比較したところ、趣味や生活習慣、友人との対面交流の変化による気分の変化への影響が示唆された。

### (1) 趣味の変化による気分への影響

パンデミック前と比べてパンデミック後は家の外で行う趣味に費やす時間において1時間未満が7.7%増加しているのに対し、3時間以上5時間未満の割合は7.7%減少していた。このことから、パンデミック前よりも家の外で行う趣味に費やす時間が短くなっていることが明らかになった。一方、家の中で行う趣味においては1時間以上3時間未満の割合が7.7%減少しており、5時間以上の割合は9.6%増加していた。このことから、パンデミック前と比べて家の中で行う趣味に費やす時間が長くなっていることが明らかになった。新しく始めた趣味や習慣についても料理やゲームなどの「手を動かす系」や自宅でできる筋トレなどの「体を動かす系」、読書やアニメ鑑賞といった「鑑賞系」がほとんどを占めており、家の中でこれらの趣味や習慣をして過ごす時間が増えていると推測できる。

これらの結果が及ぼす気分への影響として、「自分が幸福だと感じること」「自分が元気だと感じること」の「変わらない」の割合が最も多いことから、家の外で行う趣味が減り家の中で行う趣味が増えることは幸福度や活気にポジティブ・ネガティブの両側面で影響を与えていることが示唆される。

藤平・久保・星野 (2021) の調査では、コロナ禍での時間の余裕を運動や散歩など体を動かすこと、音楽や映画の鑑賞、読書やゲーム、楽器演奏や手芸などの趣味の時間に当てて、リラックスするなど体調不良を起こしにくいように工夫している学生が多いことが明らかになっている。本研究の結果においても、新しく始めた趣味として体を動かしたり、手を動かす、鑑賞するという回答が大半を占めており、藤平・久保・星野 (2021) と同様の結果が得られた。時間の余裕を体や手を動かす、鑑賞するといった趣味に当てることで、不安思考に陥らないように工夫していると考えられる。このように、家の中で趣味に取り組む時間が長くなることでパンデミック禍で生じる不安を和らげようとすることや純粋に趣味を楽しむことは幸福度や活気にポジティブな影響を与えていると推察される。

一方、家の中で行う趣味が増えることで外出する頻度が少なくなることは孤独感を生み、気軽に外出できないことにストレスを感じていることが推測できる。認定 NPO 法人フードバンク山梨 (2020) の調査では、学生が精神面で困っていることの中に「家にずっといるため、気分が晴れない。」「外出に関して自粛をしないといけないという気持ちが非常にストレスになっている。具体的には買い物に行くことさえも躊躇してしまう。」という回答があることから、家の外で行う趣味が減ることでストレスや孤独感を引き起こし、幸福感や活気にネガティブ

ブな影響も与え得ると示唆される。これらのことから、自粛しなければならないと思ひ込みすぎずに、感染症対策をしっかりと行いながら適度に外出してストレスを発散していきながら、家の中での趣味も充実させることで幸福感や活気を高めることができると考えられる。

### (2) 生活習慣の変化による気分への影響

睡眠時間がパンデミック前と比べて5時間以上7時間未満の割合が7.7%増加しており、3時間以上5時間未満の割合が5.8%減少していたことから、睡眠時間が長くなった人が多いと推測できる。また、就寝時間・起床時間ともにパンデミック前と比較して遅くなったと回答する割合が約6割を占めて最も多いという結果であり、生活習慣の乱れが生じていると考えられる。これらの結果による気分の影響として、「慢性的な眠気を感じる」「疲れがたまっていると感じる」に対して「変わらない」と回答する人の割合が最も多いことから、睡眠時間が長くなり、生活習慣が乱れても疲労や眠気はパンデミック前と変わっていないことが示唆される。

この要因として、パンデミック前はアルバイトや勉強などが忙しく通学時間も長かったことから睡眠不足になりやすかった一方でパンデミック後は睡眠不足は解消されつつあるが、就寝・起床時間が遅くなるなど生活習慣が乱れることで疲労や眠気を感じるようになったと考えられる。つまり、パンデミック前は睡眠時間が短かったことによる疲労や眠気を感じていて、パンデミック後は睡眠時間は長いが生活習慣が乱れることによる疲労や眠気を感じていると言える。藤平・久保・星野(2021)の調査においても、コロナ禍前は睡眠量の不足理由について「勉強」「アルバイト」「スマートフォン」が挙げられ勉強やアルバイトで忙しいことや長い通学時間にスマートフォンを触る時間が多いと考えられ、長い通学時間も睡眠不足につながっていたことが明らかになっている。一方、コロナ禍では「就寝時刻が遅い」とする人が約7割と目立ち、生活リズムへの影響を指摘している。

また、筆者はコロナ禍初期において外出自粛による運動不足や生活の急変への不安が眠れなさにつながっていると考えており、このことは現在においても言えることであると考え。変異株の影響により、自粛生活を送る中で運動不足を引き起こし、変異株が発生するたびにアルバイト先が休みになるなど生活への変化に不安を感じている現状がある。このように、運動不足や生活への不安感から寝つきが悪くなったり、眠りが浅くなることで就寝・起床時間が遅くなっていると考えられる。したがって、散歩をするなど適度に運動を取り入れたり、不安を解消するために信頼できる人に相談することで良質な睡眠が得られるとともに生活習慣の乱れを改善することができ、日中の眠気や疲労を解消することにつながると考えられる。

### (3) 友人との交流の変化による気分への影響

友人との対面交流時間は3時間未満の短時間での交流の割合はパンデミック前後で大きな変化はなく、3時間以上の長時間の割合は3時間以上5時間未満が7.6%増加しており、5時間以上の割合が7.7%減少していた。このことから、短時間での交流は今まで通りであることが予想され、長時間交流する人の中では5時間未満で我慢している人が多く、5時間以上の長時間を友人と対面で過ごすことは控えていることが伺える。これらの結果による気分への影響として、「憂鬱だと感じる」で「増えた」と回答する人が半数を占めていたことから、対面で友人と会える時間が短くなることで憂鬱だと感じるが増えることが示唆される。

京都大学が行ったコロナ禍における大学生の主観的幸福度を調べた研究(2020)では、授業以外で人と接する機会が「とても減った」「少し減った」と回答した人の割合は全体の92%であり、ほとんどの人が授業以外で人と接する機会は減少したとされている。また、授業以外で人と接する機会が増えた人ほど、幸福度が上がる傾向がみられるとする結果も示されている。ここでいう「授業以外で接する人」というのは、大学生において必然的に会う家族やアルバイト先の人を除くと友人であると考えられる。つまり、友人と接する機会が増えると幸福度が上がると考えられる。反対に、友人と接する機会が減少すると幸福度が下がる、つまり憂鬱感が高まると考えられ、本研究で得られた友人と会える時間が短くなることで憂鬱だと感じるが増えるという結果が支持された。



また、友人と実際に会う交流だけでなく、対面という視点で考えると SNS のツールを利用したビデオ電話などでの交流も顔を合わせて交流することになる。そのため、友人と実際に会う交流とビデオ通話を利用した交流を上手く調整しながら交流する工夫をすることで、憂鬱感を減少させることにつながると考えられる。

これらの結果を踏まえて、授業時間以外の時間を利用して「適度に外出してストレスを発散すること」、「家の中で行える趣味を充実させること」、「運動を取り入れる」、「信頼できる人に相談する」、「友人と実際に会うこととビデオ通話を利用した交流を調整すること」を実践していくことで、気分の低下を防ぐとともに、気分を高める効果も期待できるということが明らかになった。気分の低下を自覚することは難しく、日頃から人との交流、運動、適度な外出、趣味の充実を意識して行うことで気分の低下を防ぐことにつながると考えられる。また、人に会うことで周囲の人が気分の低下に気づいてくれることもあるため、友人や信頼できる人と積極的に交流することが重要だと考えられる。

本研究の展望は3つある。1つ目はパンデミック前後で時間の使い方の変化の大きい項目から気分の変化への影響を考察する際に、時間の使い方の変化と気分の変化の相関関係を分析せずに先行研究を参考に考察していった。しかしこの方法では分析結果が不十分であったため、今後は、あることに費やす時間の増減と憂鬱度や幸福感の相関関係を基に研究を進めることが求められる。

2つ目は、パンデミック前と比較した現在の気分の変化についてほとんどの項目で「変わらない」の回答比率が最も多いという結果になったが、具体的記述を求めなかったためどのように変わらないかを知ることができなかったことである。そのため、今後の研究で気分の変化の項目を作る際は「変わらない」とした具体的事象の回答を求めるとともに、「増えた」「減った」と回答した場合にも具体的事象を記述する項目を設けることでより詳細なことが明らかになると考えられる。

3つ目は新型コロナウイルスによる時間の使い方と気分の変化を調査するため本研究では大きくパンデミックが発生する前と発生した後に分けて研究を進めたことで、コロナ禍において感染が急拡大している時期と落ち着いている時期による変化を検討することができなかったことである。また、本調査は感染が比較的抑制された時期に実施したため、時間の使い方や気分の変化に明らかな変化を見出すことができなかったと考えられる。そのため、今後は新型コロナウイルスの感染が発生する前の時期、コロナ禍において感染が拡大している時期と感染抑制されている時期の3つに分類し、それぞれの期間を具体的に示したうえで調査を進めていく必要があると考えられる。

## 引用文献

藤平真紀子・久保博子・星野聡子 (2021). コロナ禍による女子大学生の日常生活への影響 日本家政学会誌, Vol.72, No.9, 581-600

北條睦実子・戸城美佑・遠山美樹・中里英史・古川真守・城越望・下村昂平・森脇真人・石原慶一 (2020). コロナ禍下における大学生の主観的幸福度 京都大学高等教育研究, 26, 41-50

飯田昭人・水野君平・入江智也・西村貴之・川崎直樹・斉藤美香 (2021). 新型コロナウイルス感染拡大が大学生に及ぼす影響 (第1報) ～北海道内の大学への調査結果から～ 北翔大学生涯スポーツ学部研究紀要, 第12号, 147-158

厚生労働省 (2020). 新型コロナウイルス感染症に係るメンタルヘルスに関する調査結果概要について (2022年1月25日)、<https://www.mhlw.go.jp/content/12200000/syousai.pdf>

増村雅尚 (2021). 大学生の正課外活動自粛が及ぼす心理的影響－TDMSを用いた正課外活動自粛における心理変化－ 崇城大学紀要, 第46巻, 65-74

認定NPO法人フードバンク山梨 (2020). コロナ禍の影響を受けた大学生に対するアンケート調査報告書 (2022



年 1 月 25 日)

<https://fbyamana.fbmatch.net/wp-content/uploads/2021/02/%E3%80%90%E6%9C%80%E7%B5%82%E3%80%911120%E5%A4%A7%E5%AD%A6%E7%94%9F%E6%94%AF%E6%8F%B4%E3%82%A2%E3%83%B3%E3%82%B1%E3%83%BC%E3%83%88%E8%AA%BF%E6%9F%BB%E5%A0%B1%E5%91%8A%E6%9B%B8.pdf>

# 大学生の将来への不安に関する調査

19C167 佐藤伊織、19C177 高野浩之介  
19C186 中井卓、19C207 星裕人

## 問題と目的

大学生になると環境の変化が生じ様々な問題が発生する。特に大学生後半は進路を探る時期であり、将来に向けた想像を膨らませることで様々な不安を抱くことになる。将来に関する不安は皆抱くものであるが、強すぎる不安は学業生活に影響を及ぼし不適応を引き起こす可能性がある。またそのような不安が、精神疾患の要因となる場合もあるため注意が必要である。日本学生支援機構（2018）では、大学生の不安の中でも「希望の進学先や就職先へ行けるか不安だ」、「卒業後にやりたいことがみつからない」といった将来に向けた不安が最も多いことを明らかにしている。また大学生活後半について三宅・岡本は以下のように述べている。「第3の危機は3年生後期～4年生の時期であり、専門分野での学業の負担が増え、卒業論文への不安、進学・就職などの進路の問題が生じたり、実習や研究、就職活動に不適応を呈する学生も見られる。危機に乗じて精神疾患を発生する学生もみられ、学生生活サイクルをふまえた支援が必要である。」（三宅・岡本, 2015）。以上のように、大学生の将来に向けた不安は様々な問題が生じる要因となるため何らかの予防や対策が必要である。

そこで本調査では、予防や対策を行う上での手がかりを見つけるべく、具体的にどのような場面に対し不安を感じているのかを明らかにすることを目的とする。

## 方法

### 調査対象者

社会調査実習履修者 70名のうち（男26名、女42名）に調査票を配布した。

### 調査内容

12月2日～12月23日の間、Microsoft Formsを用いて、調査票を配布、回答を得た。質問紙は、フェイスシート（性別、年齢、兄弟の有無と間柄、奨学金制度の利用、個人的な悩みの相談相手）と以下の5つの領域の不安、計25項目から構成されている。

お金に関する不安は「将来年金がもらえるか不安に思う」、「貯蓄できるか不安である」、「詐欺に会わないか不安である」、「将来自由に使えるお金があるか不安だ」、「借金をすることに不安を感じる」の5項目である。なお、お金に関する不安と奨学金制度の利用との関連を調べるために奨学金制度の利用の有無についてもフェイスシートの質問項目に追加した。

恋愛に関する不安は「恋愛に対して自信がない」、「恋愛をする意欲が出ない」、「結婚できるか不安である」、「将来恋愛をしていないかもしれないことに不安を感じる」、「恋愛対象とのコミュニケーションに不安を感じる」の5項目である。

就活に関する不安は「就職できるか不安である」、「ブラック企業に就職しないか不安である」、「就職と聞くと不安になる」、「就活に対して前向きに考えている」、「私生活にゆとりを持って働きたい」の5項目である。

人間関係に関する不安は「他人に嫌われないか不安である」、「他人に話すと疲れたり、煩わしく思う」、「自分のコミュニケーションに自信がない」、「コミュニケーションに対する疲れを感じる」、「人間関係を広くすることに不安を感じる」の5項目である。

家族に関する不安は「親の老後に対して不安を感じる」、「今後の家族との関係性に不安を感じる」、「家族がいなくなることに不安を感じる」、「自立できるか不安である」、「家族の健康に対する不安がある」の5項目である。回答方法は全て4件法である。

## 結果

有効回答者数は70名（男性29名、女性39名、その他2名）であった。

将来に関する不安が高い項目を確認するために、4件法のうち「当てはまる」、「少し当てはまる」に回答した参加者の合計を調べて図1に示した。

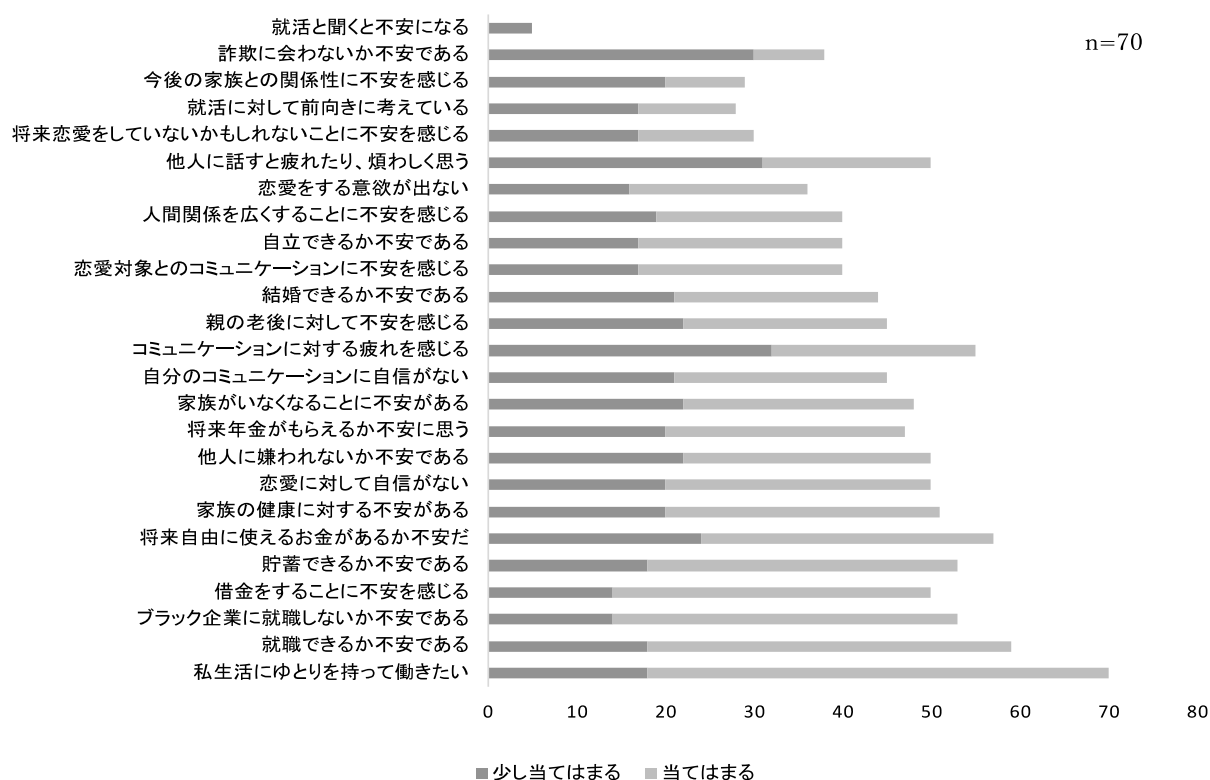


図1 将来に関する不安

25項目の中で将来の不安が高かったのは、逆転項目を除き1位が「就職できるか不安である」、2位が「ブラック企業に就職しないか不安である」、3位が「借金をすることに不安を感じる」、4位が「貯蓄できるか不安である」、5位が「将来自由に使えるお金があるか不安だ」であった。奨学金制度の利用の有無については利用しているが31人、利用していないが39人であった。

## 考察

本研究の目的は、大学生がどのような場面に対し将来への不安を抱くのかを明らかにすることであった。

その結果、不安が高い場面は順に、1位が「就職できるか不安である」、2位が「ブラック企業に就職しないか不安である」と就活に関する場面であることが明らかとなった。今回の調査は主に大学3年生を対象としていたこともあり、就活の時期と重なっていたことで就活の不安が高い結果になったと考えられる。先行研究で言及されている通り、3年生後期～4年生の時期に就職などの進路の問題が生じることとも一致している。

次に3位が「借金をすることに不安を感じる」、4位が「貯蓄できるか不安である」、5位が「将来自由に使えるお金があるか不安だ」とお金に関する場面であることが明らかとなった。これは将来どのような場所で働き、どのようにお金のやりくりをするのかといった就活に関する不安と付随しているのではないかと考えられる。また、調査対象者のうち31人が奨学金制度を利用していたこともあり、卒業後どのように返済していくのかといった不安も混じっているのではないかと考えられる。

以上のように、大学生の将来の不安は就活に関する、またはそれに付随するお金に関する場面が多いことが明らかとなった。今後は、就活に関する不安をより詳しく調査していく必要があると考えられる。今回の調査の限界点は、大学生の将来への不安場면을調査することに留まった点である。今後は、就活に関する不安を軽減していくための心理プログラムを作成したり、就活に対するイメージを変えていく努力が必要である。

## 参考文献

独立行政法人日本学生支援機構「平成30年度 学生生活調査結果」

[https://www.jasso.go.jp/statistics/gakusei\\_chosa/\\_icsFiles/afieldfile/2021/03/09/data18\\_all.pdf](https://www.jasso.go.jp/statistics/gakusei_chosa/_icsFiles/afieldfile/2021/03/09/data18_all.pdf)

(2021年12月16日閲覧)

三宅典恵・岡本百合 (2015) 「大学生のメンタルヘルス」, Jpn J Psychosom Med, 55:1360-1366, 2015

# 色が及ぼす心理的影響

19C127 小栗千明

19C157 小池弥音

19C171 新保京香

## 目的

色は私たちの生活の中に常に存在していて、それらの色は私たち人間に対して何らかの心理効果が働くとして、さまざまな場面で活用されている。広告や標識、ショップの内装などに使われる色にも心理への影響を図って工夫されていることが多くある。また、色は心理的效果とともに、生理的、文化的、感情的にも影響があるとされている。先行研究から、赤色は警戒心や注意力の喚起、黄色は希望や危険、緑色は安心感の増加やリラックス効果、青色は鎮静効果や痛みの緩和の作用、黒色は高級感や威圧感などの影響があるとわかっている。そこで本研究では、色見本を提示しそれらの色に対してどのようなイメージを持っていて、心理的に与える影響を検討することを目的とする。

## 方法

### 調査方法

Microsoft Forms を用いて調査票を配布し回答を求めた。

### 調査対象者

社会調査実習履修者 70 名のうち、68 名（男性 26 名、女性 42 名）に調査票を配布し、57 名の回答を得た。

### 調査時期

2021 年 12 月 2 日～2021 年 12 月 23 日

### 調査内容

質問は、フェイスシート（性別）及び質問項目（計 19 問）から構成された。

色が与える心理的影響を明らかにするため、色見本を提示したうえで、その色を好む人について、また、単語から想起する色やそれぞれの色に対するイメージについて回答を求めた。色については「赤」「青」「緑」など計 8 項目を用意した。特定の色を指示しその色を好む人についての質問項目は、「当てはまる～当てはまらない」の 4 件法を用いた。

## 結果

有効回答数 57 名（男性 19 名、女性 34 名、どちらでもない 2 名、不明 2 名）

### 1. ○○を好む人は～のように見える

一つの色を指示し、その色を好む人に対するイメージを指示した上で、そのイメージが当てはまるかを尋ねた。「青を好む人は静かでおとなしいように見える」という項目では、「当てはまる」「少し当てはまる」と回答した人が 43 名（75.4%）を占めた。次に「黒を好む人は自分

の世界観を持っているように見える」という項目では、「当てはまる」「少し当てはまる」と回答した人が26名（45.6%）となった。

## 2. イメージさせる、する色

単語や状況を提示し、そこから想起する色を尋ねた。まず「希望、光をイメージさせる色」の項目は、「黄色」が40名（70.1%）、「白」が16名（28.0%）、「その他」が1名（1.8%）で「オレンジ」という回答だった。次に「悲しみ、寂しさをイメージさせる色」の項目は、「青」が44名（77.1%）、「黒」が7名（12.2%）、「赤」「わからない」が1名（1.8%）、「その他」が4名（7.0%）で「濃紺」

「藍色」「群青色」という回答だった。「注意喚起をイメージさせる色」の項目は、「赤」が31名（54.3%）、「黄色」が23名（40%）、「その他」が3名（5.2%）で3名とも「黄色と黒」の組み合わせという回答であった（図1）。赤と黄色が群を抜く結果となった。

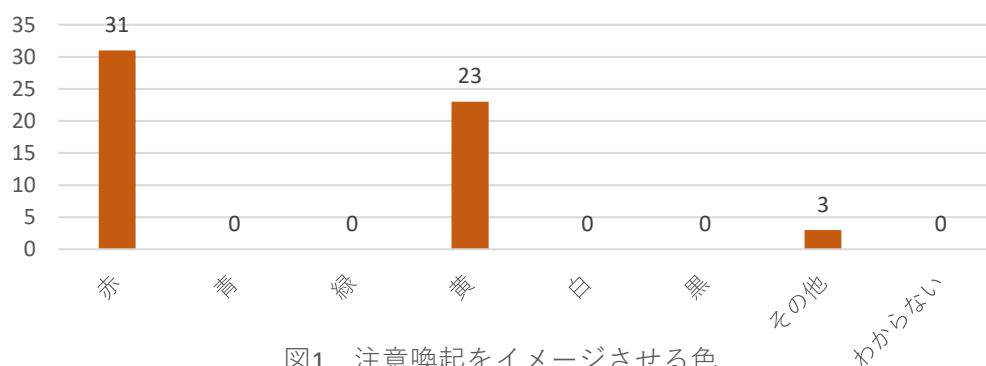


図1 注意喚起をイメージさせる色

次に、「疲労を軽減するような色」についての項目は、「緑」が38名（66.6%）、「青」が7名（12.2%）、「黄色」が4名（7.0%）、「白」「黒」が3名（5.3%）、「その他」「わからない」が1名（1.8%）であった（図2）。

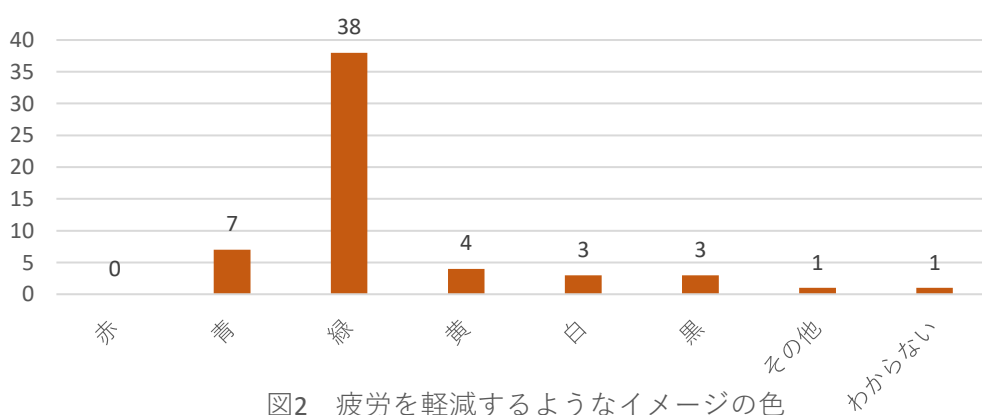


図2 疲労を軽減するようなイメージの色

## 考察

本調査では、色に対してどのようなイメージを持ち、心理のどのような影響を与えるのかについて検討を行った。その結果、単語や状況から想起される色には多くの人中で共通の認識

があることが分かった。

「注意喚起をイメージさせる色」という項目で回答が分かれた「赤」「黄色」「黄色と黒」は信号や標識、工事現場や遮断器など、生活の中で「危険」を連想させる場面で多く用いられている。そのため、これらの色は注意喚起という言葉と関連付けられていたと考えられる。赤松、久下、岩田、森（2002）によると安全標識においても、赤・黄色・黒を用いた配色にすれば、適切評価が認められるとされている。

「悲しみ、寂しさをイメージさせる色」という項目では「青」が44名（77.1%）であり、「その他」で得られた回答も青系統の色であった。青には悲しみや寂しさを与える効果があることが考えられる。

「疲労を軽減するような色」という項目については、「緑」が38名（66.6%）であった。これは緑の特徴として、光の波長の間にあるため目にとらえやすい色であることが影響していると考えられる。また、自然の色である緑は私たちの心身に心地よさや安定をもたらす効果が期待できる。

本調査では、提示する単語を複数にしたり、色を6色に限定したりしたが、類似した単語であっても想起する色がそれぞれ異なることや、色の範囲にとらわれてしまう可能性があることを視野に入れ、質問項目を検討することでより詳細な調査結果が求められるであろう。

## 引用文献

赤松明・久下靖征・岩田良子・森昌子（2002）. 労働作業現場における安全標識の配色と認識評価

身体や眼にたまった疲れをケアする色 <https://iro-color.com/episode/remove-fatigue.html> 2022年1月27日アクセス.

## おしゃれや服装へのこだわりとコンプレックスの関係

19C107 飯吉明子、19C131 甲斐あんり

19C154 倉田あかり、19C183 立澤みづき

### 目的

大学生活は多くの大学生にとって「小学生以来の、私服で登校し授業を受ける」数年間の学生生活である。まだ社会的責任が学生の身分によって猶予されているモラトリアムにある大学生にとって、この数年の学生生活は「私服でのおしゃれを通して自己表現をする最後のチャンス」となる。大学生活を終えれば彼らには社会人としての生活が待っており、社会人には仕事をする上である程度の身だしなみが求められるからだ。例として、男性の長髪や女性のノーメイクが受容される雰囲気は企業単位で存在するとしても、社会全体にはまだないと考える。

2022年現在、世界は新型コロナウイルスによるパンデミックの直中にある。この新型コロナウイルスによるパンデミックを、本調査では「コロナ禍」と表記する。コロナ禍前後で大学生のおしゃれへの意識や購買意欲は変化したのかの分析を本調査の目的①とする。

おしゃれをしようとする上で、障害として立ちどころなのがコンプレックスである。本調査で取り上げるコンプレックスとは「おしゃれや身だしなみに気を遣う上で障害となる個々人の悩み、劣等感。外見にまつわることだけでなく、「おしゃれをするセンスがない」などの内面的な意識なども含めた包括的なもの」であると定義する。このコンプレックスへの対処法は2種類に分かれると筆者は仮説を立てた。コンプレックスがあるためにおしゃれから逃避する人と、コンプレックスの解消のために積極的におしゃれをする人の2種類である。この仮説の検証とコンプレックスの有無がおしゃれにどう影響するのかの分析を本調査の目的②とする。

### 方法

#### 調査方法

Microsoft Forms を用いて、調査票を配布、回答を得た。

#### 調査対象者

社会調査実習履修者 70名のうち 68名（男 26名、女 42名）に調査票を配布した。

#### 調査時期

2021年12月9日～12月23日

#### 調査内容

質問紙はフェイスシート（性別、年齢）と以下の5つの部分で構成した。

- (1) おしゃれや服装を意識しているか、また意識している場合はコロナ禍以前から意識していたのか、コロナ禍になってから意識しているのかで回答者をグループ分けする設問。設問3が該当する。コロナ禍以前からおしゃれをしている「おしゃれ群A」、コロナ禍後からおしゃれをしている「おしゃれ群B」、おしゃれをしない「非おしゃれ群」の3グループに分類した。
- (2) おしゃれ群A・Bそれぞれに対する設問群。設問4～18が該当する。おしゃれを始めた



詳細な時期やきっかけ、影響を受けた人物や物事、コロナ禍前後でのおしゃれで重視する点や購買行動の変化、好きな服装のジャンルやブランドなどの回答を求めた。

- (3) 非おしゃれ群に対する設問。設問 19 が該当する。おしゃれや服装を意識していない理由の回答を求めた。
- (4) 全回答者に対する設問群。設問 20、21 が該当する。おしゃれや服装へのコンプレックスの有無とコンプレックスの具体的な内容の回答を求めた。
- (5) 全回答者に対する設問群。設問 22、23 が該当する。おしゃれや服装に月平均でいくら出費しているかについて、コロナ禍前後でそれぞれ回答を求めた。

## 結果

有効回答数は 54 名（男性 21 名、女性 31 名、その他 2 名）であった。回答者の平均年齢は 20.9 歳であった。

設問 3「おしゃれや服装を意識していますか？」の回答は、「コロナ禍以前から意識している」「コロナ禍になってから意識している」「意識していない」の 3 件法で求めた。結果、「コロナ禍以前から意識している」が 35 名で約 65%（以降「おしゃれ群 A」）、「コロナ禍になってから意識している」が 6 名で約 11%（以降「おしゃれ群 B」）、「意識していない」が 13 名で約 24%（以降「非おしゃれ群」）であった。

おしゃれ群 A の 35 名を対象に、設問 4「おしゃれや服装に気をつけるようになったのはいつからですか？」では「高校生の時」「中学生の時」などの 4 項目で尋ね、単一選択で回答を求めた。最も多かった回答は「高校生の時」の 19 名（約 54%）であった。「高校卒業後、または大学生になってから」の回答者は 7 名（20%）、「中学生の時」は 6 名（約 17%）、「小学生の時、またはそれ以前から」は 3 名（約 9%）であった。

おしゃれ群 A 内の設問 4 で「高校生の時」と回答した 19 名を対象に、設問 5 では「その変化のきっかけとして当てはまるものを選択してください」と「交友関係が変わった」「校則が緩くなった」「その他（自由記述欄あり）」など 6 項目で尋ね、複数選択で回答を求めた。最も選択されたのは「周囲がおしゃれや服装に気をつけるようになった」であり、選択したのは 8 名（約 42%）であった。また、おしゃれ群 A 内の設問 4 で「高校卒業後、または大学生になってから」と回答した 7 名を対象に、設問 5 と同じ形式の質問を設問 6 に設けた。最も選択されたのは「周囲がおしゃれや服装に気をつけるようになった」と「バイトなどで金銭的な余裕が出来た」であり、どちらも 4 名（約 57%）だった。

設問 7 ではおしゃれ群 A・B の 41 名を対象に「おしゃれや服装を意識するようになったきっかけは、ポジティブなものでしたか？それともネガティブなものでしたか？」とおしゃれをするきっかけになった出来事の印象について「ポジティブなもの」「ネガティブなもの」の 2 項目で尋ね、単一選択で回答を求めた。ポジティブ・ネガティブの判断は「少しでも悪感情があったらネガティブ、そうでなければポジティブ」と例示した。きっかけが「ポジティブなもの」だったと選択したのは 31 名（約 76%）で、「ネガティブなもの」だったと選択したのは 10 名（約 24%）だった。続けて設問 8・設問 9 ではポジティブなきっかけ・ネガティブなきっかけのそれぞれ具体的なエピソードを自由記述で求めた。ポジティブなきっかけには 13 回答が集まり、「かわいく

なりたいから」「カッコよくなりたかった」「周りに少しでもよく見られたいと思ったから」などが述べられた。ネガティブなきっかけには8回答が集まり、「周りがおしゃれだから」「周囲が服装を意識している中で、適当な服装をしていると笑いの的になるから。馬鹿にされるのが嫌だから」「友人に指摘されたから」「姉に見た目のことで指摘されることが多かったから」などが述べられた。得られた回答の一覧を表1に示した。

表1 設問8・設問9で得られた自由記述回答の一覧

ポジティブなきっかけの具体的なエピソード (N=13)	おしゃれ群 A (N=12)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・かわいくなりたいたいから</li> <li>・可愛くなりたいたいと思った</li> <li>・可愛い服を着たいと思ったから (2件)</li> <li>・カッコよくなりたかった</li> <li>・おしゃれに気を使った時の鏡に映る自分がカッコよく見えたから</li> <li>・自信をつけるため・好きなブランドと思えるブランドに出会った</li> <li>・質のいいお土産シャツを見つけたとき</li> <li>・私服を着る頻度が増えたから</li> <li>・周りに少しでもよく見られたいと思ったから</li> <li>・褒められたから</li> </ul>
	おしゃれ群 B (N=1)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・アパレルの店員をやっている友人に影響されて</li> </ul>
ネガティブなきっかけの具体的なエピソード (N=8)	おしゃれ群 A (N=6)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・周囲が服装を意識している中で、適当な服装をしていると笑いの的になるから。馬鹿にされるのが嫌だから</li> <li>・高校卒業する直前に友人から「このままだと浮くよ」という言葉をかけられたから・姉に見た目のことで指摘されることが多かったから</li> <li>・そろそろ歳のにもメイクをしなければいけないと思った</li> <li>・自分に自信がなくて。</li> <li>・自分のコンプレックスを殺したかった</li> </ul>
	おしゃれ群 B (N=2)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・友人に指摘されたから</li> <li>・周りがおしゃれだから</li> </ul>

設問 10 ではおしゃれ群 A・B の 41 名を対象に、「おしゃれや服装に気をつけるにあたって、影響された人や物がありますか?」と「ある」「ない」の 2 項目で尋ね、単一選択での回答を求めた。結果は「ある」が 23 名 (約 56%)、「ない」が 18 名 (約 44%) だった。続けて設問 11 では影響された人や物が「ある」と答えた 23 名を対象に誰に・何に影響されたのかを「家族」「芸能人」「その他 (自由記述欄あり)」などの 5 項目で尋ね、単一選択での回答を求めた。最も選択されたのは「友人」の 9 名 (約 39%) で、続いて「インフルエンサー」が 6 名 (約 26%)、「芸能人」が 5 名 (約 22%) であった。

設問 12 ではおしゃれ群 A・B の 41 名を対象に、「「コロナ禍以前の」おしゃれで重視していたことは何ですか?」と「自分なりのこだわりに合うこと」「個性の表現」「その他 (自由記述欄あり)」などの 6 項目で尋ね、複数選択で回答を求めた。最も選択されたのは「自分の好みに合うかどうか」の 33 名 (約 80%) であった。次点の「機能性、コスパの良さ」を選択したのは 22 名 (約 54%) であり、大きく差がついた。続く設問 13 では同じくおしゃれ群 A・B の 41 名を対象に「「コロナ禍後」のおしゃれで重視していることは何ですか?」と設問 12 と同形式で回答を求めた。最も選択されたのは「自分の好みに合うかどうか」の 39 名 (約 95%) だった。コロナ禍前と重視している点は変わらないが、重視する人数が増えた結果となった。設問 14 でも同じく 41 名を対象に「「コロナ禍以前・コロナ禍後で一貫して」おしゃれで一番重視していることは何ですか?」と設問 12 と同じ 6 項目に「コロナ禍前後で一番重視することは変わった」を加えた 7 項目で尋ね、単一選択で回答を求めた。最も選択されたのは「自分の好みに合うかどうか」で、27 名 (約 66%) だった。

設問 15 ではおしゃれ群 A・B の 41 名を対象に、「服装の系統・ジャンルを意識しておしゃれしていますか?」と「していない」「している」の 2 項目で尋ね、単一選択で回答を求めた。「している」が 27 名 (約 66%)、「していない」が 14 名 (約 34%) であった。「している」の 27 名には続く設問 16 で「(系統・ジャンルを意識しておしゃれをする方) 好きなブランドを教えてください」と自由記述の設問を設けた。10 名から回答があった。回答一覧を表 2 に示した。

表 2 設問 16 で得られた自由記述回答の一覧

回答があった好きなブランド (N=10)	おしゃれ群 A (N=9)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ axes ・ ROJITA ・ INGNI ・ アストリアオディール ・ amavel</li> <li>・ evelyn</li> <li>・ GU</li> <li>・ harapeco.remer</li> <li>・ Heather ・ earth</li> <li>・ jouetie</li> <li>・ niko and ...</li> <li>・ ungrid</li> <li>・ ZARA</li> </ul>
	おしゃれ群 B (N=1)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ カジュアル、ローリーズファーム、CIAOPANIC TYPY</li> </ul>

設問 17 ではおしゃれ群 A・B の 41 名を対象に「「コロナ禍以前に」一番よく服を購入していたのはどこですか?」と「デパート」「駅に隣接するファッションビル (ルミネ・マルイなど)」「ネット通販」などの 7 項目で尋ね、単一選択での回答を求めた。最も選択されたのは「駅に隣接するファッションビル (ルミネ・マルイなど)」で 13 名 (約 32%) であった。次いで「ショッピングモール (アリオなど)」を 11 名 (約 27%) が選択した。「ネット通販」は 8 名 (約 20%) であった。続く設問 18 では同じく 41 名を対象に「「コロナ禍後に」一番よく服を購入しているのはどこですか?」と設問 17 と同じ形式で回答を求めた。最も選択されたのは「ネット通販」で 17 名 (約 41%) であった。設問 17 で最多回答だった「駅に隣接するファッションビル (ルミネ・マルイなど)」は 12 名 (約 29%) となり、若干選択人数が減少した。

設問 19 では非おしゃれ群 13 名を対象に、「おしゃれや服装を意識していない理由を教えてください」と自由記述で回答を求めた。12 名から回答があった。回答一覧を表 3 に示した。

表 3 設問 19 で得られた自由記述回答の一覧

おしゃれや服装 を意識してい ない理由 (N=12)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・おしゃれをすることに興味がない</li> <li>・興味がない (2 件)</li> <li>・めんどうだから</li> <li>・コロナになってから全てがどうでもよくなった感じは正直あります。</li> <li>・お金をほかに使いたい為後回しにしていたら興味も無くなってしまった</li> <li>・お金がかかって際限がないから。</li> <li>・機能性を重視しているから。</li> <li>・今の趣向に満足している (原文ママ)</li> <li>・系統が定まらない</li> <li>・同性としか出掛けられないから</li> <li>・知識がないから</li> </ul>
----------------------------------	--

設問 20 では回答者全員を対象に「自分におしゃれや服装に関するコンプレックスがあると感じますか?」に「ある」「ない」の 2 項目で尋ね、単一選択で回答を求めた。「ある」は 31 名 (約 57%)、「ない」は 23 名 (約 43%) が回答した。各グループでの内訳は、おしゃれ群 A の「ある」が 21 名 (60%)、「ない」が 14 名 (40%)、おしゃれ群 B の「ある」が 4 名 (約 67%)、「ない」が 2 名 (約 34%)、非おしゃれ群の「ある」が 6 名 (約 46%)、「ない」が 7 名 (約 54%) であった。

コンプレックスが「ある」と感じている 31 名には続く設問 21 で「コンプレックスの具体的な内容を教えてください」と「顔立ちを気にしている」などの 8 項目で尋ね、複数選択での回答を求めた。結果を図 1 に示した。最も選択されたのは「おしゃれをするセンスがない、自分に合う服装が分からない」の 21 名 (約 68%) であった。各グループでの内訳は、おしゃれ群 A が 13 名 (おしゃれ群 A 「ある」回答者の約 62%)、おしゃれ群 B が 2 名 (おしゃれ群 B 「ある」回答者の内の 50%)、非おしゃれ群が 6 名 (非おしゃれ群 「ある」回答者の 100%) であった。次いで「太っている・痩せている」が 18 名 (約 58%) であった。各グループでの内訳はおしゃれ群

Aが13名（おしゃれ群A「ある」回答者の約62%）、おしゃれ群Bが3名（おしゃれ群B「ある」回答者の75%）、非おしゃれ群が2名（非おしゃれ群「ある」回答者の約34%）であった。「その他」として自由記述も可能な選択肢を設けていたが、それに回答はなかった。

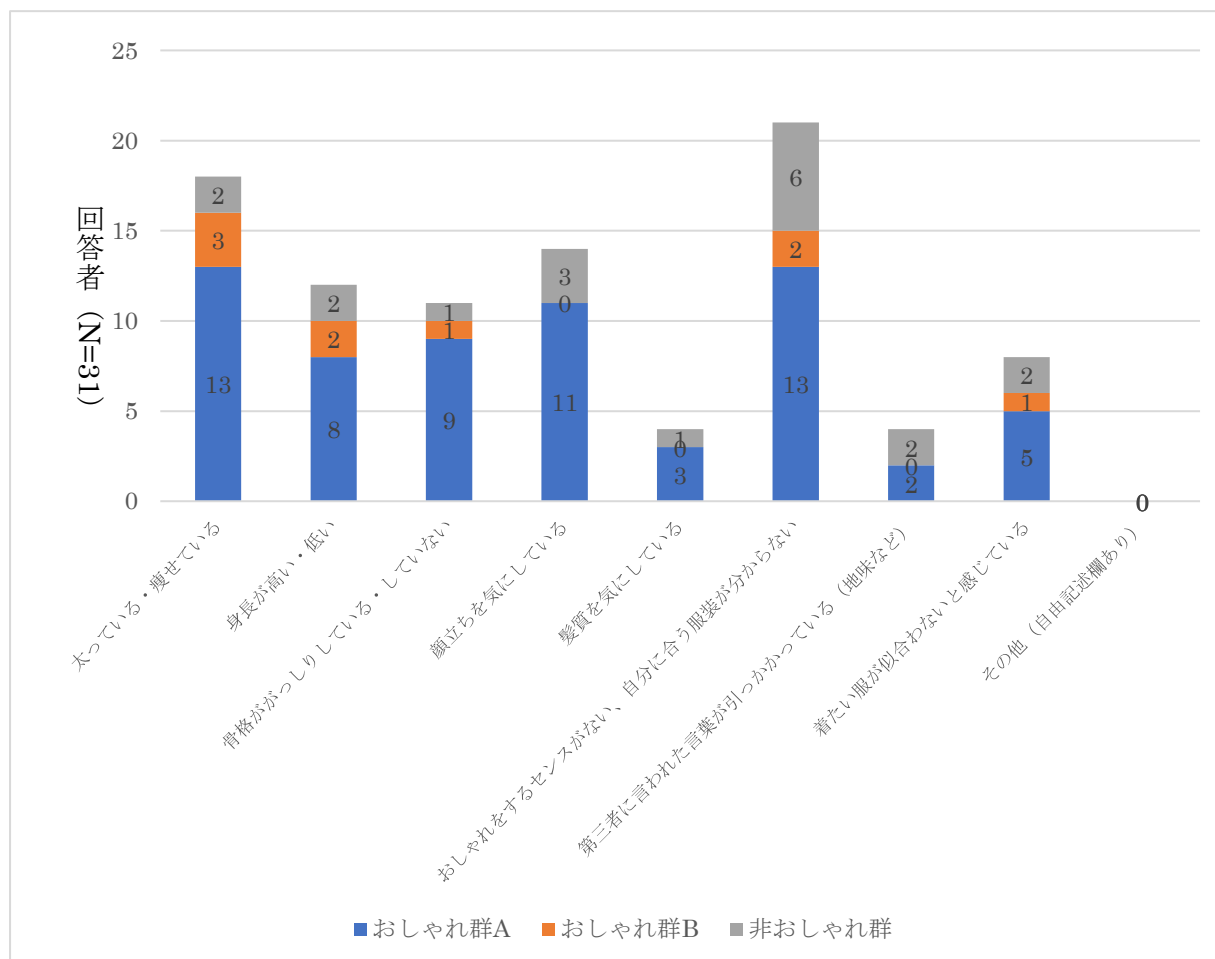


図1 設問21の回答結果

設問22では回答者全員を対象に「(コロナ禍以前) おしゃれや服装に月に平均でどの程度お金を使っていましたか?」と月々に使用する額を「3,000円未満」「3,000円以上～5,000円未満」「5,000円以上～1万円未満」「1万円以上」の4項目で尋ね、単一選択の回答を求めた。結果は、「3,000円未満」「3,000円以上～5,000円未満」「5,000円以上～1万円未満」の3項目がそれぞれ14名(約26%)の横並びになった。各グループでの内訳は以下の通りである。「3,000円未満」はおしゃれ群Aが3名(約9%)、おしゃれ群Bが2名(約34%)、非おしゃれ群が9名(約70%)。「3,000円以上～5,000円未満」はおしゃれ群Aが10名(約29%)、おしゃれ群Bが3名(50%)、非おしゃれ群が1名(約8%)。「5,000円以上～1万円未満」はおしゃれ群Aが10名(約29%)、おしゃれ群Bが1名(約17%)、非おしゃれ群が3名(約23%)。「1万円以上」を選択したのは12名(約22%)であり、12名全員がおしゃれ群A(約34%)であった。

設問23では回答者全員を対象に「(コロナ禍後) おしゃれや服装に月に平均でどの程度お金を使っていますか?」と設問22と同じ4項目で回答を求めた。最も選択されたのは「3,000円未

満」の16名(約30%)であった。次いで「3,000円以上～5,000円未満」が14人(約26%)、「5,000円以上～1万円未満」と「1万円以上」は共に12人(約22%)の結果になった。各グループでの内訳は以下の通りである。「3,000円未満」はおしゃれ群Aが5名(約14%)、おしゃれ群Bが0名、非おしゃれ群が11名(約85%)。「3,000円以上～5,000円未満」はおしゃれ群Aが9名(約26%)、おしゃれ群Bが4名(約67%)、非おしゃれ群が1名(約8%)。「5,000円以上～1万円未満」はおしゃれ群Aが9名(約26%)、おしゃれ群Bが2名(約34%)、非おしゃれ群が1名(約8%)。「1万円以上」の12名は設問22と同様に、12名全員がおしゃれ群A(約34%)であった。

## 考察

本調査の目的は、目的①コロナ禍前後で大学生のおしゃれへの意識や購買意欲は変化したのかの分析、目的②コンプレックスへの対処法仮説の検証とコンプレックスの有無がおしゃれにどう影響するのかの分析であった。

まず、目的①コロナ禍前後で大学生のおしゃれへの意識や購買意欲は変化したのかの分析について以下に述べる。コロナ禍以前からおしゃれを意識しているおしゃれ群Aが35名で回答者全体の約65%を占めていたのに対し、コロナ禍後からおしゃれを意識し始めたおしゃれ群Bは6名で約11%に留まった。設問8・9でのおしゃれを意識するようになったきっかけの自由記述にて、おしゃれ群Bからはポジティブなきっかけとして「アパレルの店員をやっている友人に影響されて」の1回答、ネガティブなきっかけとして「周りがおしゃれだから」と「友人に指摘されたから」の2回答が得られた。自由記述に「コロナ」やそれに関連する単語はなく、友人など周囲からの影響がおしゃれをするきっかけになったことが分かる。設問5・6での「高校生の時」「高校卒業後、または大学生になってから」おしゃれに気をつけているおしゃれ群Aに対するそのきっかけの問いで「周囲がおしゃれや服装に気をつけるようになった」が最多回答になっているため、周囲の影響はおしゃれのきっかけとして一般的なものであると考えられる。おしゃれ群Bはコロナ禍がきっかけでおしゃれをするようになったのではなく、友人や周囲からの影響がきっかけとなりおしゃれをするようになったタイミングがたまたまコロナ禍後であったのだと考察する。コロナ禍がおしゃれをするきっかけにはならないため、おしゃれ群Bの人数も回答者全体の約11%止まりで少ないのだと考える。

前述の通り、コロナ禍はおしゃれをするきっかけとはならない。設問19で非おしゃれ群から得たおしゃれや服装を意識しない理由の1つに「コロナになってから全てがどうでもよくなった感じは正直あります。」とあるように、コロナ禍はむしろおしゃれをしなくなるきっかけとして働いている。設問22・23では回答者全員を対象にコロナ禍前後でのおしゃれや服装への月々の出費を尋ねた。コロナ禍前後で月々「3000円未満」を出費している人は14名(約26%)から16名(約30%)へと増えている一方で、「5,000円以上～1万円未満」を出費している人は14名(約26%)から12名(約22%)へと減っている。特に非おしゃれ群はコロナ禍月々「3000円未満」の出費との回答が11名で、非おしゃれ群の約85%を占めている。他方で、月々「1万円以上」をおしゃれに出費するのはコロナ禍前後どちらも全員がおしゃれ群Aであった。おしゃれへの意識が元々高い人はコロナ禍でも購買意欲を保つことが出来るが、おしゃれへの意識が元々低い人

はコロナ禍により購買意欲がさらに低下することが分かる。

以上を踏まえ、目的①コロナ禍前後で大学生のおしゃれへの意識や購買意欲は変化したのかの分析を統括する。コロナ禍後におしゃれを意識するようになった大学生は存在した（おしゃれ群 B）。しかし「コロナ禍がきっかけでおしゃれを意識するようになった」という因果関係は見られなかった。コロナ禍以前からおしゃれを意識している大学生と同様に「周囲からの影響がきっかけとなりおしゃれを意識するようになった」のであり、「意識するようになった時期がコロナ禍後だった」という前後関係である。一方で、コロナ禍前後で大学生のおしゃれに関する出費は減り、購買意欲は低下した。特に元々おしゃれへの意識が低い大学生は購買意欲がさらに低下していた。例外として、おしゃれに関する購買意欲がコロナ禍前後で変化せずに月々1万円以上の出費があるのは、元々おしゃれへの意識が高い大学生（おしゃれ群 A）であった。

次に、目的②コンプレックスへの対処法仮説の検証とコンプレックスの有無がおしゃれにどう影響するのかの分析について以下に述べる。設問 20 では回答者全員を対象にコンプレックスの有無について尋ね、「ある」と回答したのは31名（約57%）となった。各グループでの内訳を調べると、どのグループも「ある」回答者が約半数は存在した。設問 21 では「ある」回答者31名を対象に、コンプレックスの具体的な内容を8項目からの複数選択で回答を求めた。最も選択されたのは「おしゃれをするセンスがない、自分に合う服装が分からない」の21名（約68%）であった。次点で「太っている・痩せている」を18名（約58%）が選択した。ここで特筆すべきは非おしゃれ群「ある」回答者の内訳である。「おしゃれをするセンスがない、自分に合う服装が分からない」を非おしゃれ群「ある」回答者6名が全員選択した一方で、「太っている・痩せている」は2名しか選択しなかったのである。おしゃれ群 A・B は「おしゃれをするセンスがない、自分に合う服装が分からない」「太っている・痩せている」のどちらも約60%以上が選択している。

この差について、劣等感と補償の関連から考察する。高坂（2009）によると、青年期における容姿・容貌に対する劣性を認知したときの反応行動は「他者回避」「直接的努力」「他者攻撃」「気晴らし」「放置」「賞賛・承認欲求」「代理補償」の7種類に分類できる。これらのうちの「直接的努力」「代理補償」は劣等感が「向上への努力」となった反応行動であり、Adler が概念化した「補償」や「代理補償」に相当すると考えられると言う。石坂・藤森（2019）によると、「身体的魅力のなさ」という劣等感への補償として「努力志向性」に有意差が見られた。「身体的魅力のなさ」というのは劣等感の中では視覚的に捉えることの出来るものであり、「ダイエットをして細くなる」や「運動をして体を引き締める」などの努力の結果が目に見えやすく、やりがいを感じやすいために努力につながると推測できると言う。本調査において「太っている・痩せている」は視覚的に捉えることのできる「身体的魅力のなさ」であるが、「おしゃれをするセンスがない、自分に合う服装が分からない」の特に「センス」は内面的な意識であり体重のように数値化できず捉えにくい。おしゃれ群 A・B は「おしゃれをするセンスがない、自分に合う服装が分からない」という内面的なコンプレックスと、「太っている・痩せている」など「身体的魅力のなさ」もコンプレックスとして同時に感じている。「太っている・痩せている」など「身体的魅力のなさ」は視覚的に捉えられるため補償としての努力がしやすく、その努力がおしゃれへの意識に繋がったと考えられる。一方で、非おしゃれ群は「おしゃれをするセンスがない、自分に合う服装が分からない」と視覚化できず捉えにくいものをコンプレックスに感じているために補償としての努力がし

づらく、結果としておしゃれへの意識が低いと考えられる。非おしゃれ群はおしゃれ群 A・Bほど「身体的魅力のなさ」をコンプレックスとして感じていないために、補償のための努力への手がかりがない状態にある。

以上を踏まえ、目的②コンプレックスへの対処法仮説の検証とコンプレックスの有無がおしゃれにどう影響するのかの分析を統括する。コンプレックスがあるためにおしゃれから逃避する人と、コンプレックスの解消のために積極的におしゃれをする人の2種類があるとの仮説は、コンプレックスがおしゃれへの意識に繋がりにくい非おしゃれ群と、コンプレックスがおしゃれへの意識へ繋がりがやすいおしゃれ群 A・Bによって立証された。2種類の差は視覚的に捉えやすく解消のために努力しやすい問題をコンプレックスに感じているか否かであった。コンプレックスの有無がおしゃれに及ぼす影響については、コンプレックスの「有無」がおしゃれへの意識の高低を決めているのではなく、コンプレックスの「種類」によっておしゃれのし易さへ影響が出ていた。

本調査の限界と展開を述べる。本調査の限界は「コロナ禍前後でのおしゃれへの意識の変化を調査すること」にこだわってしまった部分にある。質問紙作成のための予備調査の段階で「コロナ禍前後」よりも「高校生になる前後」でおしゃれへの意識が高まる傾向は見えていたが、せっかくコロナ禍に質問紙調査を実施するのだからとコロナ禍に重点を置くことに固執してしまった。設問5・6できっかけを問う質問を用意したが、不十分だったと考える。一方、本調査で画期的であったのはコンプレックスを「おしゃれや身だしなみに気を遣う上で障害となる個々人の悩み、劣等感。外見にまつわることだけでなく、「おしゃれをするセンスがない」などの内面的な意識なども含めた包括的なもの」と比較的広い範囲を扱う概念として定義した点である。特に「センス」を取り入れたのはコンプレックスへの対処法仮説を設定し考察する上で大変重要な要素となった。おしゃれへの意識とコンプレックスとの関係についてさらに内容を絞り、質問数を減らすことで答えやすく回収しやすい質問紙が出来たのではと考える。

## 引用文献

石坂 昌子・藤森 愛梨(2019). 大学生における劣等感と補償の関連 VISIO, 49, 27-34.

高坂 康雅(2009). 青年期における容姿・容貌に対する劣性を認知したときに生じる感情と反応行動との関連 教育心理学研究, 57(1), 1-12.



## コロナ禍における身だしなみの変化

19C109 石亀茜里

19C211 松本りな

19C222 和田 楓

### 問題と目的

コロナ禍以前は GDP の成長に伴い化粧品の売り上げも右肩上がりに上昇するととの相関関係があり、安定的な市場であったが、一昨年世界的に大流行した新型コロナウイルスにより、化粧品を販売している百貨店やドラッグストアでは時短営業を余儀なくされ、国内での需要が大きく落ち込んでいる。

また、マスクが定着化したことにより、マスクで隠れる部分のメイク用品（口紅やチーク）の販売数が低迷している一方で、アイメイクは重要が高まっている。経済産業省の公表している国内の化粧品の出荷指数の推移(2021年)を確認すると、口紅の出荷数は 2019 年に比べ、2020 年は 50 ポイントダウンしている。アイメイクに至っても、口紅同様、2019 年比で 40 ポイントダウンしているものの、口紅ほどの落ち込みはみられない。他にも、マスクを長時間着用していることによる肌荒れの問題が浮上し、スキンケアの需要の高まりも考えられる。そこで、本研究では、コロナ禍前後での化粧品の需要の変化や、スキンケアに対する意識を明らかにすることを目的とする。

### 調査方法

#### 1.調査対象者

都内の私立大学に在籍し、社会調査実習を履修している 20 代前半の学生 79 人のうち 56 名（男性 22 名、女性 34 名）を対象とした調査を行った。

#### 2.調査日時・方法

2021 年 12 月 2 日～12 月 23 日にかけて、Google Forms を用いた集団調査を行った。

#### 3.調査内容

化粧に関する質問を 5～10 項目用意した。「Q1：戸籍上の性別を教えてください」との質問には、「男性」「女性」の 2 件法で回答を求めた。「Q2：お化粧品はしますか」との質問には、「する」「しない」の 2 件法で回答を求めた。Q2 の質問に対し「する」と回答した対象者には、「Q3：お化粧品をする頻度を教えてください(1 週間で何日しているか)」との質問に対し、「週 5 日以上」「週 4 日」「週 3 日」「週 3 日未満」「予定がある時のみ」「気分次第」の 6 件法で回答を求めた。「Q4：コロナ禍前はお化粧品をする際に最も力を入れていた部分はどこですか」と「Q5：コロナ禍後はお化粧品する際に最も力を入れる部分はどこですか」の質問に対し、「ベース」「眉毛」「アイシャドウ」「マスカラ」「アイライ

ナー」「チーク」「口紅」「シェーディング」「ハイライト」「その他」の10件法で回答を求め、「その他」の項目は自由記述で尋ねた。「Q6：お化粧品をするメリットを教えてください(複数回答可)」との質問に対し、「自信がつくから」「可愛くなりたいから」「綺麗になりたいから」「社会人としてのマナーだから」「お化粧品をするのが好きだから」「自己肯定感が上がるため」「モテたいから」「褒められたいから」「印象を良くするため」「素颜よりも好きだから」「その他」の11件法で複数選択可能にして回答を求め、「その他」の項目は自由記述で尋ねた。「Q7：お化粧品をするデメリットを教えてください」との質問に対し、「時間がかかる」「お金がかかる」「肌荒れするから」「化粧直しが必要になる」「面倒くさい」「素颜を見せるのに抵抗がある」「肌に合う化粧品を見つけるのが大変」「その他」の8件法で複数選択可能にして回答を求め、「その他」の項目は自由記述で尋ねた。

Q2の質問に対し「しない」と回答した対象者には、「Q3：お化粧品をしない理由を教えてください」との質問に対し、「面倒くさいから」「興味がないから」「肌に基礎疾患があるから」「時間がないから」「お金がかかるから」「必要性を感じないから」「素の自分で勝負したいから」「その他」の8件法で回答を求め、「その他」の項目は自由記述で尋ねた。Q3の質問に対し、「その他」と回答した対象者はここで回答を終了してもらった。

Q2の質問で「する」と回答した対象者に対してはQ8、「しない」と回答した対象者に対してはQ4として次の質問を尋ねた。「Q4/Q8：肌に気を遣いますか」との質問に対し、「はい」「いいえ」の2件法で回答を求めた。

Q4/Q8の質問に対し「はい」と回答した対象者には、最後に「Q5/Q9：よく使用する化粧品は何を基準に選びますか」との質問に対し、「肌荒れしないもの」「マット系」「ラメ系」「韓国コスメ」「海外コスメ」「高発色コスメ」「デパコス」「パッケージデザイン」「その他」の9件法で回答を求め、「その他」の項目は自由記述で尋ねた。

Q4/Q8の質問に対し「いいえ」と回答した対象者には、「Q5/Q9：肌に気を遣わない理由は何ですか」との質問に対し、「時間がないから」「興味がないから」「あまり容姿にこだわらないから」「面倒くさいから」「肌が強いから」「その他」の6件法で回答を求め、「その他」の項目は自由記述で尋ねた。

最後に「Q6/Q10：よく使用する化粧品は何を基準に選びますか」との質問に対し、「肌荒れしないもの」「マット系」「ラメ系」「韓国コスメ」「海外コスメ」「高発色コスメ」「デパコス」「パッケージデザイン」「その他」の9件法で回答を求め、「その他」の項目は自由記述で尋ねた。

## 結果

「Q1：戸籍上の性別を教えてください」との質問には56名（履修登録者の70.8%）の回答が得られた。「男性」が22名（全回答者の39.2%）、「女性」34名（全回答者の60.7%）であった。

「Q2：お化粧品はしますか」に関しては「する」35名（全回答者の62.5%）、「しない」2

名（全回答者の 37.5%）であった。Q2 で「する」と回答した対象者に「Q3：お化粧をする頻度を教えてください(1 週間で何日しているか)」と尋ねたところ、35 名（全回答者の 62.5%）の回答が得られた。「週 5 日以上」15 名（42.8%）、「週 4 日」4 名（11.4%）、「週 3 日」0 名（0%）、「週 3 日未満」0 名（0%）、「予定がある時のみ」12 名（34.2%）、「気分次第」4 名（11.4%）であった（図 1 参照）。

「Q4：コロナ禍前はお化粧をする際に最も力を入れていた部分はどこですか」に関しても 35 名（全回答者の 62.5%）の回答が得られた。「ベース」6 名（17.1%）、「眉毛」2 名（5.7%）、「アイシャドウ」14 名（40.0%）、「マスカラ」2 名（5.7%）、「アイライナー」6 名（17.1%）、「チーク」0 名（0%）、「口紅」4 名（11.4%）、「シェーディング」0 名（0%）、「ハイライト」0 名（0%）、「その他」1 名（2.8%）であった（図 2 参照）。「その他」は「目全体」との回答が得られた。

「Q5：コロナ禍後はお化粧する際に最も力を入れる部分はどこですか」に関しても 35 名（全回答者の 62.5%）の回答が得られた。「ベース」5 名（14.2%）、「眉毛」5 名（14.2%）、「アイシャドウ」13 名（37.1%）、「マスカラ」4 名（11.4%）、「アイライナー」5 名（14.2%）、「チーク」0 名（0%）、「口紅」0 名（0%）、「シェーディング」2 名（5.7%）、「ハイライト」0 名（0%）、「その他」1 名（2.8%）であった（図 2 参照）。「その他」は「目全体」との回答が得られた。

「Q6：お化粧をするメリットを教えてください(複数回答可)」に関しても 35 名（全回答者の 62.5%）の回答が得られた。「自信がつくから」13 回答（37.1%）、「可愛くなりたいから」17 回答（48.5%）、「綺麗になりたいから」16 回答（45.7%）、「社会人としてのマナーだから」10 回答（28.5%）、「お化粧をするのが好きだから」5 回答（14.2%）、「自己肯定感が上がるため」14 回答（40.0%）、「モテたいから」5 回答（14.2%）、「褒められたいから」9 回答（25.7%）、「印象を良くするため」19 回答（54.2%）、「素颜よりも好きだから」10 回答（28.5%）、「その他」1 回答（2.8%）であった。「その他」は「人間になるため」との回答が得られた。

「Q7：お化粧をするデメリットを教えてください」に関しても 35 名（全回答者の 62.5%）の回答が得られた。「時間がかかる」22 回答（62.8%）、「お金がかかる」22 名（62.8%）、「肌荒れするから」17 名（48.5%）、「化粧直しが必要になる」7 名（20.0%）、「面倒くさい」18 回答（51.4%）、「素颜を見せるのに抵抗がある」7 回答（20.0%）、「肌に合う化粧品を見つけるのが大変」5 回答（14.2%）、「その他」0 回答（0%）であった。Q2 で「しない」と回答した対象者に「Q3：お化粧をしない理由を教えてください」と尋ねたところ、21 名（全回答者の 37.5%）の回答が得られた。「面倒くさいから」3 名（14.2%）、「興味がないから」10 名（47.6%）、「肌に基礎疾患があるから」1 名（4.7%）、「時間がないから」1 名（4.7%）、「お金がかかるから」0 名（0%）、「必要性を感じないから」6 名（28.5%）、「素の自分で勝負したいから」0 名（0%）、「その他」0 名（0%）であった。「Q4/Q8：肌に気を遣いますか」に関しては 56 名（全回答者の

100%) の回答が得られた。「はい」 45 名 (80.3%)、「いいえ」 11 名 (19.6%) であった (図 3 参照)。

Q4/Q8 で「いいえ」と回答した対象者に「Q5/Q9：肌に気を遣わない理由はなんですか」と尋ねたところ、11 名 (全回答者の 19.6%) の回答が得られた。「時間がないから」 0 名 (0%)、「興味がないから」 8 名 (72.7%)、「あまり容姿にこだわらないから」 1 名 (9.0%)、「面倒くさいから」 1 名 (9.0%)、「肌が強いから」 0 名 (0%)、「その他」 1 名 (9.0%) であった。「その他」は「肌に合う化粧品が中々無いから」との回答が得られた。「Q5/Q6/Q9/Q10：よく使用する化粧品は何を基準に選びますか」に関しても 56 名 (全回答者の 100%) の回答が得られた。「肌荒れしないもの」 30 名 (53.5%)、「マット系」 3 名 (5.3%)、「ラメ系」 3 名 (5.3%)、「韓国コスメ」 3 名 (5.3%)、「海外コスメ」 1 名 (1.7%)、「高発色コスメ」 3 名 (5.3%)、「デパコス」 1 名 (1.7%)、「パッケージデザイン」 1 名 (1.7%)、「その他」 11 名 (19.6%) であった。その他は大きく化粧品購入者 (貰い物も含) 6 名 (全回答者の 10.7%) と、非購入者 5 名 (全回答者の 8.9%) の 2 つに分類することができたため、以下に羅列した。

#### 【購入者の基準】

「安さ」、「友達からの貰い物」、「崩れにくく、落ちにくいもの」、「クチコミ」、「パーソナルカラー」、「特にない」(各 1 名ずつ)

【非購入者の基準】 「使わない」(3 名)、「興味がない」(1 名)、「買わない」(1 名)

### 考察

本調査では、コロナ禍前後での化粧品の需要の変化や、スキンケアに対する意識を明らかにすることを目的とした調査を行った。問題と目的にて、コロナ禍により化粧品の需要が低迷したと述べたが、週 5 日以上ないし週 4 日化粧をしている人が 54.2% と全回答者の半数以上いることがわかる (図 1)。

コロナ禍以前の化粧頻度を調査していないため、憶測でしかないが、日々のマスク生活で化粧頻度が低減した人がいたとしても、その人自身の化粧頻度はコロナの有無に

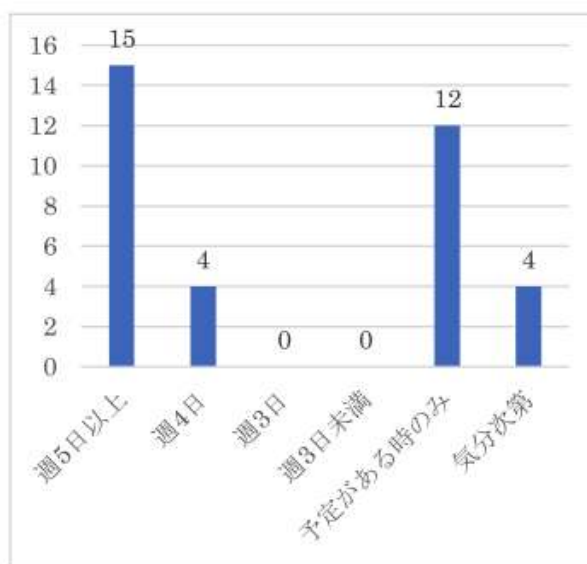


図 1 Q3 お化粧をする頻度を教えてください (1 週間で何日しているか)

関わらず変化しないのではないだろうか。化粧をする行為に対して自発的でない人は、コロナが起因して化粧頻度が低下しているであろうことが推測される。浅野・小林・吉崎（2019）の調査でも、周りの影響により化粧を始めたと回答した人が、自発的に始めたという人よりも圧倒的に多いことがわかる。このことから、自発的に化粧を始めなかった人や化粧行為に自発的でない義務感を抱いている人らは、コロナの影響で化粧頻度が低減したのではないだろうか。

図2で挙げられている項目は大きく2つに分類することができる。「眉毛」「アイシャドウ」「マスカラ」「アイライナー」の4つを

「目元メイク群」と分類し、「ベース」「チーク」「口紅」「シェーディング」「ハイライト」を「その他メイク群」と分類して考えると、コロナ禍前は「目元メイク群」に最も力を入れている人が85.7%であるのに対し、コロナ禍後は91.4%と、5.7%も上昇していることがわかる。この群の項目をみても、コロナ禍後に眉毛とマスカラの2項目に最も力を入れたとの人が増えていることがわかる。

この結果から、コロナが起因して、目元メイクに力を入れるようになった人が増えていることがわかる。「その他メイク群」に関しても、口紅を先頭に、全体的に減少傾向にある。株式会社ナリス化粧品（2021）により実施されたメイクの使用実態調査でも、2019年に「最も重要だと思う化粧アイテム」上位3つの中に入っていた口紅の項目が、2021年の調査ではアイシャドウへ変化していることがわかる。昨今もオミクロン株が流行し、コロナ禍が長引いているため、また大規模に蔓延した場合は、目元メイクの需要がより一層高まるのではないかと考えられる。

図3をみると肌に気を遣っている人は80.3%と8割以上の方が「はい」と回答しており、Q2の質問に対して化粧を「する」と回答した人の98%が肌

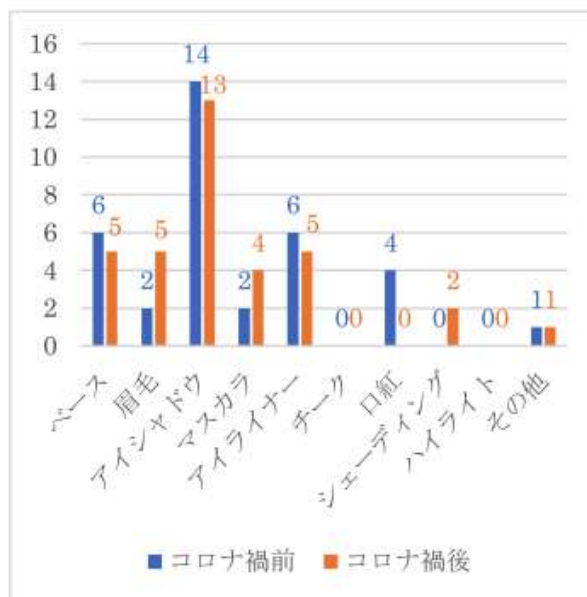


図2 Q4 コロナ禍前は化粧をする際に最も力を入れていた部分はどこですか

Q5 コロナ禍後は化粧する際に最も力を入れる部分はどこですか

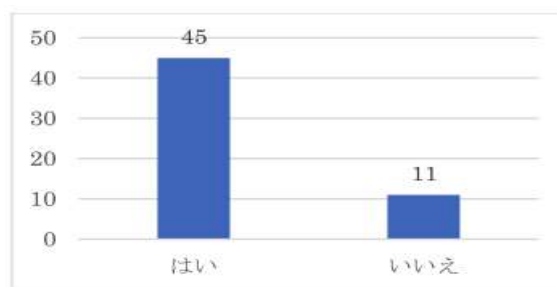


図3 Q4/Q8 肌に気を遣いますか

に気を遣っていることがわかる。この結果から、化粧をしている人は肌に気を遣っている可能性が高いことがわかる。Q7の質問で、実に48.5%の人が肌荒れをすることを化粧のデメリットとして挙げており、肌荒れするため、肌に気を遣わないといけなくなってしまうのではないだろうか。経済産業省（2021）のスキンケア関連化粧品の出荷指数グラフの洗顔クリーム・フォームに注目すると、2020年の出荷指数は前年比で10ポイントほど低減してはいるものの、2020年1月と2021年1月の出荷指数を比較すると、明らかに伸びていることが確認できる。1年以上の長期間に及ぶマスク生活で肌荒れが気になるようになったというような人は確実に増えたのではないだろうか。

次回、同じテーマで再調査を行う際は、化粧頻度と肌に気を遣うか否かの質問にコロナ前はどうかであったかの質問を入れ、考察の精度を高めることと、Q6の化粧のメリットの回答項目の内容に一貫性を持たせることが必要だと考えられる。

## 参考文献

- 浅野めい・小林胡桃・吉崎愛香(2019) 大学生の化粧事情 令和1年度(2019年度)社会調査実習報告書「大学生の生活と意識に関する調査」 pp8-13.
- ERPNAVI.化粧品業界の今後はどうなる？現状や課題,最新の動向をご紹介  
<https://www.otsuka-shokai.co.jp/erpnavi/category/apparel/sp/solving-problems/archive/210825-02.html> (参照日 2022-01-25)
- 株式会社ナリス化粧品 ”メイクの使用実態調査 コロナ前後 2000人比”  
PRTIMES 2021-10-20  
[https://prtimes.jp/main/html/rd/p/000000155.000025614.html](https://prt看imes.jp/main/html/rd/p/000000155.000025614.html) (参照日:2022-01-15)
- 経済産業省大臣官房調査統計グループ経済解析室. “新型コロナウイルス禍で変化する国内化粧品産業；インバウンド消費消滅は化粧品産業の変化を加速させる？” 経済産業省 2021-06-02  
[https://www.meti.go.jp/statistics/toppage/report/minikaisetsu/hitokoto\\_kako/20210602hitokoto.html#cont1](https://www.meti.go.jp/statistics/toppage/report/minikaisetsu/hitokoto_kako/20210602hitokoto.html#cont1) (参照日 2022-01-27)

## 推しと SNS

19C108 井口佳南 19C144 川田詩音  
19C193 野村恵美 19C198 林原那桜

### 目的

本調査では、大学生の趣味及び趣味と SNS の繋がりについて調査した。近年では、インターネットが普及し、身近な存在となっているが利用手段として連絡する目的以外にも、情報収集や自分に関するつぶやきを共有することで承認欲求を満たすことに使用されている。なおここでは、趣味を推しとする。推しとは、最も評価したい・応援したい人やモノを意味する。ヲタ活とは、オタク的とされる趣味の分野における活動を意味する言い方。大学生がヲタ活にどれほど比重を置いているのか、その中で SNS をどのように活用しているのかを目的に調査した。

### 方法

#### 調査方法

Microsoft Forms を用いて、調査票を配布、回答を得た。

#### 調査対象者

社会調査実習履修者 70 名のうち 68 名（男 22 名、女 36 名、その他 3 名）に調査票を配布した。

調査時期 12 月 2 日～12 月 23 日

#### 調査内容

男女比について求めるため、質問 1 で性別を尋ねた。質問 2 では、推しがいる人には、何次元の推しがいるのかについて、いない人にはなぜいないのか、興味がないからなどの選択を用意して、理由を尋ねた。質問 3 では SNS を使っている人で推しや推しに関する SNS をフォローしているかを尋ねた。その中から推し専用アカウントを持っているかを尋ね、持っている人でアカウントを作った理由について、あらかじめ「友達を作るため」「情報を早く収集するため」「推しのことを載せるため」「推しにコメントを送るため」「その他」複数回答可に質問をした。質問 6 では推し専用アカウントがある人で使っている SNS 「Twitter」「Instagram」「Facebook」「TikTok」「YouTube」「その他」の 6 つの選択肢を複数回答可で用意をした。質問 7 では、リッカート型で「推しにとって自分が一番でありたいと思う」「推しに認知されたいと思う」「推しのこと守りたいと思う」「同じファンに嫉妬すると思う」「みんなに推しのこと知ってもらいたいと思う」「推しで現実逃避していると思う」「推しに依存していると思う」「推しが理想の人であると思う」「推しが生きがいだと思う」を当てはまると思うものを選択してくださいと「当てはまる」「やや当てはまる」「やや当てはまらない」「当てはま

らない」の4件法で尋ねた。質問8では「推しにお金をかけたいと思う」について「はい」「いいえ」の2件法で尋ねた。はいと答えた人のみ「月に推しにどのくらいかけているのか」を尋ねた。「～1000未満」「1000～5000未満」「5000～10000未満」「10000～50000未満」「50000～100000未満」「10000～」の選択肢を設けた。

## 結果

有効回答数 61名（男22名、女36名、その他3名）で比較的女性が多い。

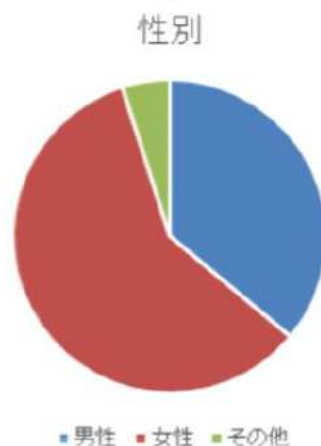


図1 性別

推しは何次元にいるのかという質問に対し2次元と答えた人は20名（33%）、2.5次元と答えた人は4名（7%）、3次元と答えた人は25名（41%）、いないと答えた人は12名（20%）だった。いないと答えた人の中から、なぜ推しがないのかという理由に対し「特に興味がないから」と答えた人は6名（38%）、「タイプの人がない」と答えた人は1名（6%）、「没頭するほど好きではないから」と答えた人が7名（44%）、「すぐに飽きてしまう」と答えた人が2名（13%）、「その他」0名だった。また、推しがいる人の中からSNSを使っている人で「推し専用アカウントを持っている人」については、図2のように「はい」と答えた人が13名（21%）、「いいえ」と回答した人が48名（79%）だった。

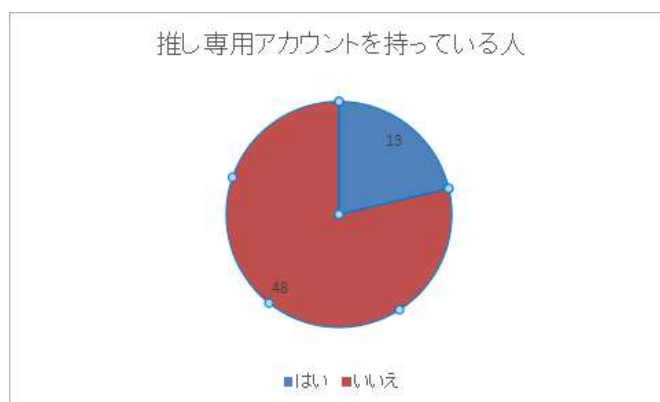


図2 SNSを使っている人で推し専用アカウントを持っている人



また、推し専用アカウントを持っている人で、「はい」と答えた人の中から推し専用アカウントを作った理由について、図3の通り「友達を作るため」と答えた人は4名（14%）、「情報を早く収集するため」と答えた人は12名（43%）、「推しのことを載せるため」と答えた人は6名（21%）「推しにコメントを送るため」と答えた人は4名（14%）、「その他」2名（7%）だった。

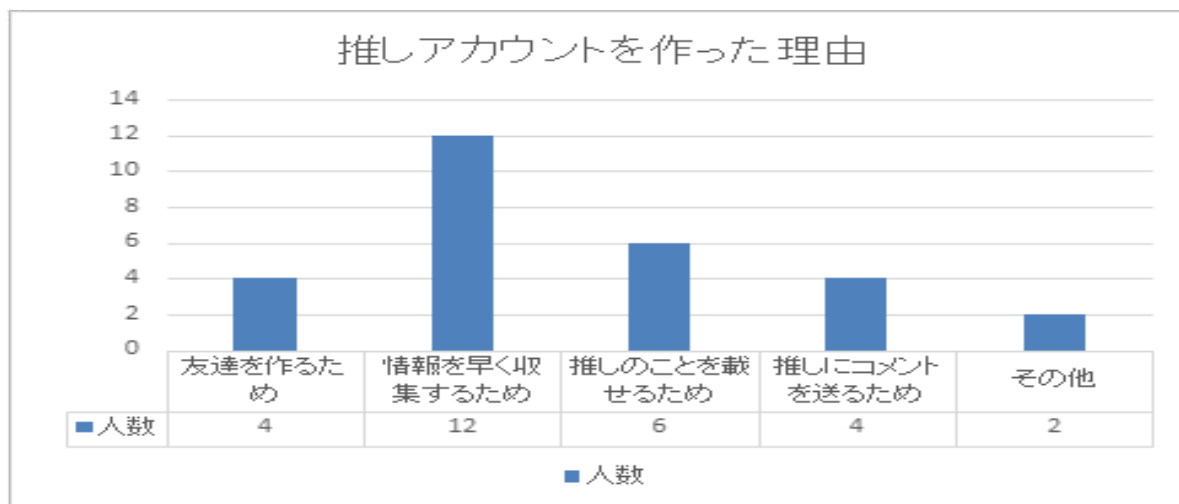


図3 推し専用アカウントを持っている人でアカウントを作った理由

推し専用アカウントを持っている人の中で使っている SNS について調査をした。図4のとおり「Twitter」を使っている人は11名、「Instagram」を使っている人は10名、「YouTube」は2名、「Facebook」「tiktok」「その他」は0名だった。

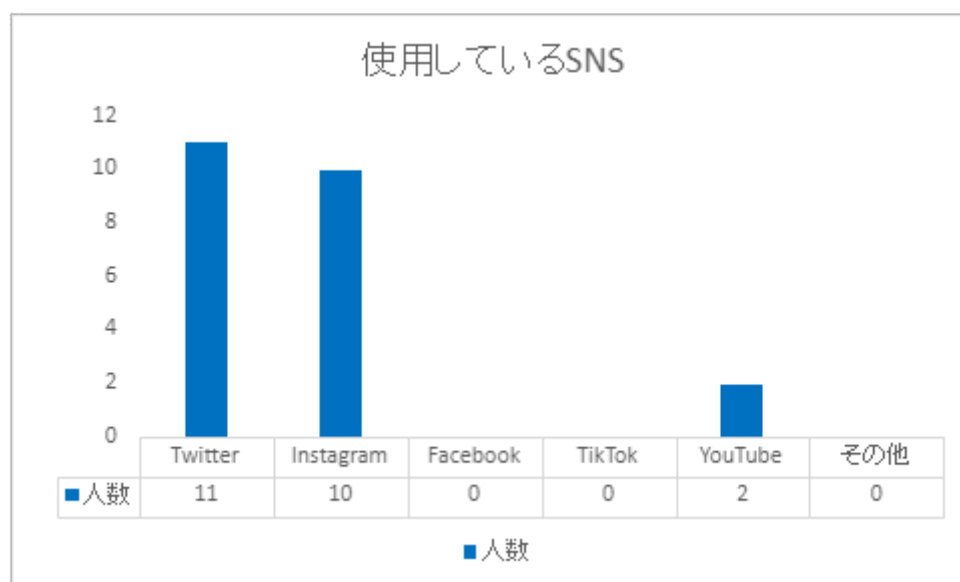


図4 使用している SNS

次に推しに関する感情について「当てはまる」「やや当てはまる」「やや当てはまらない」「当てはまらない」の4件法で尋ねた。みんなに推しを知ってもらいたいと思うという質問以外では、すべて「当てはまらない」が最も回答が多かった。また、みんなに推しを知ってもらいたいと思うでは「当てはまる」30%が最も多く回答を得られ、次に「当てはまらない」28%の回答が多いことがわかった。

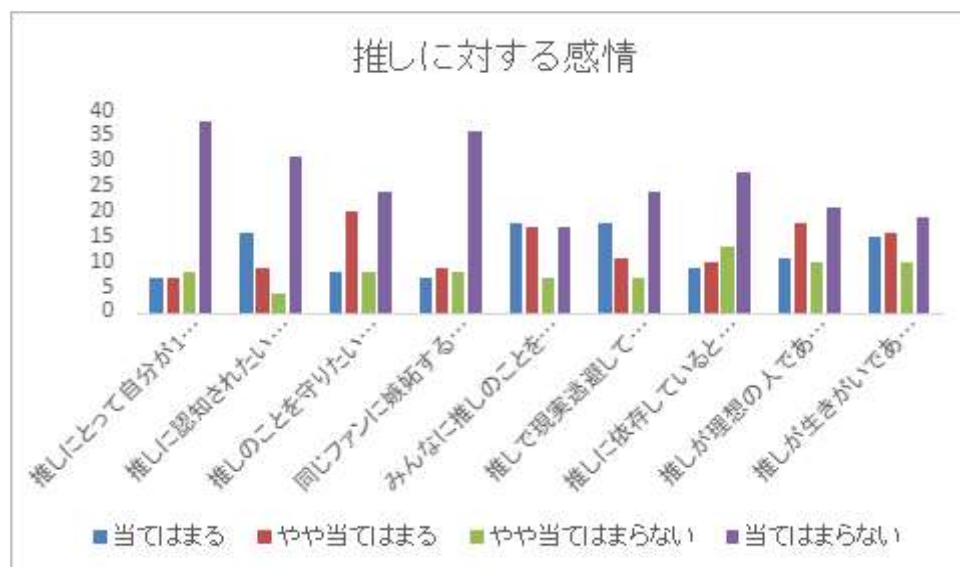


図5 推しに対する感情

推しにお金をかけたいと思うかという質問に対し、「はい」と回答した人は33名(56%)、「いいえ」と回答した人は26名(44%)だった。また、「はい」と回答した人には、月にどのくらいお金をかけているかを尋ねた。「～1000円未満」と回答した人は7名、「1000円以上～3000円未満」と回答した人は9名、「5000～10000円以上」と回答した人は3名、「10000円以上～50000円未満」と回答した人は11名、「50000円以上～100000円未満」と回答した人は2名、「100000円以上～」と回答した人は1名で、「10000円以上～50000円未満」が最も多く回答を得られたことがわかった。

## 考察

本調査では、大学生を対象に大学生の趣味とSNSの繋がり、お金の使い方を明らかにすることを検討した。男女比では女性の方が多く、ほとんどの人が推しという存在がいることがわかった。また、その中でも女性の方が推しがいることがわかった。現在はコロナ禍で自粛する期間が増えたため、ゲームやアニメ鑑賞、今流行りのYouTubeなどおうち時間が増えたことから、推しが出来たのではないかと考えられる。SNSが流行っている世の中で、推し専用アカウントを持っている人は半分より少なくあまり推し専用アカウントを作る必要がないと思っている人がほとんどだと分かった。反対に推し専用アカウントを持っている人は「情報を早く収集するため」が一番多く、簡単に情報を収集できるためにアカウントを作っていることがわかった。推しに対する感情では、推しにとって自分が一番でありたいと思う、推しに認知されたいと思う、同じファンに

嫉妬するという承認欲求や独占欲を絡んだものに対し、「当てはまる」と回答した人は女性の方が多く見られたため、男性よりも女性の方が独占欲などが強いのではないかと考える。推しに月どのくらいお金をかけているのかという質問に対し、「10000円以上～」が割といたことが意外だった。特にゲームの中に推しがいる人は、気軽にお金をかけていることができるため、「10000円以上～」お金をかけているのではないかと考える。このことから、SNSを活用してヲタ活をしている人は少なく、推しにお金をかける人もあまりいないことがわかった。本研究では、推しがいる人だけと限らず、いない人に対してももう少し質問内容を広げるべきだと考えた。

## 参考文献

大山 翔平・長田麻衣 「ヲタ活」に見る若者の消費行動と心理－享樂志向と承認欲求が支える献身的消費－

## 対面時と非対面時、また、顔や名前を知っているかで印象が変化するか

19C197 林 拓幸

19C208 前川 愛貴

### 1. 目的

名前や顔は重要な個人情報でありそれを知らない相手との非対面コミュニケーションは避けるべきである、というような風潮が根強く残っている。それはネット環境での攻撃性の発露のしやすさや顔やボディランゲージのないコミュニケーションの難しさ、特に犯罪に巻き込まれるリスクを 0 にできないことなどを問題としてあげられることなどが要因である。しかし、近年の研究でそれぞれが状況に応じた長所と短所を持つという程度の差しかないことが示されている。例えば有効性という面では、非対面コミュニケーションは自己開示が促進されるという側面があり、また本当の自分を表現しやすくなることも分かっている。

本調査では、対面時と非対面時、顔や名前を知っているか否かでコミュニケーションを取る態度や相手の印象に差があるか、またこれらの中に相関があるかを明らかにすること。それによる、より良いコミュニケーションの場や手順の作成に寄与することを目的とする。

なお、“面識のない相手”とは“顔も名前も知らない相手”、“面識のある相手”とは“顔も名前も知っている相手”、“現実”とは“面識のある相手との対話場面”を指すものとする。

### 2. 方法

#### 調査対象者

2021 年度に関東 T 大学の社会調査実習を履修していた 70 名のうち 68 名(男性 26 名、女性 42 名)に調査票を配布した。

#### 調査時期

12 月 2 日～23 日

#### 調査内容

Microsoft Forms を用いて、調査票を配布、回答を得た。調査票はリッカートによって“SNS 上と現実での態度の差”、“面識のない相手との会話場面での感情反応”、“面識のない相手との付き合い”の 3 つの質問群に分かれている。以降それぞれを“態度の差”、“感情反応”、“付き合い”と記述するが、筆者側の通称であり被調査者には通達されていない。回答は、性別は男女のみ、面識のない相手との会話経験の有無での 2 件法と、それ以外はすべて「全く当てはまらない」、「あまり当てはまらない」、「少し当てはまる」、「とても当てはまる」の 4 件法となっている。

### 3. 結果

有効回答数 52 名(男性 20 名、女性 32 名)

ただし 1 問までは答えられない回答も感情的に複雑な部分があるものとし、今後の質問紙の調

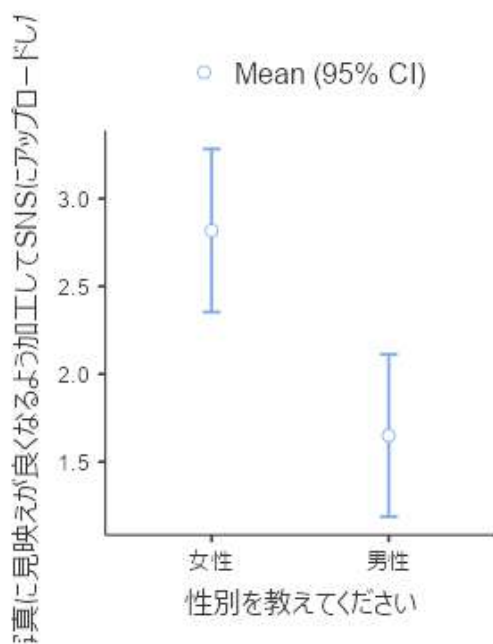
整に活かすため有効回答と見なした。

「面識のない相手との話したことがありますか？」では「はい」が35名で「いいえ」が17名であった。

回答の“全く当てはまらない”を1、“あまり当てはまらない”を2、“少し当てはまる”を3、“とても当てはまる”を4として男女別と面識のない相手との会話の有無(はい・いいえ)での記述統計によって平均値と標準偏差(SD)を算出し、1 要因分散分析によって検定を行った。

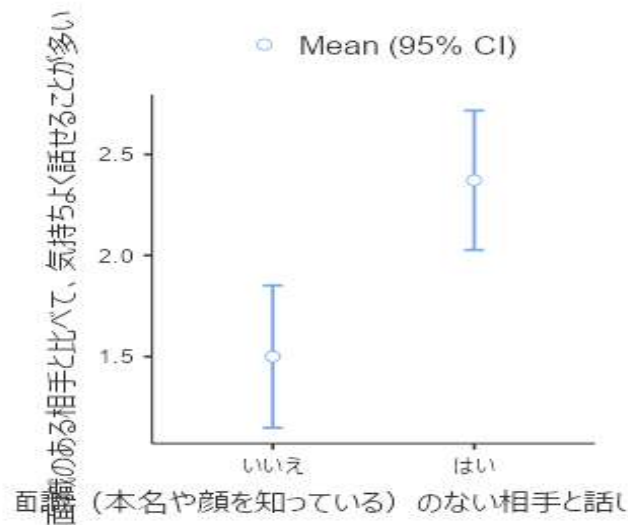
“態度の差”では特筆して男女別での“自分の顔写真に見映えが良くなるよう加工して SNS にアップロードしたことがある”が  $F=13.536(P<.001)$  で有意な差を示し、女性は平均値  $2.82(SD 1.31)$  に対し男性は  $1.65(SD 0.988)$  であった。

自分の顔写真に見映えが良くなるよう加工して SNS にアップロードしたことがある



“感情反応”で差が出たのは男女に関係なく“面識のある相手と比べて、気持ちよく話せることが多い”で  $F=13.44209(P<.001)$  で有意な差を示し、“はい”が  $2.37(SD 1.00)$ 、“いいえ”が  $1.50(SD 0.707)$  となった。

面識のある相手と比べて、気持ちよく話せることが多い



“付き合い”では有意な差のある結果は出なかった。

#### 4. 考察

今回の目的からは、面識のない相手との会話は気持ちよく話せることが多いという実体験が有意に多いと分かったことは収穫と言える。特にイライラする、迷惑な関わりが多いなどの質問では実体験としても有意な差が出なかったこともあり、面識のない相手との会話の方が気楽に、あるいはスムーズに進む可能性が示唆され、先行研究とも整合性が取れる結果となった。

しかし、“態度の差”での有意な結果は女性の方が SNS 上で着飾りやすいというぐらいだったことは残念な結果になったといえる。事前に想定していた攻撃性の発露やギャップがあることへの罪悪感などが確認できなかったからである。“付き合い”でも有意な結果が得られなかったことと合わせ、更なる質問内容の洗練と実証実験の追加などが今後の課題としてあげられるだろう。特により良いコミュニケーションの場や手順作成に寄与するという面でいえば失敗と言ってもよいだろうことから、他の尺度や研究との合同も視野に入れ更なる追従調査が必要であると考えられる。

#### 調査票の質問と回答一覧

リッカートでまとめた質問群ごとに数字を振った。また「とても当てはまる—少し当てはまる—あまり当てはまらない—全く当てはまらない」のそれぞれの回答数を質問の横に[a-b-c-d]と記述する。

##### 1. 性別を教えてください

男性—女性[20-32]

2. SNS 上と現実の自分について当てはまるものを選んでください。

SNS 上と現実の自分の間で言動に違いがあると感じる[18-9-19-6]

SNS 上の自分を現実より良く見せようとしたことがある[12-14-16-10]

SNS 上と現実の自分の違いに罪悪感を感じたことがある[21-18-10-3]

SNS 上と現実のギャップがある他人に、プラスの印象を受ける[11-30-9-2]

現実に対して不満を感じることもある[8-14-18-12]

現実に対する不満を SNS 上で発散することがある[11-13-16-12]

現実と SNS で自分の乖離を感じることもある[16-23-11-2]

自分の顔写真に見映えが良くなるよう加工して SNS にアップロードしたことがある[22-6-8-16]

3. 質問 SNS や出会い系アプリなどで、面識（本名や顔を知っている）のない相手と話したことがありますか？チャットなども含みます。

はい—いいえ[35-17]

4. 面識のない相手との会話で当てはまるものを選んでください。

面識のある相手と比べて、話が続く[14-24-11-3]

面識のある相手と比べて、その人との親交を深めたり、新たに関わる人を増やしたいと思う[11-19-20-2]

面識のある相手と比べて、相手の長所に気付きやすいと思う[13-27-10-2]

面識のある相手と比べて、気持ちよく話せることが多い[19-15-13-5]

面識のある相手と比べて、話が続かないと思うことがある[9-10-17-16]

面識のある相手と比べて、迷惑なかかわりをする人が多いと思う(ストーカーや粘着だけでなくちょっとした失礼な言い方も含む)[8-15-16-13]

面識のある相手と比べて、短所に気付きやすい[9-17-17-9]

面識のある相手と比べて、話していてイライラしてしまうことが多い[11-19-15-6]

面識のある相手と比べて、簡潔な、または業務亭な付き合い方をする人が多いと思う(具体的には雑談の頻度が少ない、プライベートの話をしなない等)[7-12-22-10]

5. 面識のない相手との関係について、当てはまるものを選んでください。

面識のない相手との関わり合いは今後の生活には必要だと思う[9-13-20-10]

自分の本名を知らない知り合いや友人に自分の本名を教えたいと思う[23-25-3-1]

本名を知らない知り合いや友人の本名を知りたいと思う[20-16-14-1]

お互いに本名を知っている方が知らない場合より仲が良いと思う[15-9-21-7]

# 男女の友情は成立するか

19C150 北田佳穂、19C176 須田恭子

## 目的

友情とは、“友達の中の親愛の情。情け”（広辞苑より）、“共感や信頼の情を抱き合って互いを肯定し合う人間関係、もしくはそういった感情”（Wikipedia より）を指す。こういった友情は同性間での想起がほとんどだが、異性間つまり“男女の友情が成立するのか”という問いに対する答えは極端に分かれるだろう。Google で“男女の友情”と検索すると約 20,500,000 件の検索結果がヒットすることからも多くの人の関心があることが伺える。このように、男女の友情をテーマとして取り上げられているウェブサイトは数え切れないほどあるが、男女の友情が成立するか否かの本質的なことや、成立要因を調査した公的な研究、論文は少ない。

本調査では、友人期間の長さが成立要因と仮定し、男女の友情が成立する行動パターンの分析を目的とする。ここで指す男女の友情とは、“同性の友人と同様の接し方ができる関係性、そこに恋愛感情の介在は関係ないものとする。尚、ここで指す異性とは身体的な性に限らず、回答者の想像する異性を対象に自由に回答してもらった。だが、性交渉などがあった場合は如何なるケースでも“友情の成立とは看做さない”と定義した。

## 方法

### 調査方法

Microsoft Forms を用いて、調査票を配布、回答を得た。

### 調査対象者

社会調査実習履修者 70 名のうち 68 名（男 26 名、女 42 名）に調査票を配布した。

### 調査時期

2021 年 12 月 9 日～2022 年 1 月 11 日

### 調査内容

まずは、認識の性差を図るために、回答者の性別を尋ねた。LGBTQ に配慮し、質問には男性/女性/その他の 3 項目を用意。今回はその他がイレギュラー要因となるため、その他と回答した人はこの段階で調査を終了した。次に、異性の友人の有無をいる/いないの二件法にて質問した。この回答結果から分岐し、いると回答した人には、「友人とどれくらいの付き合いか」の期間の質問を、1 年未満/3 年以下/6 年以下/それ以上の 4 件法にて質問。年数の設定に関しては、小学校、中学高校期間から考慮し、設定した。次に「自分と友人の間柄を周囲も知っているか」の周知について質問した。また、友人がいると回答した人はその相手を想像してもらい、いないと回答した人は、いると想定して「友人と手を繋げるか」「友人に恋人ができたら悲しいと思うか」「友人と恋人関係になることは絶対にないか」「友人と 2 人きりだとドキドキするか」「友人から告白をされたら断れるか」を共通質問した。これらは当てはまる順から、とてもそう思う/そう思う/そう思わない/全くそう思わないの 4 件法を適用した。次に、友人関係から交際に発展したことがあるかを、はい/いいえの二件法にて質問し、回答によって質問を分岐させた。発展したことがない、と



回答した人にはまず告白の有無を確認すべく、「自分もしくは相手からの告白はあったか」をはいはいの二件法にて質問した。次に発展の有無に関わらず、共通質問にて「交際の決め手（交際に至らなかった要因）に相手の見た目や外見などは含まれるか」「交際の決め手（交際に至らなかった要因）に相手の内面（性格など）は含まれるか」「交際の決め手（交際に至らなかった要因）に相手のステータス（お金持ちや社会的地位が高いなど/お金がない、社会的地位が低いなど）は含まれるか」をはいはいの二件法に質問、その他が交際の決め手になった、もしくはなかった要因がある人には自由記述にて回答を求めた。

## 結果

図1 本調査の有効解答数は56名（男性21名、女性36名）、有効解答率82.35%であった。まず、①性別はどちらかを質問し、男性21名；38.18%、女性34名；68.18%、その他2名；3.63%となった。ここから21名の男性と36名の女性を対象に質問をした。②異性の友人がいるかについては、いる39名；73.58%、いない14名；26.41%と約7割が異性の友人がいる結果となった（図1参照）。

図1 異性の友人の有無

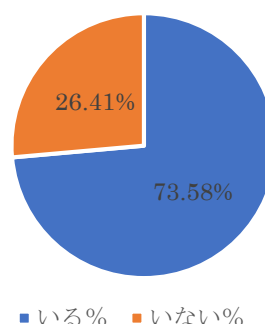
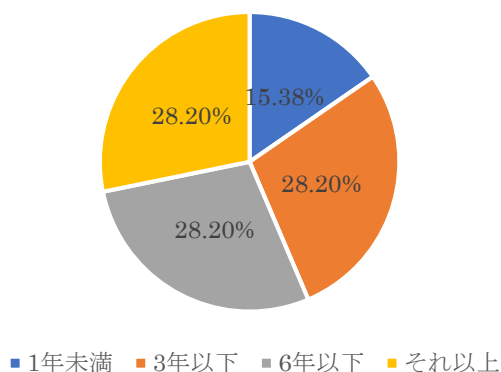


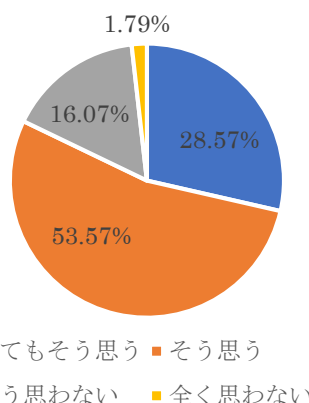
図2 友人期間は？



この異性の友人がいると回答した人には、次に③その友人とどれくらいの付き合いかを質問した。その結果、1年未満6名；15.38%、3年以下11名；28.20%、6年以下11名；28.20%、それ以上11名；28.20%となった（図2参照）。

④その友人と手を繋げるかについては、とてもそう思う8名；15.09%、そう思う22名；41.50%、そう思わない17名；32.07%、全くそう思わない6名；11.32%だった。⑤異性の友人に恋人ができたら悲しいと思うかについては、とてもそう思う0名；0%、そう思う2名；3.33%、そう思わない37名；61.66%、全くそう思わない35.00%となった。⑥その友人

図3 友人と恋人関係になることはない？



と恋人関係になることは絶対にないか、については、とてもそう思う 16 名；28.57%、そう思う 30 名；53.57%、そう思わない 9 名；16.07%、全くそう思わない 1 名；1.79%と約 8 割が恋愛関係になることはないと回答した（図 3 参照）。

⑦その友人と 2 人きりだとドキドキするか、ではとてもそう思う 0 名；0%、そう思う 3 名；4.92%、そう思わない 36 名；59.02%、全くそう思わない 22 名；36.07%。⑧その友人から告白をされたら断ることができるかでは、とてもそう思う 15 名；27.27%、そう思う 33 名；60.00%、そう思わない 6 名；10.90%、全くそう思わない 1 名；2.00%と、約 9 割が断れる結果が出た（図 4 参照）。

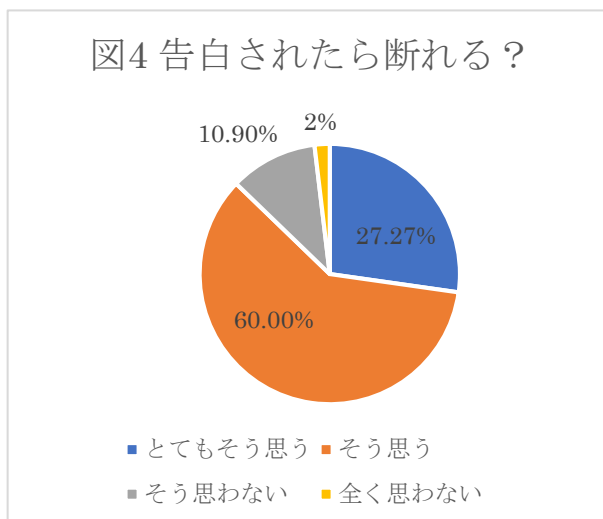
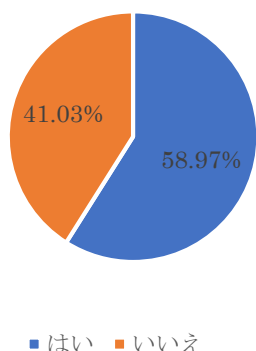


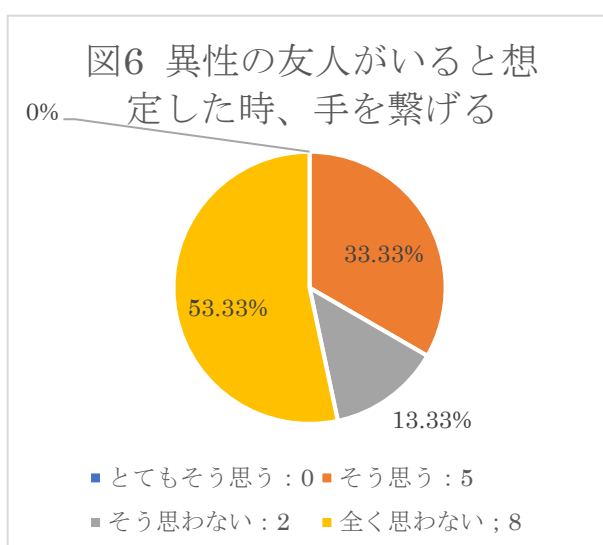
図5 友人関係から恋愛関係に発展したことがある



⑨自分とその友人の間柄を周りの人も知っているかでは、とてもそう思う 21 名；33.87%、そう思う 35 名；56.45%、そう思わない；6.45%、全くそう思わない 2 名；3.23%となった。⑩友人から交際関係に発展したことがあるかについて、はい 23 名；58.97%、いいえ 16 名；41.03%と約 6 割が友人から交際に発展した経験があることがわかった（図 5 参照）。

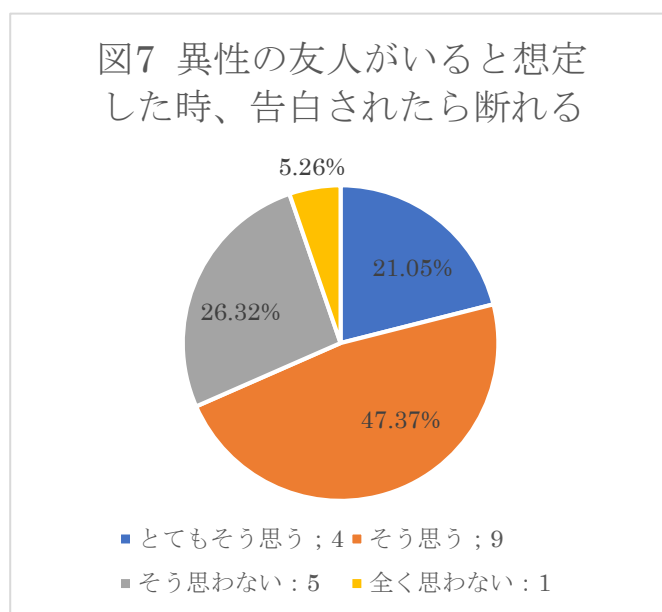
この発展した経験の有無から以降の質問を分岐させ、発展しなかった人には告白の有無を調査すべく、⑮自分もしくは相手（友人）からの告白はあったかについて質問したところ、はい 7 名；

43.75%、いいえ 9 名；56.25%であった。以降は、交際に重視するもの、交際に発展しなかった要因を外見、内面、ステータス、その他自由回答で質問した。まず、友人関係から交際した人に以下のように質問したところ、このような結果となった。⑪交際の決め手に相手の見た目や外見などを重視するか、はい 12 名；52.17%、いいえ 11 名、47.83%。⑫交際の決め手に相手の内面（性格など）を重視するか、はい 22 名；95.65%、いいえ 1 名；4.35%。⑬交際の決め手に相手のステータス（お金持ちや社会的地位が高いなど）を重視するか、はい 2 名；8.70%、いいえ 21



名；91.30%であった。その他の理由に関しては⑭自由記述で「雰囲気」や「相性」といったフィードバック的な要因が挙げられた。友人関係から交際に発展しなかった人の結果は以下の通りである。⑯交際に至らなかった要因に、相手の見た目や外見などは含まれるか、はい3名；18.75%、いいえ13名；81.25%。⑰交際に至らなかった要因に、相手の内面（性格など）は理由に含まれるか、はい11名；68.75%、いいえ5名；31.25%。⑱交際に至らなかった要因に、相手のステータス（お金がない、社会的地位が低いなど）は含まれるか、はい0名；0%、いいえ16名；100%であった。その他、要因に関する⑲自由記述回答では「恋愛対象外」「男友達域を出ない」と言った回答が見受けられた。異性の友人がいないと回答した人には、上記の質問はせずに、いると想定してもらい、⑳いると想像した時に、その友人と手を繋げるか、とてもそう思う0名；0%、そう思う5名；33.33%、そう思わない2名；13.33%、全くそう思わない8名53.33%となり、手を繋げないと回答した人が約6割となった（図6参照）。

㉑いると想像した時に、その友人に恋人ができたら悲しいと思うか、とてもそう思う0名；0%、そう思う1名；6.66%、そう思わない8名；53.33%、全くそう思わない6名；40.00%。㉒いると想像した時に、その友人とは絶対に恋人にならないか、とてもそう思う3名；16.66%、そう思う7名；38.89%、そう思わない6名；33.33%、全くそう思わない2名；11.11%。㉓いると想像した時に、その友人といるとドキドキするか、とてもそう思う0名；0%、そう思う4名；26.66%、そう思わない6名；40.00%、全くそう思わない5名；33.33%。㉔いると想像した時に、その友人に告白されたら断れるかでは、とてもそう思う4名；21.05%、そう思う9名；47.37%、そう思わない5名；26.32%、全くそう思わない1名；5.26%となった（図7参照）。



## 考察

友人としての付き合いの長さによって行動パターンの違いが明らかとなった。まず、③友人としての期間の長さ、⑥その友人と恋人関係になることはないの設問から、期間が6年以下とそれ以上と回答した人ほど、恋愛関係になることはない（そう思う/とてもそう思う）と回答している数が多い。また、⑦二人きりでドキドキするかという質問に対し、友人関係が長いほど、全くしないという回答が多い傾向にある。考えられる要因として、長期間の友人関係を確立しているため男女の関係に発展しづらく、異性間での友情を継続できていることが分かる。だが、友人関係が長い人ほど、④手を繋ぐことに抵抗があることがわかった（期間の長さがそれ以上だと54.54%が手を繋げないが、1年未満だと33.33%）。また、友人関係が長いと相手に恋人ができた時に悲しいと思うかの質問に対して、そう思うと回答した人が多かった。（1年

未満と3年以下では思わないの解答率がそれぞれ100%だったが、6年以下とそれ以上では90.9%であり、各個に9.1%そう思うの回答があった)。これは、恋愛意味合いの独占ではなく、自分と接する機会が減ることを危惧した思いだと考えられる。以上は友人関係の長さで違いがみられたが、友人から告白されたら断れると思うかの質問でどれも優位な差が見られなかった(1年未満83.3%、3年以下81.8%、それ以上81.8%)。この結果から、どんなに良好な友人関係を続けていても、付き合いの期間に関わらず、相手から告白があると恋愛関係に発展しやすいことがわかる。これは、友人関係を継続できる＝自身の中での人間関係セーフゾーンにポジショニングされているため、プッシュがあると発展しやすいものと考えられる。

仮説通り、友人としての付き合いの長さが、異性間の友情に関係していることがわかった。実際多くの質問項目において、期間が短い群よりも長い群の方が相手を異性として意識せずに、同性の友人と同じ接し方ができると判明した。だが、最後にも述べたように友情期間の長さに関わらず、相手からの告白があると恋愛関係に発展する可能性があることから、男女の友情は成立しないと考えられる。逆に友人期間の長さで告白をしない(半強制的に異性を意識させない)ことで男女の友情は成立できるとも言える。

最後に、取り上げなかった質問項目が多くあるが、今回は友人期間に焦点をあてたため、ここでの考察は控える。なお、本研究の限界は調査対象とその数が限定されすぎたこと、他にも考えられる成立要因について熟考できていないことがあるため、今後の糧にしていく。

## 自己肯定感と親子関係の繋がり

19C156 小池こころ、19C189 中島惟

### 1. 問題と目的

私たちが自己肯定感を高めるためには友人関係などのほかに、家庭環境も関係している。自己肯定感の低い養育者は、自分の子どもを褒めるような言葉掛けができず、子どもの自己肯定感が低いまま成長してしまう。そうならないために、子どもの自己肯定感を上げるための子育て本が近年増えており、これは自己肯定感が高い大人になってほしいという養育者の願いの表れだろう。

本調査では、養育者との経験が自己肯定感にどのように繋がっているのかを明らかにすることを目的として調査を行った。ここでの養育者との経験は小学生までのこととする。また、自己肯定感とは自己価値に関する感覚であり、自分が自分についてどう考え、どう感じているかによって決まる感覚（一般社団法人日本セルフエスティーム普及協会）と定義する。

### 2. 方法

#### 調査方法

Microsoft Forms を用いて調査票を配布し、回答を得た。

#### 調査対象者

社会調査実習履修者 70 名のうち 68 名（男性 26 名、女性 42 名）に調査票を配布した。

#### 調査時期

2021 年 12 月 2 日～12 月 23 日に実施した。

#### 調査内容

質問はフェイスシート（性別）の他に以下の質問をした。

実家で暮らしているかを聞くため、「今現在、実家暮らしですか。」と尋ね、回答は「はい」「いいえ」の 2 件法で回答を求めた。家族構成を知るため、「家族構成を教えてください。」と尋ね、「母」「父」「姉、兄」「妹、弟」「その他」の中から複数回答を求めた。小学生までの経験を知るため、「養育者と共に食事をする」「学校の行事に養育者は来てくれた」「学校の出来事を養育者に話した」「養育者から肯定的な言葉をかけられた」と尋ね、「よくあった」「時々あった」「あまりなかった」「全くなかった」の 4 件法で回答を求めた。今現在の養育者との関係を知るため、「養育者と仲がいいと思う」「養育者に興味を持たれていると思う」「養育者とコミュニケーション（会話・連絡等）を取れていると思う」と尋ね、「そう思う」「ややそう思う」「ややそう思わない」「思わない」の 4 件法で回答を求めた。今現在の回答者の自己肯定感を知るために「自分は落ちこぼれだと思う」「自分には人並みの能力がある」「自分自身に満足している」と尋ね、「そう思う」「ややそう思う」「ややそう思わない」「思

わない」の4件法で回答を求めた。

### 3. 結果

有効回答数は56名（男性22名、女性34名）となった。

「今現在、実家暮らしですか。」という質問に「はい」と回答したのは93%で、「いいえ」と回答したのは7%だった。

「家族構成を教えてください。」という質問に「母」34%、「父」28%、「姉、兄」17%、「妹、弟」16%、「その他」5%で、「その他」には主に祖父母が多かった。

小学生までの経験を聞く、「養育者と共に食事をする」という質問は、「よくあった」89.3%、「時々あった」8.9%、「あまりなかった」1.8%、「全くなかった」0.0%となった。「学校の行事に養育者は来てくれた」という質問は、「よくあった」82.1%、「時々あった」12.5%、「あまりなかった」3.6%、「全くなかった」1.8%となった。「長期休みの際、養育者と旅行に出かけた」という質問は、「よくあった」51.8%、「時々あった」21.4%、「あまりなかった」21.4%、「全くなかった」5.4%となった。「学校の出来事を養育者に話した」という質問は、「よくあった」69.6%、「時々あった」19.6%、「あまりなかった」7.1%、「全くなかった」3.6%となった。「養育者から肯定的な言葉をかけられた」という質問は、「よくあった」60.7%、「時々あった」25.0%、「あまりなかった」10.7%、「全くなかった」3.6%となった（図1）。

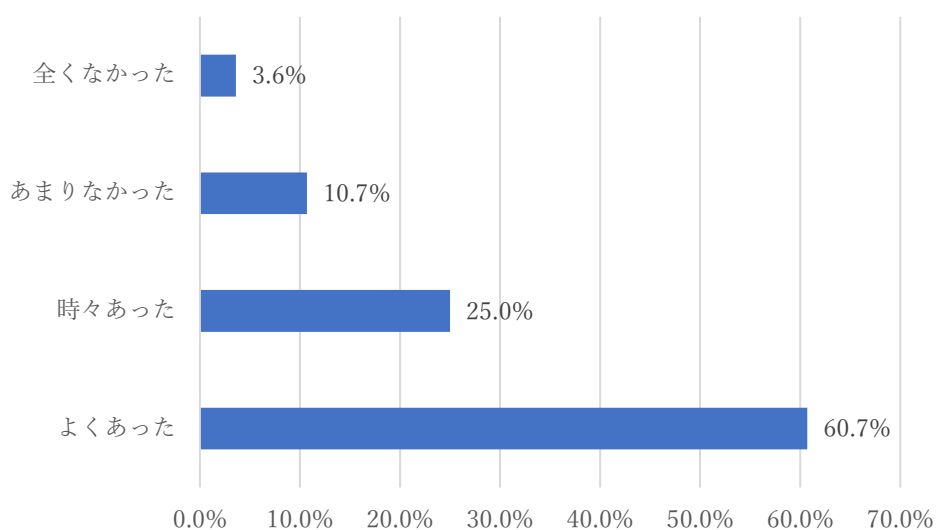


図1 養育者から肯定的な言葉をかけられた

今現在の養育者との関係を聞く、「養育者と仲がいいと思う」という質問に、「そう思う」62.5%、「ややそう思う」30.4%、「ややそう思わない」7.1%、「思わない」0.0%となった。

「養育者に興味を持たれていると思う」という質問に、「そう思う」39.3%、「ややそう思う」46.4%、「ややそう思わない」12.5%、「思わない」1.8%となった（図2）。「養育者とコミュニケーション（会話・連絡等）を取れていると思う」という質問に、「そう思う」53.6%、「ややそう思う」41.1%、「ややそう思わない」5.4%、「思わない」0.0%となった。

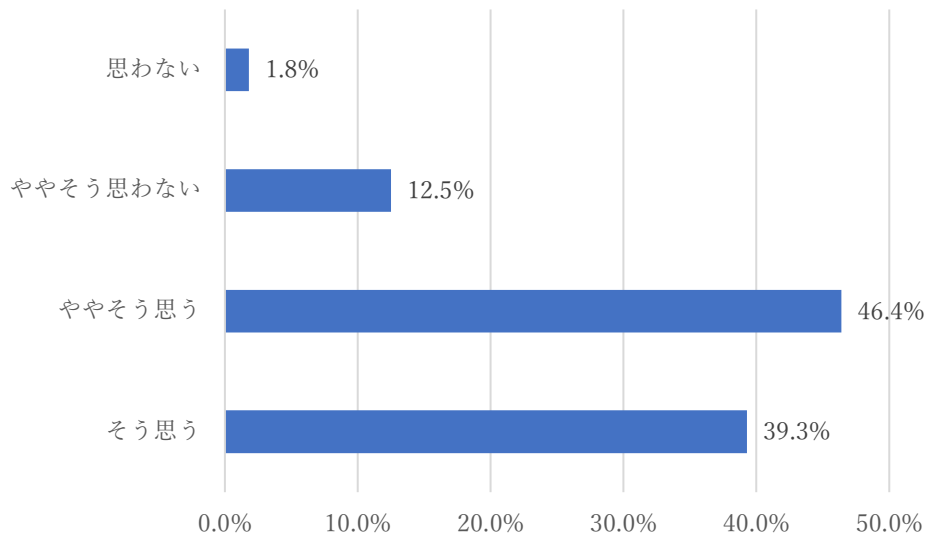


図2 養育者に興味を持たれていると思う

今現在の回答者の自己肯定感を聞く、「自分は落ちこぼれだと思う」という質問に、「そう思う」26.8%、「ややそう思う」26.8%、「ややそう思わない」25.0%、「思わない」21.4%となった（図3）。「自分には人並みの能力がある」という質問に、「そう思う」16.1%、「ややそう思う」39.3%、「ややそう思わない」26.8%、「思わない」17.9%となった。「自分自身に満足している」という質問に、「そう思う」19.6%、「ややそう思う」41.1%、「ややそう思わない」23.2%、「思わない」16.1%となった。

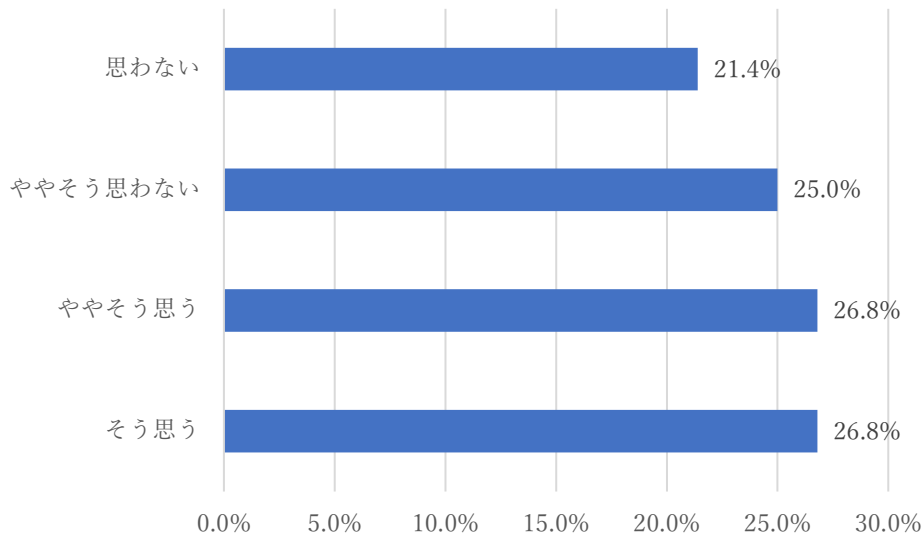


図3 自分は落ちこぼれだと思う

#### 4. 考察

本調査では、養育者との経験が自己肯定感にどのように繋がっているのかを明らかにすることを目的に調査を実施した。

「養育者から肯定的な言葉をかけられた」という経験を聞いた質問で、「よくあった」「時々あった」と回答したのは全体の 8 割ほどいた。このことから小学生までに養育者から褒められた経験があり、養育者に認められているという感覚を持っていると考える。また、「養育者に興味を持たれていると思う」という今現在のことを聞いた質問で、「そう思う」「ややそう思う」と回答したのは全体の 9 割ほどであった。これら結果から、養育者に認められているという感覚を持っていて、それを今現在も継続して持っている人がほとんどであると考える。

「自分は落ちこぼれだと思う」という今現在の自己肯定感について聞いた質問で、「そう思う」「ややそう思う」と回答したのは全体の 5 割ほどで、回答数がわずかに「ややそう思わない」「思わない」の否定の回答数を上回った。これは、自分に自信が無く自己肯定感が低い状態であり、自分は落ちこぼれであると決定づけるような経験や言葉掛けをされたからだと考える。これらの結果から、小学生までに養育者に褒められたり認められているという経験をされていたりしても、今現在の自己肯定感には必ずしも関係しているとは言えないと推測される。

本調査では、有効回答数が 56 名と結論を出すには数が少なかった。また、普段から心理学を学んでいることが自己肯定感の低さに影響していると考え、心理学を専攻していない学生との比較が必要である。

#### 引用文献

一般社団法人日本セルフエスティーム普及協会, <https://self-esteem.or.jp/selfesteem/>  
(2022 年 1 月 28 日)



# 性格・パーソナリティと行動の関連

19C129 小寺 歩

19C220 山田 秀

19C214 宮坂祐太

## 問題と目的

今日、行動と性格（パーソナリティ）について言及されることが増えている。特に、ここ最近に起こった電車内での放火や迷惑行為、心理クリニックでの放火などの犯人に対して、「頭のおかしい人間だ」「精神障害に違いない」との声は少なくない。しかし、精神障害を持つからと犯罪者として扱うことは、検挙人数における精神障害者等の比率が1.0%であることから、間違っているということはいうまでもない。一方、パーソナリティ障害という名称があるように精神障害と性格の関連、さらに、精神障害の診断において行動の観点から行うことから性格と行動に関連があることも推測される。今後、どのような性格と行動に関連があるのかを積み重ねていく必要がある。

このレポートでは大学生を対象に身近な行動と性格についての質問調査を行い、行動と性格に関連がみられるのか、また、性格と関連のある行動を明らかにすることを目的とする。

## 仮説

大学生の身近な行動として「座席」とコミュニケーションツールである「LINEの使用状況」について取り上げる。先行研究では座席と成績、学習意欲の関連が先行研究で明らかになっている。しかし、座席は学習意欲だけでは決まらず複合的な要因が考えられている。しかし、座席と学習意欲以外の関連を調べた先行研究はあまり多くない。

そこで、友人同士で座ることも多い点に着目し、「座席（行動）が後方になるほど、コミュニケーションへの意識が高い（性格の）人の割合が多くなる」と仮説を立て調査を行った。コミュニケーションへの意識を測る指標としてLINEの使用状況の質問項目を設定した。

## 研究方法

### 1.調査対象者

社会調査実習履修者に調査票を配布し、70名のうち61名（男性23名、女性36名、その他2名）から回答を得た。

### 2.調査時期

2021年12月2日～12月22日に実施した。

### 3.調査方法

社会調査実習の授業内にMicrosoft Formsでの回答を依頼した。

### 4.調査内容

質問紙はフェイスシート（性別、年齢）と「座席の位置と大学入学後の LINE の使用状況について（4 項目）」「性格について（10 項目）」「コロナ前後（コロナ流行前と現在を指す）での他者との関わりについて（10 項目をコロナ前・後の 2 回、計 20 項目）」の構成で行った。「座席の位置」については以下の図 1 に示すような 12 件法で尋ねた。「入学後に増えた LINE の登録人数」については「～5 人」「6 人～10 人」「11～15 人」「16～20 人」「21 人～」の 5 件法、「入学後に登録した人の何割と連絡を取っているか」については「～10%」「～30%」「～50%」「50%～」の 4 件法、「LINE の交換を」については「自分から提案することが多い」「どちらかという自分から提案することが多い」「どちらかという相手方提案されることが多い」「相手から提案されることが多い」の 4 件法、その他の質問は「当てはまる」「やや当てはまる」「あまり当てはまらない」「当てはまらない」の 4 件法で求めた。

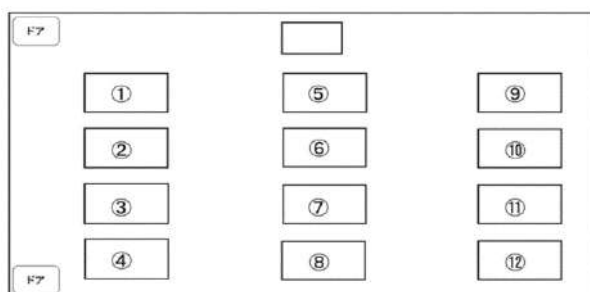


図 1：座席表

## 結果

有効回答数は 61 名（男性 23 名、女性 36 名、その他 2 名）であった。このレポートでは性格と行動の関連を明らかにすることが目的であるため、「座席について」「入学後の LINE の使用状況について」の項目を取り上げ、結果を記述していく。

「座席について」

結果をわかりやすくするために教室を前後に「前（1・5・9）」「やや前（2・6・10）」「やや後（3・7・11）」「後（4・8・12）」の 4 つに分けて記述する。「前」は 3 人、「やや前」は 16 人、「やや後」は 19 人、「後」は 23 人であった。

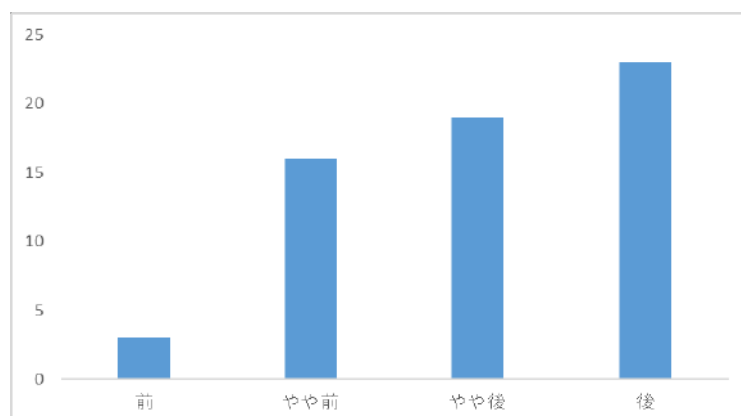


図 2：座席の位置

「入学後の LINE の使用状況について」

入学後の LINE の交換の人数は「～5人」は16人、「6～10人」は19人、「11～15人」は15人、「16～20人」は5人、「21人～」は5人であった。また、LINE の交換人数ごとにいまでも連絡をとっている割合を図3に示す。

LINE の交換人数	入学後から今でも連絡を取り続けている割合			
	～10%	～30%	～50%	50%～
～5	38%	6%	19%	38%
6～10	37%	26%	21%	21%
11～15	33%	27%	27%	13%
16～20	60%	40%	0%	0%
21～	67%	17%	0%	17%

図 3：LINE の交換人数と今でも連絡をとる割合

LINE の交換に自発的であるかは「自分から提案することが多い」が4人、「どちらかという自分から提案することが多い」が13人、「どちらかという相手から提案することが多い」が25人、「相手から提案されることが多い」が19人であった。

### 考察

まず、結果から座席と LINE の交換が自発的な人との関連を比較するために、LINE 交換が自発的な人がいた座席を図4に示す。以下の図と学生の座席の位置の結果から、「やや前」に座る人のうち自発的な人が7/17 (41%)、「やや後」が6/19 (31%)、「後」が5/23 (21%) となることがわかった。

① 0人	⑤ 0人	⑨ 0人
② 1人	⑥ 4人	⑩ 2人
③ 4人	⑦ 0人	⑪ 2人

④ 2人	⑧ 3人	⑫ 0人
------	------	------

図4：コミュニケーションに自発的な人の座席

この結果は仮説とは異なり、前に座っている人ほどLINEの交換に自発的である、コミュニケーションに積極性を持つ人の割合が高いことがわかった。先行研究では座席が後方であるほど学習意欲が低いことが明らかになっている点とこの結果とを合わせて考察すると、後方に座る人の多くに物事全般に対しての自発性がないことが想定される。今後の研究では、物事への自発性を調べる尺度と座席の位置についての調査の必要があるだろう。

もう一つの指標として、LINE交換後に継続して連絡を取っている割合が30%以上だった人の座席を図5に示す。以下の図から、コミュニケーションを維持しようとする人は「前」では2/3(67%)、「やや前」は6/16(38%)、「やや後」は6/19(32%)、「後」は9/23(39%)であった。

① 1人	⑤ 1人	⑨ 0人
② 2人	⑥ 2人	⑩ 2人
③ 1人	⑦ 2人	⑪ 3人
④ 3人	⑧ 2人	⑫ 4人

図5：コミュニケーションを維持する傾向を持つ人の座席

この結果から、「前」においては分母が3と小さく、割合として大きくなりがちである点を考慮すると、)どの座席においてもコミュニケーションを維持しようとする人の割合はあまり変わらないことがわかった。この結果も仮説とは異なるものであったが、コミュニケーションを維持しようとする人、つまり友人関係を持つ人がどの座席にも同じような割合でいることがわかった。このことは、どの座席でも友人関係を伴ったうえでの着席が多いとの証明になりうると考える。友人関係と座席の関連を示唆する結果となったが、今回の研究では明確なデータを示すことができなかった。今後の研究では、友人関係についての尺度を用いての調査が必要になるだろう。

## まとめ

今回の調査では、コミュニケーションを意識する人ほど後方の座席にいるという仮説に沿わない結果となった。しかし、コミュニケーションの積極性や維持しようとする傾向を持つ人と座席との間に、関連を示唆する結果も得ることができた。今後の調査では、自発性や友人関係の尺度を用いて検討していきたい。

## 参考文献

令和2年版犯罪白書第4編第9章第1節

厚生労働省「精神障害（精神疾患）の特性（代表例）」

下鶴幸宏,中野正博（2008）座席による学生の勉学意欲の違いの調査研究(バイオメディカル・ファジィ・システム学会誌 Vol.10, No2, pp.149-158)

## 他者との関わりとパーソナリティ

19C129 小寺 歩

19C214 宮坂 祐太

19C220 山田 秀

### 1.問題と目的

近年、コミュニケーションスキルや人との関わり方について注目されていると言える。特に事故や事件があった際に、当事者のコミュニケーションスキルや人格であったかなどが調べられていたりする。それは実社会の中だけでなく、インターネットや SNS 内でのコミュニケーションのとり方についても多くの人に関心が持たれている。また、新型コロナウイルスの流行拡大により、その先頭を各個人の他者との関わり方やパーソナリティの面でのような変化が起こったのかについても調査すべき点である。そこで本調査では、他者との関わり方がその人のパーソナリティや人格にどう影響しているのか、またコロナ禍での生活がそれをどのように変化させているのかを明らかにする。

### 2.方法

#### 調査方法

Microsoft Forms を用いて、調査票を配布、回答を得た。

#### 調査対象者

社会調査実習履修者 70 名のうち 68 名(男 26 名、女 42 名)に調査票を配布した。

#### 調査時期

12 月 2 日～12 月 23 日

#### 調査内容

日頃の授業でどの座席に座ることが多いのかを調べるため、Q1 座席を教室内の横 3×縦 4 の 12 に分けた座席の選択肢の中から選ばせた後、以下の質問をした。「Q2 入学後に増えた LINE の登録人数」を～5 人、6 人～10 人、11 人～15 人、16 人～20 人、21 人～の 5 件法で質問した。「Q3 入学後に登録した人の何割と連絡をとっているか」を～10%、～30%、～50%、50%～の 4 件法で質問した。「Q4 LINE の交換について」を、自分から提案することが多い、どちらかという自分から提案することが多い、どちらかという相手から提案されることが多い、相手から提案されることが多い、の 4 件法で質問した。また、性格について、「Q5 自分は人と話すのが好き」「Q6 大勢といるより一人の方が気が楽だ」「あらゆることを一人でも楽しめる」「Q7 どんなに仲良くなっても完全に信頼できる人はいないと思う」「Q8 自分は活発な方だと思う」「Q9 自分は好奇心旺盛な方だと思う」「Q10 他人の目が気になる方だ」「Q11 自分が気にする必要のないことまで気にしてしまう」「Q12 自分は心配性ではないと思う」「Q13 新しいことに挑戦するのが好きだ」の各項目を、当てはまる、やや当

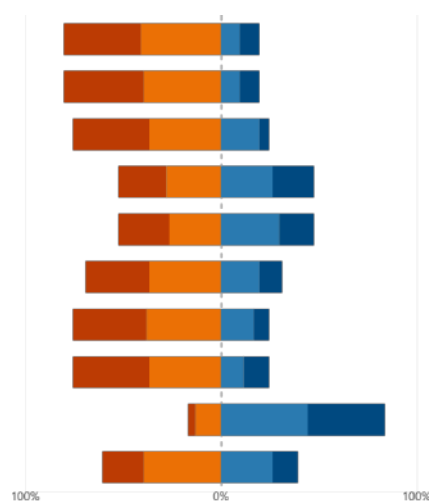
てはまる、あまり当てはまらない、当てはまらないの4件法で質問した。次に、コロナ前について、「Q14 外出時、他の人の視線が気になる」「Q15 周りの人は私のことを気にしている」「Q16 家から出たくないという気持ちが強い」「Q17 満員電車に乗ると息切れや頭痛などの症状が出る」「Q18 初対面の人と話していることに対して抵抗がない」「Q19 外出は自分の居場所が無いように感じる」「Q20 知っている人と話していることに対して抵抗がない」「Q21 私は人見知りだ」「Q22 混んでいる場所に行った後は体調が悪くなる(頭痛や吐き気、腹痛など)」「Q23 自分の歩くスピードは混んでいる場所に行くと早くなる」を当てはまる、やや当てはまる、あまり当てはまらない、当てはまらないの4件法で質問した。Q24~Q32では、コロナ後についても上記と同じ質問をした。最後に、血液型を質問した。

### 3.結果

有効回答数 61名(男 23名、女 36名、その他2名)

座席についての質問では、8番(最後列の真ん中)を筆頭に、後ろの席が最も多い結果となった。入学後に増えたLINEの登録者数は、15人以下までの項目が多く、16人以上の登録者数が増えた人は18%程だった。また41%の人は入学後に登録した人のうち10%以下のものとしか連絡をとっていなかった。LINEの交換については自分から提案する者よりも相手から提案されるものの方が圧倒的多数となった。Q5~Q12の性格に関する質問では、逆転項目を除く全ての項目で当てはまる、やや当てはまる、が多くの回答を得た(図1)。コロナの前後についての質問では、ほとんどの項目において頃な前後で大きな変化は見られなかったが、唯一、「知っている人と話すことに対して抵抗がない」という項目では、コロナ前に約10%であった当てはまらない、やや当てはまらないという回答が約30%にまで増加していた(図2)。また、座席と性格など、項目同士のかかわり合いを今回の調査では発見できなかった。

- 自分は人と話すのが好き
- 大勢といるよりも一人でいる方が楽だ
- あらゆることを一人でも楽しめる
- どんなに仲良くなっても完全信頼できる人は居ないと思う
- 自分は活発な方だと思う
- 自分は好奇心旺盛な方だと思う
- 他人の目が気になる方だ
- 自分が気にする必要のないことまで気にしてしまう
- 自分は心配性ではないと思う
- 新しいことに挑戦するのが好きだ



当てはまる やや当てはまる あまり当てはまらない 当てはまらない

図1 性格についての質問

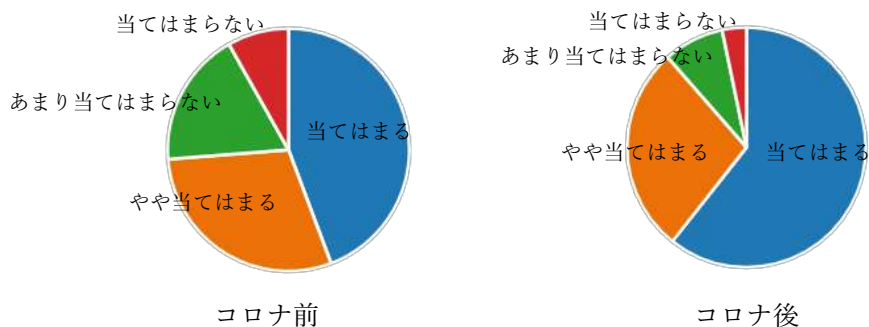


図2 知っている人と話すことに対して抵抗がある

#### 4.考察

座席について、後ろの席と回答した者が多かったことに対しては、日頃の授業の様子で多くが後ろ寄りに多くの人が座っていることから明らかであり、この結果はよく反映されているといえる。また、性格については、多くの者が好奇心旺盛であることや活発だと答える一方で、心配性であったり、人見知りであるという面を受け入れているということがわかった。学科の特性上、自分は活発であるという項目は当てはまらないと答える者も多いと予想したが、消極的なのは他者との関わりの面においてのみで、各個人の活動についてはそれに該当しないことがわかった。また、私は人見知りであると答えた人が多い中で、人と話すのが好きだと答えた者も多かったことから、話したいという気持ちと、それを実現させるのが困難であるという現実の差異が伺える。

また、今回の調査で最も興味深かったのは、コロナ前後における「知っている人と話すことに対して抵抗がある」という項目である。この項目は唯一、コロナ前後で明らかに結果が変化しており、コロナ後はより知人に対して抵抗を感じる人が増えている。注目すべき点は、「初対面の人と話すことに対して抵抗がある」という項目でも似たような変化は見られたが、知っている人の方が変化が顕著であることだ。これは、元々、初対面に対して抵抗はあるが、知っている人には抵抗がないと考えていた人の一部が、知っている人、初対面の両方に対して抵抗を感じるようになったと考えられる。一方で元々初対面の人に対しても抵抗がないと感じていた人の多くは、コロナ後も抵抗を感じる人が少なく、「気にする者はより気にするようになり、気にしなかった者は気にしないまま」である傾向が見られる。つまり、対人の会話において抵抗を感じていたものほど、対話面でコロナによる影響を受けやすかったとかがえられる。また今回の結果からは座席とパーソナリティなどの関連性は発見できなかった。今後更なる研究がなされる必要があると考える。



## 問題と目的

近年、コロナウイルスの影響により、感染拡大を防ぐために「密閉」、「密集」、「密接」の三密を避けるようになった。この三密は学校生活にも影響を与えており、特に対面における授業は、三密を避けるために行うことが難しい状況となった。この三密を避けるためにオンライン授業という、インターネット回線を通してリアルタイムに授業動画を視聴することや、授業を行う先生が授業を録画し、それを受講者が好きなタイミングで視聴をすることができる点が注目されている。しかし注目されている遠隔であるという点は良い部分だけでなく、遠隔ゆえに班などの小集団に別れて意見交換を行うようなグループ学習が難しい点や、インターネットを通すことから、配信者、受講者のインターネット状況によっては授業の視聴に支障が生じるなど、オンライン授業にも対面授業にはない問題点を抱えている。そこで本研究では、大学生を対象に、オンライン授業を受講している際に受講者である大学生が、受講してどのような点をメリットと感じているか、またどのような点をデメリットとして感じているかを明らかにすることを目的とする。

## 方法

### 調査対象者

2021年12月9日から翌年1月13日の期間に回答を受け付け、社会調査実習履修者70名のうち68名(男性26名,女性42名)を対象にMicrosoft Formsを用いて調査票を配布、回答を得た。

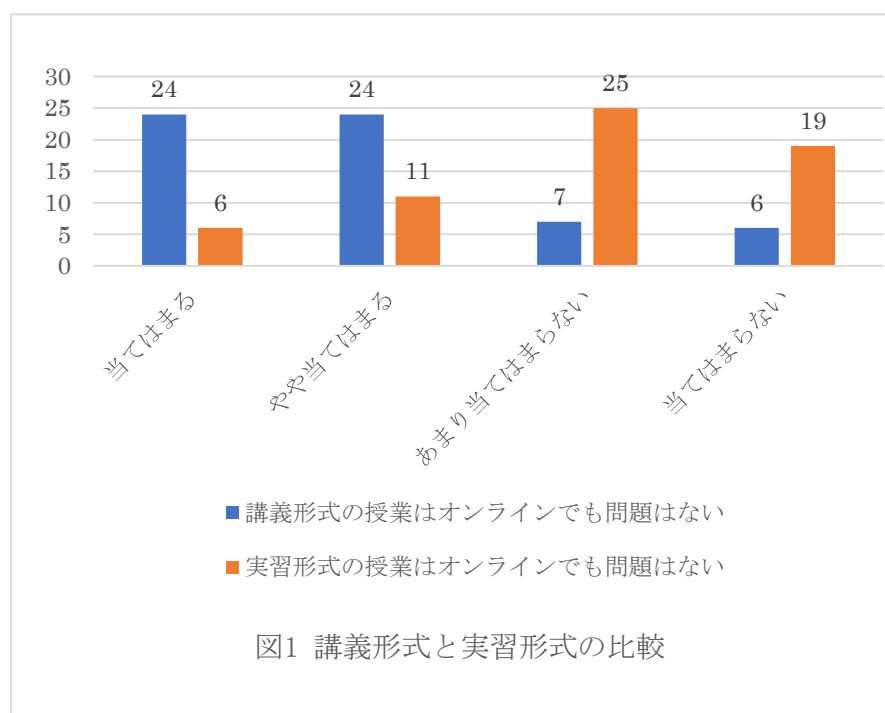
### 調査内容

質問は対面授業とオンライン授業についての違いについてと、オンライン上の課題、レポートについての15問で構成しており、内容は、Q1.「ディスカッションは対面よりもオンラインの方がやりやすい」Q2.「講義形式の授業はオンラインでも進行に問題はない」Q3.「実習形式の授業はオンラインでも進行に問題はない」Q4.「双方向型の授業でも先生に問題なく質問することができる」Q5.「オンデマンド授業でも先生に問題なく質問することができる」Q6.「オンデマンド授業での質問は、先生からの返答に時間がかかる」Q7.「双方向型の授業での質問は、先生からの返答に時間がかかる」Q8.「オンライン授業の方が対面授業より課題が進めやすい」Q9.「オンライン授業では対面よりも課題の量が増えた」Q10.「レポート、テストの提出方法が、授業により異なっている」Q11.「レポート、テスト等の提出物の提出方法の違いで戸惑うことがある」Q12.「レポート、提出物についてをオンライン上でも先生に質問できる」Q13.「オン

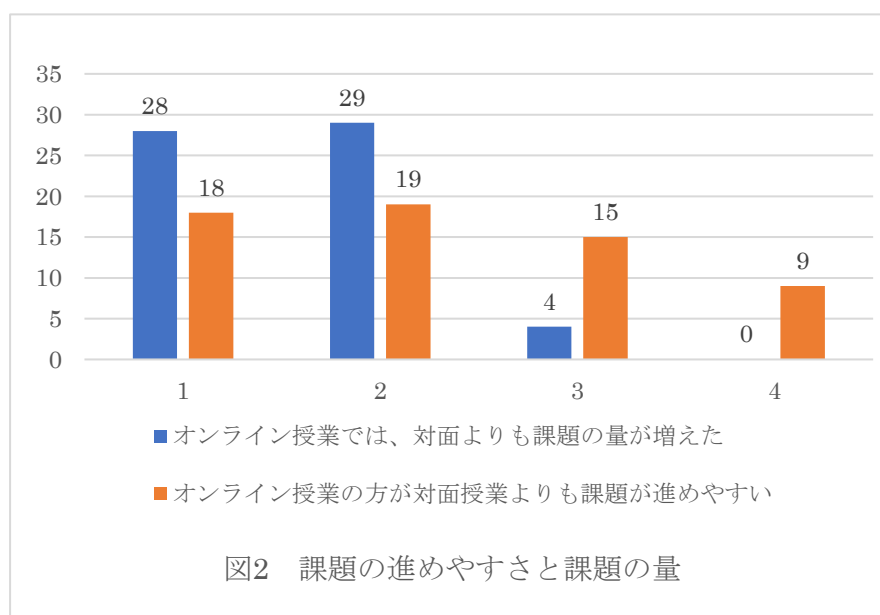
ライン上でもテスト時間の把握はできる（例）テストの残り時間が5分であることを把握できていた等」Q14.「オンデマンド、双方向型の授業中に通信環境等の問題で授業が中断されることがある」Q15.「対面よりオンラインの方が受講しやすい授業がある」としている。4件法(当てはまる,やや当てはまる,あまり当てはまらない,当てはまらない)で回答してもらい、質問項目Q11, Q14, Q15の質問は同じ4件法だが、回答項目を(ある,まあまあある,あまりない,ない)と質問内容に合うように変更した。

## 結果

有効回答数は61名となり、Q1は「当てはまる」,「やや当てはまる」に25名(43%)が回答し、「あまり当てはまらない」,「当てはまらない」に34名(58%)が回答し、ディスカッションは対面の方が良いと考える大学生がやや多くなった。Q2は「当てはまる」,「やや当てはまる」に48名(78%)が回答し、「あまり当てはまらない」,「当てはまらない」には13名(21%)と回答し、講義形式の授業はオンラインでも支障が無いと考える大学生が多くを占めていた。Q3は「当てはまる」,「やや当てはまる」と17名(28%)回答し、「あまり当てはまらない」,「当てはまらない」と44名(72%)回答し、講義形式での回答と比べて、実習形式の授業の場合は、多くの大学生が進行に支障が生じると考えていることがわかった。(図1)

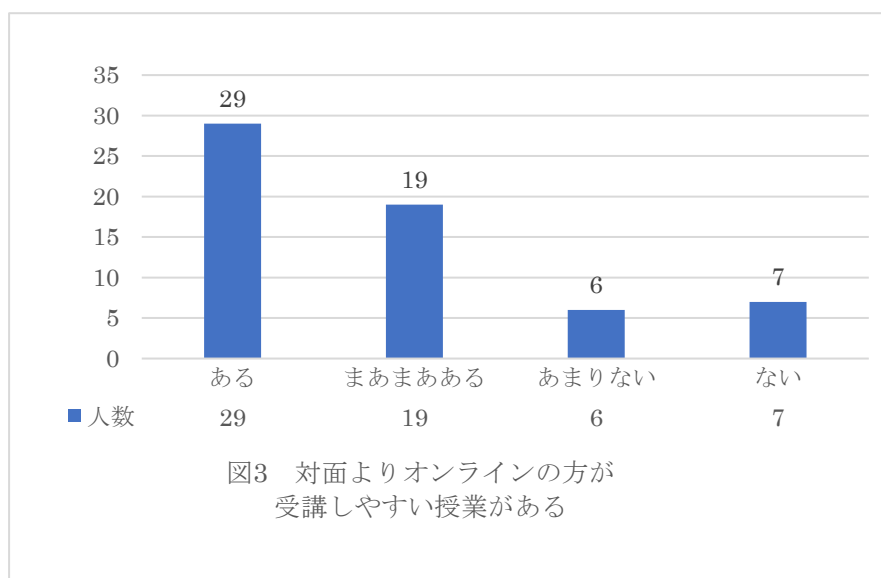


Q4では「当てはまる」,「やや当てはまる」と回答したのは23名(38%)となり、「あまり当てはまらない」,「当てはまらない」と回答したのは38名(62%)となった。Q5では「当てはまる」,「やや当てはまる」が29名(47%),「あまり当てはまらない」,「当てはまらない」と回答したのが32名(52%)となった。Q6は「当てはまる」,「やや当てはまる」が46名(75%)となり、「あまり当てはまらない」,「当てはまらない」は15名(24%)となった。Q7は「当てはまる」,「やや当てはまる」と回答したのは24名(39%)となり、「あまり当てはまらない」,「当てはまらない」と回答したのは37名(61%)となった。双方向,オンデマンド共に先生への質問は、双方向はやや質問しづらい傾向があるが大体半々に考えている大学生が多くいることがわかった。また先生からの返答については、オンデマンドは時間がかかる場合があるものの、双方向型では、質問は時間がかからずに返ってくるということがわかった。Q8では「当てはまる」,「やや当てはまる」と回答したのが37名(61%)となり。「あまり当てはまらない」,「当てはまらない」と回答したのが24名(40%)となった。Q9では「当てはまる」,「やや当てはまる」には57名(96%)となり、「あまり当てはまらない」に4名(7%),「当てはまらない」に回答した人は0名となった。オンライン授業になり、6割の人が課題が進めやすくなったと答えたが、それに対して9割以上の方が課題の量が増えたと感じており、課題が進めやすくなった以上に、課題の量が増えたと感じている大学生が多く見られた。(図2)



Q10では「当てはまる」,「やや当てはまる」に56名(93%)となり、「あまり当てはまらない」,「当てはまらない」に4名(7%)となった。Q11では「ある」,「まあまあある」に51名(84%)と回答し、「あまりない」,「ない」と回答したのは10名(16%)となった。このことからレポート,テストの提出方法の違いは9割の人が違いがあると感じており、さらに8割の人が提出方法の違いで戸惑うことがあると回答した。Q12では「当てはまる」,「やや当てはまる」が39名(64%)が回答し、「あまり当てはまらない」,「当てはまらない」に回答した人が22名(36%)が回答した。Q13に「当てはまる」,「やや当てはまる」35名(57%)が回答し、「あまり当てはまらない」,「当てはまらない」に回答したのが26名(33%)となった。Q14では「あ

る」,「まあまあある」に回答したのが48名(79%)となり、「あまりない」,「ない」に回答したのが13名(21%)になった。オンライン授業では通信環境の影響で授業が中断されたと回答した大学生は約8割となった。Q15では「ある」,「まあまあある」48名が回答し、「あまりない」,「ない」は13名(21%)が回答し、約8割の大学生が対面よりもオンラインの方が受講しやすい授業があると感じている。(図3)



## 考察

本調査では、オンライン授業のメリット・デメリットをどのように大学生が感じているかを明らかにすることを検討した。

調査の結果から、回答の結果からわかることのひとつが、図2の課題の進めやすさと課題の量の比較から、大学生はオンライン授業になり課題が進めやすくなると感じている人が約6割いる中で、約9割が課題の量が増えていると答えていることから、オンラインになり大学生が課題が進めやすくなったと感じているが、それ以上に課題量が増えているため、オンライン授業になり、課題の量が増えており、対面授業の時よりも大学生の負担が増えていることが明らかになった。課題の量が増えた理由として考えられることのひとつに、対面授業の時と違い、生徒側からの質問ができなくなっていること(高原,宮里 2021)から教員側からの、生徒の授業の参加態度などの課題以外から読み取れる評価基準を、先生が読み取ることが難しくなっていることが挙げられ、評価基準を課題のみに絞らなければならない状態になった。また、対面授業の場合と違い、テストの実施が難しくなったことが影響していることが考えられる。特に遠隔でのテストは、不正や実施時間の統一など、教員側の対応が難しいこともあり、課題の量が増えている理由であると考えられる。このことからオンライン授業のデメリットの一つとして、評価基準が課題頼りになってしまうことが挙げられ、その影響が大学生にとって課題の量が増えたというデメリットとして現れたと考えられる。また、普段テストから評価をしていた講義が、オンライン授業になり課題による評価をすることになった影響からか、講義ごとにテスト・課題の

提出方法が違っていると9割の大学生が回答している事がQ10の結果からわかり、さらにQ11では8割の大学生が提出方法の違いから戸惑うことがあることが明らかになっており、講義によって提出方法の統一がされていない事がオンライン授業のデメリットとして明らかになった。

また、オンライン授業のデメリットとして、Q8の結果から通信環境により授業が途中で中断されてしまったと回答した大学生が8割いる事がわかり、この通信環境による授業の中断は対面授業にはないオンライン授業にのみ起こる問題であり、8割と多くの大学生が授業が中断されたと回答したことから、オンライン授業においては無視できないデメリットであると考えられる。

図1の講義形式での授業と実習形式の授業の比較の結果から、オンライン授業は実習形式では難しいと考えている大学生が多くいる事が示された。特に実習形式は教員とのコミュニケーションを取りつつ行う事が多くなると思われ、前述した生徒側からの質問が難しくなっている事から(高原,宮里 2021)、実習形式の講義をオンラインで行う事が難しいと考えている大学生が多くなっているのだと思われる。しかし、講義形式の授業では、約8割の大学生が問題ないと回答しており、図3の対面よりもオンラインの方が受講しやすい授業があるという質問でも、約8割の大学生はオンラインの方が良い授業があると回答し、生徒側が受動的に授業に参加する場合はオンラインでの授業でも構わないと考えている生徒は多いという事が考えられ、大学生は講義形式の授業はオンラインで十分であるという事をメリットとして感じている事が明らかになった。

今回の調査では、一つの大学の生徒のみから調査したため、大学ごとによるオンライン授業での形態の違いについての比較ができなかった。特に講義ごとにテスト・課題の提出の違いについては大学によっては統一されている場合もあるため、今後はその要素も含めて検討して行く必要がある。また、オンライン授業という形態はコロナウイルスの流行から新しく取られるようになった授業形態であるため、教員側も生徒側も授業に対しては手探り状態である事が考えられる。今後オンライン授業に慣れていく事やコロナウイルスによる世の中の状況の変化により、大学生が感じているオンライン授業のメリット・デメリットも変化していくと考えられる。

## 引用文献

- ・高原 利幸 宮里 心一 (2021) オンライン講義と対面講義における学生の意識比較  
工学教育研究;KIT progress (29) 51-57,

## 目的

新型コロナウイルス感染症ウイルスの拡大により、大学の対面による授業が困難となった結果、大学を中心にオンライン上で授業を行うオンライン授業の普及が進んだ。対面授業からオンライン授業に移り変わり、学生の中でも対面授業を望む声とオンライン授業を望む声で分かれている。対面授業からオンライン授業になった事によるオンライン授業の利便性、オンライン授業ならではの弊害はどのようなものか。またオンライン授業を行う上で重要なのが、学生の通信環境の設備状況である。オンライン授業は基本的にスマートフォンかパソコン（ノートパソコン）で受講するのが主流だがスマートフォンもパソコンも無いという学生はオンライン授業を受講するのが困難になる。2021年現在の大学生であればスマートフォンを持っていないというのは限りなく考えにくいだが、自由に使えるパソコンが無いという学生は一定数いるだろう。また、自宅の通信設備においても使用制限のあるモバイルルーター、使用制限の無い一般的な光回線（CATV、VDSL等も含む）、中にはスマートフォンのデータ通信のみを利用し自宅にインターネット回線を引いていないという家もあるだろう。この通信環境が整っているかというのはオンライン授業を快適に受講できるかという問題に直結し、授業の定着度に関わる非常に重要な要素になる為、オンライン授業の利便性と学生の自宅の通信環境を明らかにすることを目的とする。

## 方法

### 調査方法

Microsoft Forms を用いて、調査票を配布、回答を得た。

### 調査対象者

社会調査実習履修者 70名のうち 68名（男 26名、女 42名）に調査票を配布した。

調査時期 12月2日～12月23日

## 結果

有効回答数 50名

調査内容結果は以下の通りになる。まず通信環境については、オンライン授業を快適に受講できる環境が整っているか？の問いに対して、整っている、やや整っているの回答が9割を占め、あまり整っていない、整っていないの回答は1割だった。使用している機器に関しては、スマートフォン、タブレット、パソコンのいずれかを利用しているが32名、パソコンのみが13名、スマートフォンのみが5名、タブレットのみは0名だった。自宅の通信環境については無制限のルーターが39名、使用制限のあるルーターが6名、スマートフォンのデータ通信のみを利用が0名で分からないの回答が5名だった。

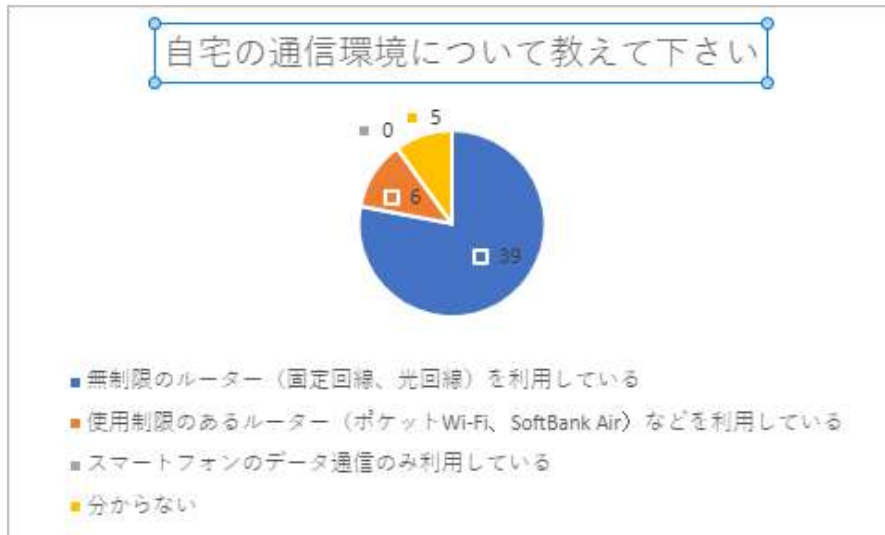


図1 自宅の通信環境について

次にオンライン授業の利便性についてだが、利便性と弊害のそれぞれ6つの設問をし複数回答と自由回答の項目を設けた。まず利便性について回答数順に並べていくと、通学時間が無くなり、生活の中で時間ができた37名、ある程度自由な時間に受講できる35名、授業を繰り返し視聴できる14名、静かな環境で受講できる7名、特にない2名、その他が1名となった。オンライン授業ならではの弊害については、グループワークでのコミュニケーションが取りづらい34名、唐突な機器トラブルの対応21名、対面授業よりも授業の理解度が下がる18名、課題が多すぎて対処できない18名、その他3名、特にない1名だった。いずれもその他の自由記述欄は確認できなかった。

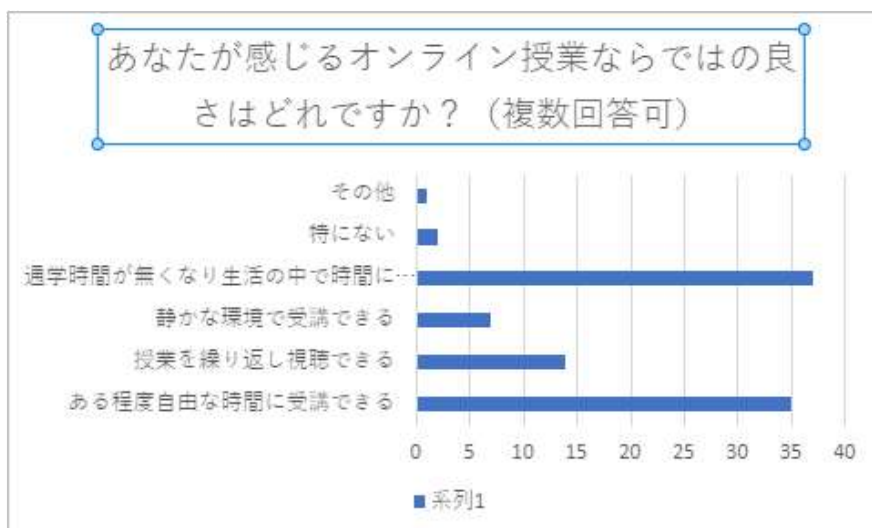


図2 あなたが感じるオンライン授業ならではの良さはどれですか？（複数回答可）

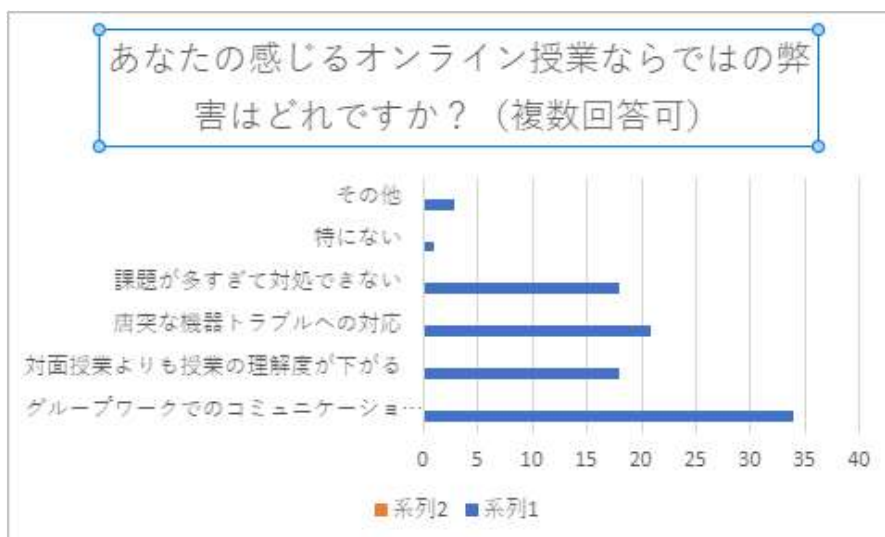


図3 あなたの感じるオンライン授業ならではの弊害はどれですか？（複数回答可）

## 考察

通信機器については回答した全ての学生が何かしらの機器を所有しており、複数端末を併用している学生が7割を超えていた為、デジタルネイティブ世代の影響を強く感じた。また、自宅の通信環境についても、使用制限のあるモバイルルーターを使用している学生が6名いたものの、固定回線の使用率が非常に高く、何よりも分からないの回答が5名しかいなかった事が衝撃だった。自宅の通信環境を問われて、即答をするというのは自身で回線の契約をしている社会人でも中には答えに詰まる人がいるだろう。にも関わらず、学生の内から自宅の通信環境について興味関心を持っているのは、オンライン授業を受ける上で重要な要素になる。オンライン授業ならではの利便性については通学時間の短縮と自由な時間に視聴ができるが特に挙げられた。自分の時間を増やしつつ、授業を受けることができるというのは学生にとっても教室にとっても大きなメリットの一つになるのではないだろうか。弊害に関しては、グループワークでのコミュニケーションが取りづらいという点が頭一つ抜けていた。コミュニケーションを取るとい点では、どうしてもマイクの有無や通信環境等が絡んでくる為、対面には劣ってしまう。私自身もグループワークがメインの授業をオンラインで受講していたが、オンラインでのグループワークは厳しい部分を感じていた。今回の調査では、学生が自身の通信環境について興味関心を持っていること、オンライン授業にはメリットもあるがデメリットもあることが判明した。コロナウイルス終息後に、このオンライン授業という授業形式を失くしてしまうのではなく、オンデマンド教材等を活用しお互いの良さを活かした教育展開がされることを祈る。



## 一人暮らしのアルバイトと抑うつ症状の関連性

19C110 石川穂乃佳、19C122 漆畑亨哉

19C163 坂優莉奈、 19C182 田島慶典

### 問題と目的

近年、新型コロナウイルスの感染拡大により、多くの人の精神的影響が懸念されている。中でも大学生のアルバイトは大きな影響を受けている。「マイナビ 大学生のアルバイト実態調査(2021)」の大学生のアルバイト就業状況によると、2021年はアルバイト就業中の学生は62.9%であった。前年の2020年は71.8%で、比較すると8.9pt減少している。また、同調査の非就業大学生のアルバイト意向によると、現在働いていない人のうち、長期休み中に「アルバイトをしてみたいと思う」、または「ややしてみたいと思う」と回答した人は、2021年では64.8%、2020年では57.3%、学期中に「アルバイトをしてみたいと思う」、または「ややしてみたいと思う」と回答した人は、2021年では52.8%、2020年では46.6%と、どちらもアルバイトをしたい人の割合が前年より増加している。アルバイトをしたい人が増えているのにも関わらず、実際にアルバイトをしている人が減少している。このような結果になった原因は、新型コロナウイルスによってアルバイトをしたくてもできなかつたり、解雇されたりする大学生が増加したと推測される。地方から来た学生や、保護者からの援助を受けていない一人暮らしの学生は、学費や生活費等、たくさんのお金があるにも関わらず、アルバイトができなくなると、収入がなくなる。稲葉(2002)によると、低所得者に高いディストレス(抑うつ)が経験されることが示されていることから、アルバイトができない大学生は、抑うつになりやすいことが考えられる。また反対に雇われている学生が長時間労働をさせられるなどの「ブラックバイト」も問題視されている。学生にも関わらず、一週間

に多くの出勤があり、学業や精神的健康に影響が出てしまう可能性があると考えられている。

さらに、一人暮らしも抑うつに関連性があるとされている。別所(2009)は、大学生の一人暮らしが、抑うつ感に影響を及ぼすであろうことが示唆されているとし、崔・久永・竹澤(2017)もまた、「抑うつ・不安」において、一人暮らしをしている学生の方が一人暮らしをしていない学生よりストレス反応が有意に大きいと示している。これらのように、新型コロナウイルスによって起こる抑うつの影響の背景には、居住環境が変化し(一人暮らしや一人暮らし以外等)、アルバイトができなくなるなどの要因が考えられる。

以上のことから本調査の目的は、一人暮らしが抑うつ症状に及ぼす影響を、アルバイトという要因を含め検討していく。また、アルバイトの頻度によって、抑うつ症状が変わるかどうかも検討していく。

## 方法

### 調査方法

Microsoft Forms を用いて、調査票を配布、回答を得た。

### 調査対象者

社会調査実習履修者 70 名のうち 68 名(男性 26 名、女性 42 名)に調査票を配布した。その内、53 名(回答率：約 77.9%)から回答を得た。

### 調査内容

現在の居住形態を「一人暮らし」か「一人暮らし以外」で、また、週にどの程度アルバイトをしているかを、週に 0 回(アルバイトをやっていない)から週に 7 回までを選んでもらった。抑うつ症状を測定する尺度は、「簡易抑うつ症状尺度(Quick Inventory of Depressive Symptomatology: QIDS-J)」を用いた。また教示文として「現在から 2 週間前程度振り返ってご回答ください」と記述した。抑うつ点数は QIDS-J の採点方法を参考にした。

## 調査時期

2021年12月9日～2022年1月13日

## 結果

有効回答数は53名であった。

### 抑うつ症状の平均得点・標準偏差

本研究では、一人暮らしをしてアルバイトをしている (N=3)、一人暮らしをしてアルバイトをしていない (N=2)、一人暮らし以外でアルバイトをしている (N=39)、一人暮らし以外でアルバイトをしていない (N=9) に分けた。抑うつ症状の平均点数を算出し、高い順から、一人暮らしをしていてアルバイトをしていない (M=15.000)、一人暮らし以外でアルバイトをしていない (M=9.222)、一人暮らしをしていてアルバイトをしている (M=8.333)、一人暮らし以外でアルバイトをしている (M=6.128) であった (SD はそれぞれ 3.399、4.000、4.398、5.865)。それを図1と表1に示す。

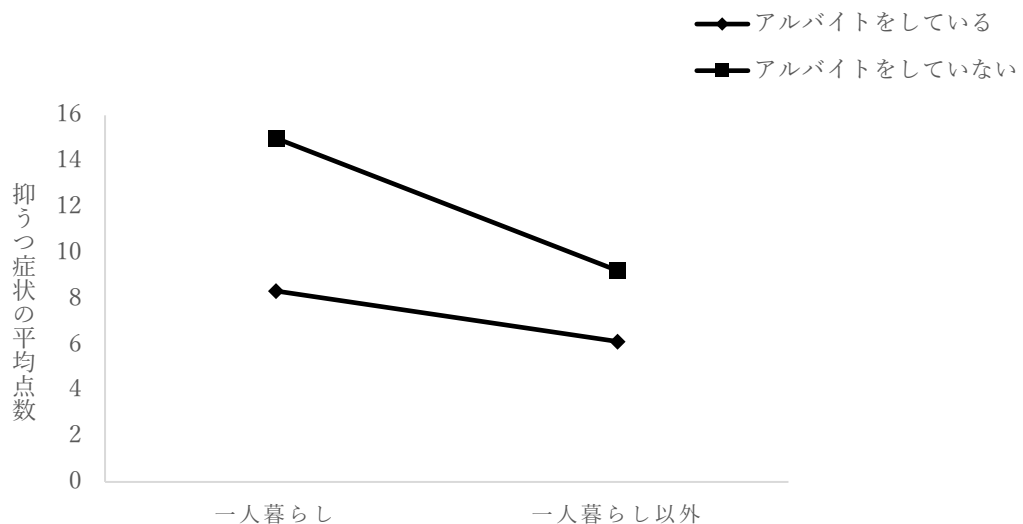


図1 一人暮らし・アルバイトと抑うつ症状の平均点数

表1 各群の人数・抑うつ症状の平均点数・標準偏差と2要因分散分析結果

アルバイト	一人暮らし			一人暮らし以外			一人暮らし の主効果	アルバイト の主効果	交互 作用
	N	M	SD	N	M	SD			
している	3	8.333	3.399	39	6.128	4.398	2.85 +	4.26 *	.57 ns
していない	2	15.000	4.000	9	9.222	5.865			

\*\* p < .01, \* p < .05, + p < .10

### 一人暮らしとアルバイトの二要因分散分析

本調査の目的は、一人暮らしとアルバイトが抑うつ症状に及ぼす影響を検討することであった。そのため、一人暮らしとアルバイトの2つの要因を独立変数とし、抑うつ症状を従属変数とした二要因分散分析を行った。その結果を表1に示す。

その結果、一人暮らしの主効果 (F=2.85, p<.10) とアルバイトの主効果 (F=4.26, p<.05) が認められた。

### アルバイトの頻度と抑うつ点数との相関分析

さらに、アルバイトの頻度によって、抑うつ症状が変わるかどうかも検討するため、アルバイトの頻度と抑うつ点数の相関分析を行った。その結果を表2に示す。

表2 アルバイトの頻度と抑うつ点数の相関

	アルバイトの頻度	抑うつ点数
アルバイトの頻度	1.000	
抑うつ点数	-.407**	1.000

その結果、アルバイトの頻度と抑うつ点数には、中程度の負の相関が見られた ( $r=-.407, p<.01$ )。また、散布図を図2に示す。

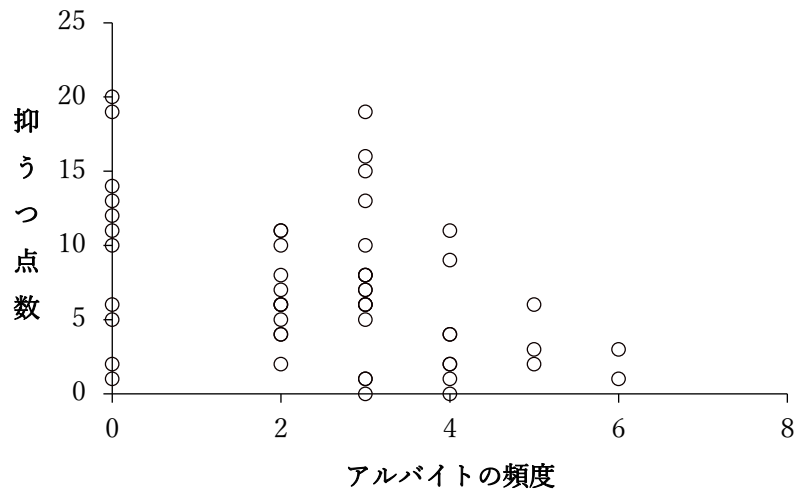


図2 アルバイトの頻度と抑うつ点数の散布図

## 考察

本研究の目的は、一人暮らしが抑うつ症状に及ぼす影響を、アルバイトという要因を含め検討していくことと、アルバイトの頻度と抑うつ症状の関連も検討していくことであった。

### 一人暮らしとアルバイトの二要因分散分析

一人暮らしとアルバイトの二要因分散分析の結果、一人暮らしでは 10%水準で、アルバイトでは 5%水準で主効果が認められた。

まずは一人暮らしの結果から考察していく。一人暮らしをしている場合としていない場合の抑うつ平均点数を比較すると、一人暮らしをしている場合の方が、アルバイトをしている場合としていない場合のどちらでも、抑うつ平均点数が高かった。一人暮らしの主効果が得られたことと、一人暮らしをしている場合の方が、していない場合より、抑うつ平均点数が高いことから、一人暮らしをしていると抑うつ点数が高くなるといえる。

次にアルバイトの結果から考察していく。アルバイトをしていない場合としている場合の抑うつ平均点数を比較すると、アルバイトをしていない場合の方が、一人暮らしをしている場合としていない場合のどちらでも、抑うつ平均点数が高かった。アルバイトの主効果が得られたことと、アルバイトをしていない場合の方が、している場合より、抑うつ平均点数が高いことから、アルバイトをしていないと抑うつ点数が高くなるといえる。

二つの共通点を考えると、どちらも人間関係が少ないという点が挙げられる。つまり、人間関係が少なくなると、抑うつは高まる。その要因は、ソーシャルサポートが受けられない、または少ないからだと考える。ソーシャルサポートは精神的健康において重要な役割を果たす。西田・山口・東郷・佐々木(2020)によると、相談相手のいない（または少ない）人では抑うつ症状を有するリスクや症状の程度が高いことが認められている。一人暮らしをしている場合の方が、していない場合より、家族との関わりが減る。また、アルバイトをしていない場合、している場合より、アルバイト先での交友関係等が作れない。このように、より人間関係が狭くなる方が、ソーシャルサポートが受けられない、または少なくなり、抑うつ症状が出やすくなるのではないかと考える。

#### **アルバイトの頻度と抑うつ点数との相関分析**

アルバイトの頻度と抑うつ点数の相関分析の結果、2つの変数の間には、中程度の負の相関が認められた ( $r=-.407, p<.01$ )。

二要因分散分析の結果では、人との関わりが少なければ、抑うつ点数が高くなるという結果だったが、相関分析の結果も同様に、週の出勤が少ない方が週に出勤が多い方より、抑うつ点数が高いという結果になった。因果関係は分析結果からいえないが、二要因分散分析の結果から、人との関わりが少ない方が多い方と比べて、抑うつ点数が高いことがいえるため、アルバイトの頻度が多いから、抑うつ点数が高くなると考えられる。

## 今後の展望

本研究では、各群の人数のバラツキが多かった。また、アルバイトの頻度と抑うつ点数の因果関係も分からなかったため、今後の課題として、各群の人数をそろえるサンプリングをし、アルバイトの頻度と抑うつ点数の因果関係を検討していきたい。

## 引用文献

別所崇(2009). 抑うつ傾向における人間関係の有無の影響について—大学生を対象とした実証的研究— 奈良大学大学院研究年報, 14, 111-124.

稲葉昭英(2002). 結婚とディストレス 社会学評論, 53(2), 69-84.

マイナビキャリアリサーチ Lab(2021). 「大学生のアルバイト実態調査(2021年)」  
[https://career-research.mynavi.jp/research/20210428\\_8699/](https://career-research.mynavi.jp/research/20210428_8699/) (2022年1月15日)

西田明日香・山口智史・東郷史治・佐々木司(2020). 相談相手の数と不安・抑うつ症状の関連を調査した横断・縦断的研究のレビュー 不安症研究, 12(1), 16-26.